第五　リンゼー（友愛結婚の元祖）

1　友愛結婚毆らる

『友愛結婚』が三千人の教會員から、滅茶々々に擲られた上、拘引された……。

かう書き始めると、近頃流行のナンセンスものには、うつてつけの材料のやうだが、當人達にとつては、どうしてナンセンスどころか、始めて友愛結婚を實行した一對の男女のやうな眞劍さである。それにこの騷動を見た一般人も、今更に『友愛結婚といふものは、いゝものなのか、惡いものなのか。』

と考へ出して、今アメリカでは名物のジヤズのやうな八かましさで、この問題が論じあはれてゐる。

明けて昨年の暮のことだが、紐育で有力な牧師達が組織してゐるチャーチマン協會といふが判事リイゼーを呼んで、『友愛結婚』のことを聞かうといふことになつた。大體、話しは纏つたが、

おそがけに横槍を入れたのは、同協會切つての有力家で、マンニングといふ監督。そんな墮落書生の寢言みたいなことを聞く奴があるものかと、偉い反對であつた。

ところが、この事の可否を會員の投票に問ふてみると、『馬には乘つてみろ、云ふことは兎に角聞いてみろ』とあつて、リンゼー判事に講演をやらせる組の方が勝つてしまつた。監督マンニングとしては、心甚だおだやかでない。その前に自分の意見を發表する必要があるといふので、十二月七日の日曜説教に、自分の牧する聖ジョーンス教會で『友愛結婚の正體を批判す』といふ頗ぶる挑戰的な題目で話しをすることを廣告した。

これを聞いた判事リンゼーも負けてはゐない。直ちに監督や新聞に手紙を送つて、自分もその教會に行つて説教を聞く事、許されゝば自分の立場を辯明したいことを豫告した。これが評判になつて、流石の大教會もその朝は身動きも出來ないほどの大入りで、會衆三千五百名。萬一のことがあつてはといふので私服巡査もその間に交つてゐた。

當の判事リンゼーはとみると、教壇の下の新聞記者席に陣取つて、紙と鉛筆を出して、一語も聞き洩さじと頑張つてゐた。普通人よりも餘程背が低くて、五尺をそう澤山も出て居らないであらうかれの身體は、教會の深椅子の蔭にかくれた。迫害と苦鬪が、かれの一生を通ずる常住の姿

ではあるけれども、その小さい身體で、たゞ一人敵陣の中に切つて入る大膽不敵さが、その人の立場によつて、面憎くも見え、雄々しくも見えた。

2 「私刑にしろ」

いよ〳〵說敎は始められた。マンニング監督の聲も、さすがに激昂にふるへてゐた。

監督は激越な調子でリンゼー判事と、その著者を攻擊した。『かれは無責任な性慾論者であります。かれは淫亂と放埒と男女道德の腐敗を宣傳奬勵する卑劣漢であります』といつたし、また『かれは巧みに人心を迷はし、道德を破壞せんとする法律化された賣淫である。若い男女が同居しながら、懷妊をふせぐために、いろ〳〵な手段を講ずる如きは、許すべからざる倒倫な行爲ではないか。かくの如き穢れた人間を敎會に招くとは言語道斷である……』ともいつた。

說敎が終ると、敎壇の下に人影が動いて『監督マンニング！』

と鋭く呼びかけたものがある。それはいふまでもなくリンゼー判事であつた。監督はその聲が聞えぬげに、背を會衆にむけ、聖壇の方に頭を垂れて祈禱し始めた。

『監督、あなたの云はれたことは全然中傷です。この會堂が神の宮であるならば、それはまた聖

靈の宮であるべきです。聖靈の名によつて私は貴下の中傷に五分だけ、お答へしたい……』

リンゼー判事は、水のやうに靜かになつた會堂で、かう叫びながら敎壇の方に進んだ。監督の祈禱はリンゼイの聲に沒しさられたがかれは振りむきもしなかつた。

突然大きな番人の手が、背後からリンゼー判事に躍りかゝつた。案內人二人で、この小男を敎壇から引き離すに困難はなかつた。その頃になると、三千五百の會衆は總立ちになり、禮服を着た百餘名は一齊にリンゼイに襲ひかゝつた。

『毆れ！』

と誰かゞ叫ぶと、一人の會員の鐵拳はリンゼイの頭に雨下した。口穢い罵詈が、日本の衆議院のやうな低級さで舞つた。リンゼイの座席であつた記者席は會衆に占領され、さしもの大敎會は煙草盆をかへしたやうな混雜に陷つた。

『監督は嘘つきだ。君は何の權利があつて、人の個人攻擊までしようといふのだ。こゝは聖靈の宮でもなく、神の宮でもない……。』

リンゼーは押へられながら、そう呶鳴つた。それがまた會員の怒りを買つて、會衆は殺氣をふんで判事に飛びかゝつた。一人の婦人が、

『私刑にしろ、私刑にしろ。』

といふと、會衆からは『やれ〳〵』といふ者もあつた。あはや大事に到らうとした時に四名の探偵は、會衆を押しぬけてかれを危ふいところから救ひ出した。

リンゼイは直ちに囚人護送自動車で、第百街警察署に引致され、治安妨害で告發されたが、かれの友人である辯護士ヘイズが驅けつけ、それに有名なクラレンス・ダローも口をきいて、かれは保釋出獄したのであつた。

3　社會正義のため辯護士に

『リンゼイは僞ものゝ賣名家か、それとも眞ものゝ社會改良家か……。』

それでなくても今まで、いろ〳〵な批評の眞中にあつたリンゼイは、この事があつてから、また問題にされ出した。

私は昨年の秋、かれの故郷であるデンヴア市を訪づれたことを思ひ出してゐる。ロッキー山の麓にあつて、屏風のやうな山に圍まれてゐる町が、かれが半生の苦闘を送り、しかも最後には住人のために追はれた場處である。

『なぜ、あなたは少年裁判に興味を持つやうになつたのですか。』といふ記者の質問に答へて、かれはこんな話をした。

『まだ昔しを語るやうな老人でもないのですが、日本からのお客様だ、お話ししませうか。まア手帳などをお出しにならないで、煙草でもおつけなさいよ。私は貧乏人の子でしてね、十七歳の時に親父を失くすと、その時から四人の兄弟と母のために働かねばならなかつたのです。それも父は一萬五千弗の生命保險に入つてゐたのですが、最後の掛金をしてなかつたといふので會社は一文も拂はない。その上に、その頃私と一緒に働いてゐた掃除人が、極めて不公平な裁判を受けました。一體貧乏人といふのは、なんの咎で、かういふ惡いまはり合せを甘受しなければならないか。私はその時から、どうしても辯護士になつて、金がなくても正しい裁判を受けられるやうな仕組にしようと決心したのです……。どうも事は志しと違ひがちですがネ。』

とかれは淋しく笑つた。

かれは十七歳で一家五人の口を引受けて、朝は新聞配達・晝は土地會社で働き、それから晩はある店の掃除をした。かうして二十四時間を二倍にもして働きながら、暇をみて法律書を勉强し二十七歳の時に辯護士試驗を及第し、三十歳には判事になつた。

うに叫び續けてゐる。

『私が少年少女の犯罪取扱ひの方針を一變したのは、その時からなのです。』

判事はそういつて私の顏をみた。

4　現はれた少年惡漢

いつかデンヴァに稀代な惡漢が現はれた。强盜、强姦、殺人、放火、竊盜――あらゆる犯罪が行はれたが、それが不思議に同じやり口である。市民は人心惶々として安い氣持もなかつた。

その惡漢が、とう〳〵つかまつたが、捕へてみて驚いたのは、この稀代の强盜が、とつて僅か十九歲の少年である。丁年以下の犯人は少年裁判所に送られねばならぬ。警察官は、この惡漢を高手小手に縛しめて、意氣揚々とリンゼー判事の許に護送して來た。

『どうか、その手錠などは一切とつて下さい。』

判事は、犯人を見てまづそういつた。

『この惡漢の縛を解いていゝのですか。』

『わたしはこの裁判所の所長です、私のいふ通りにやつて下さい。』

リンゼーは他人を避けて、三時間の間、この少年惡漢と二人で懇談した。そして結局かれ――その名をトムといつた――を三ケ年の感化院に送ることにした。

『トム、お前はお金を持つてゐるか』

リンゼーは立ち際にいつた。

『一文もありません』

『よし、それではこゝに二十五仙の銀貨が二つある。この一つで晝飯をたべなさい。も一つで、電車の切符をかつて、一人で感化院までお出でなさい。』

この稀代の惡漢を、一人の護送もつけずに市中に放り出すことに對して、デンヴァ市民が、破れるやうな騷ぎをしたのは申すまでもない。しかも更に驚くべきことはその日の三時になつても四時になつても、この少年は感化院に現はれなかつたのである。

『犯人の脫走！』

そう騷いでゐる晩の十一時頃になつて、この惡少年は感化院の扉を叩いた。かれは見るからに疲れ切つてゐる。聞いてみるとリンゼーの許を辭して十餘時間の間、かれは『逃げようか』『逃げまいか』で苦しい心中の戰ひを戰ひ通して來たのであるが、リンゼー判事の信任に對して、結

『判事といつても、二千弗以下の民事と、二十一歳以下の青年男女の重罪犯及び輕罪に關する取扱ひだつたんです。併し不思議にもこれが現在の道を開く手びきになりました。』

と判事は續けた。ある日、一人の少年トニー・コステロといふものが、貨車から會社の石炭を盜んだ廉で鐵道會社の探偵に連れられて來た。この少壯判事は型通りの公判で、少年トニーを州感化院送りとする判決を與へた。

この瞬間、法廷の傍聽席から『ワーツ』といふ泣き聲が起つた。見るとそれは老婆である。かういふことは法廷では必ずしも少ないことではないので、かれはそのまゝ判事室に這入つてしまつた。

『併しこの時の老婆の泣き聲は何時までも聞えるんです。餘り氣になるので、も一度法廷に出てみると、ボロ〳〵の着物をきて、貧のドン底にあへぐ齒のぬけこけた老婆が、法廷の壁にもたれて、守衛のいふことを聞かずにすゝり泣いてゐるのです。わたしはこの時ほど考へさせられたことはありません。人間は他人の悲劇を茶のみ事にしてしまひがちだ。私達は死刑の宣告を與へた次の瞬間にさへも平氣で馬鹿話しをしたり、クラブでカクテルを呑んだり、ゴルフをやつたりするが、當人とかれをめぐる人の身になつたらどうだらう。われ等は他人の運命を傷け

るのに、もつと賢明で周到でなければいけないのぢやないか。そんなことが眞劍に考へられたのです。』

かれは、その足で直ぐ檢事局に行つた。そして、

『法律的にはどうか知らないが、トニーの判決は一時保留させて下さい。』

と頼んで、その子供を母の手に歸し、一緒にこの親子の家に行つてみた。

この家はイタリー人區域の貧民窟にあつたが、その家は二間しかなく、扉をあければ臭氣が鼻をつくといふ狀態であつた。一人の年老つた父が、鑛山で十四時間十五時間も働いた揚句が、鑛毒のため半身不隨で寒さの中に震へてゐる。全家族は何等食ふものさへなく、飢のために死を待つのみである。

『十二歳になるトニーは、せめて寒さをしのぐために、停車場に投げ出されてゐる貨車から一俵の石炭のサックを盜んだのです。病身の親の寒さを防ぐために盜みをした少年を、われ等は嚴しく罰する權利があるでせうか。そういふ經濟組織と、それから無智には誰がしたのですか。』

問題が、こゝに來るとリンゼイ判事の舌端は火のやうに燃えた。三十年以前にこの少壯判事を怒らした社會組織は、今少しも改善されて居らないのだ。かれは依然として野に叫ぶ豫言者のや

うに叫び續けてゐる。

『私が少年少女の犯罪取扱ひの方針を一變したのは、その時からなのです。』

判事はそういつて私の顏をみた。

4　現はれた少年惡漢

いつかデンヴァに稀代な惡漢が現はれた。强盜、强姦、殺人、放火、窃盜――あらゆる犯罪が行はれたが、それが不思議に同じやり口である。市民は人心惶々として安い氣持もなかつた。

その惡漢が、とう〳〵つかまつたが、捕へてみて驚いたのは、この稀代の强盜が、とつて僅か十九歳の少年である。丁年以下の犯人は少年裁判所に送られねばならぬ。警察官は、この惡漢を高手小手に縛しめて、意氣揚々とリンゼー判事の許に護送して來た。

『どうか、その手錠などは一切とつて下さい。』

判事は、犯人を見てまづそういつた。

『この惡漢の縛を解いていゝのですか。』

『わたしはこの裁判所の所長です、私のいふ通りにやつて下さい。』

リンゼーは他人を避けて、三時間の間、この少年惡漢と二人で懇談した。そして結局かれ――その名をトムといつた――を三ケ年の感化院に送ることにした。

『トム、お前はお金を持つてゐるか』

リンゼーは立ち際にいつた。

『一文もありません』

『よし、それではこゝに二十五仙の銀貨が二つある。この一つで晝飯をたべなさい。も一つで、電車の切符をかつて、一人で感化院までお出でなさい。』

この稀代の惡漢を、一人の護送もつけずに市中に放り出すことに對して、デンヴァ市民が、破れるやうな騷ぎをしたのは申すまでもない。しかも更に驚くべきことはその日の三時になつても四時になつても、この少年は感化院に現はれなかつたのである。

『犯人の脫走！』

そう騷いでゐる晩の十一時頃になつて、この惡少年は感化院の扉を叩いた。かれは見るからに疲れ切つてゐる。聞いてみるとリンゼーの許を辭して十餘時間の間、かれは『逃げようか』『逃げまいか』で苦しい心中の戰ひを戰ひ通して來たのであるが、リンゼー判事の信任に對して、結

局一度は感化院に行かねばならぬと感じて來たのである。

『子供に對して大人と同じやうに所罰するのが間違ひです。それは決して兒童の矯正ではありません。多くは恐怖心を與へ、おどかすことを中心にしてゐるやうですが、脅かすことは嘘言の始まりです。子供から完全に恐怖心を取り去らねば眞實のことは云ひません。一度恐怖心がなくなれば子供は何でも話します。脅かすよりも同情心が必要です。』

かれは私にそういつた。その後もかれは感化院には誰もつけずに送つたが、二ケ年間に五百七名中で逃亡したものは、僅かに五名のみであつた。

5　子供の信任を裏切らず

リンゼーは子供を大人と少しも區別しなかつた。かれは決して子供の信任と自尊心を裏ぎらなかつた。こんな話しがある。

デンヴアに何時か珍らしい殺人事件があつた。官憲が、いろ〳〵調べてみると、前後の事情から、その妻君がある男と姦通をして、邪魔者である夫を除くために殺害したものであることが判明した。

しかしこれが證據になる者は、たゞ七歳になるニールといふ子供だけである。有力な參考人として、この子供を法廷に呼び出したのだが、かれは何としてもいはない。

『判事リンゼーになら話すよ。』

といふのである。リンゼーはこの子供からすつかり當夜の、なり行きを聞いた。

裁判所ではリンゼー判事を招び出した。

『ニールの證言を、あなたがしますか。』

『わたくしはニールから、その夜の出來事を全部聽きました。が、それは誰にも話さぬからといふ堅い約束で聞いたものです。これを話せばニールの信用が裏切られるばかりでなく、全アメリカ少年少女のわたくしに對する信用も、全く地に墜ちてしまひます。私はお話しすることが出來ません。』

『あなたは裁判所の命ずる證言をこばみますか。』

『やむをえません。』

『故なくして證言を拒むものは刑に處せられることを御承知でせう。』

『元より知つてゐます。』

リンゼーは結局三百弗の罰金か、一ケ年の體刑に處せられることになつた。

この事が新聞に現はるゝや、奮起したのは新聞賣子の少年達であつた。リンゼー判事に罰金を拂はせてなるものか、といふので三百弗の寄附金を募集し始めた。たちまちにして銅貨や白銅が雨のやうに集まつた。新聞賣子の少年たちは、三百弗を紙詰めにしてリンゼーの許に送つてよこした。

『こゝに金があるから、これで罰金を拂つて監獄へ行かないで下ない。』

一緒に附けてある手紙には、覺束ない文字でそう書いてあつた。さすがのリンゼーの眼には、涙がハラ〳〵と光つた。

6　少年の味方

二十七年の少年裁判所判事中に、二回だけ反對候補者が現はれた。誰も知るやうにアメリカの判事は多く選擧によるものである。

『リンゼー判事に反對候補者があるそうぢやないか。そんな奴は制裁を加へてしまへ。』

第一回の時には、かういつて奮起して中學校（ハイスクール）の生徒達が、對手の候補者の家に押しかけて、火

をつけて燒いてしまつた。候補者も流石に驚いて、途中で引き下つた。

第二回に反對候補者が起つた時には、亂暴な直接行動は起らなかつたけれども、ポスターを張ることから、ビラを配ることから、みんな子供達が集まつてやつた。この時もリンゼーが絶對多數で當選した事は無論である。

しかしこれほど子供と青年に人氣のあるかれも――いな人氣があればあるほど、一部のものからは憎まれた。ことに政治家や辯護士にとつては、かれは目の上の瘤だつた。かれは政界に勢力あるKKKといふ團體にも眞向から反對したし、政界の親分などゝいふ者はかれの眼中にはテンでなかつた。その癪にさはるかれをやつつけてやる時が來た。

かれの親友である婦人の夫が死んで、遺産が問題になつた時である。かれは紐育（ニューヨーク）の辯護士を賴んで、これを解決してやつた。そのお禮心として、その婦人は五萬弗をかれに送つたのである。

『現職の判事が、內職をして五萬弗といふ大金をせしめた。』

この事を知つた辯護士協會は、かういつて騒ぎ出した。そしてかれを濱職罪で訴へて、判事の

職から追ふたのは無論として、辯護士の資格を剝奪した。

いよ〳〵三十餘ケ年の長い判事生活に分れるといふ日である。かれはストーヴに火をたかせて、そこへ重要書類を、ドシ〳〵投げこんだ。

『なにをするんですか。』

來あはせた後任者が、驚いて聞いた。

『今まで取つておいた記錄を燒き捨てるんです。私が居らなければ用のない書類です。』

それはかれの長い判事生活に集めた記錄である。今は時めく某し奧樣が、若い時に木の下蔭で刑事に見とがめられた記錄もあれば、現在は聖人のやうに暮して居る某し社長が、どこのダンスホールで名譽でない始末をした書類もある。

『なにしろデンヴア市の秘密が、みんなそこにあるといつてもいゝ記錄なんだからネ。それがリンゼー判事の手にある間はいゝけれども、外の人の手に渡つたら大事だらうよ。陰謀家連中はこれも取つてしまふつもりで訴へたが、裁判所はそれは個人の參考書だといふので自由に處分させたんだ。』

と、私にリンゼー判事のことを話してくれた日本人醫師のY氏が附け加へた。

かういふ人間生活の裏の裏まで知りつくして居るかれだから、今のやうな結婚制度――殊にキリスト教流の固い制度では、人間を幸福にしないことを知つて來た。それがかれを友愛結婚を主張せしめた理由であつた。

『今までは人間のための結婚でなくて、結婚のための人間だつたぢやないか。不幸でも慘めでも死ぬまで脫けられないなどゝいふ制度があつてなるものか。』

そうかれが主張すると、宗教家などは特にひどく反對した。その一つの現れが聖ジョーンス教會の騷動である。

治安を破つたといふ告訴に對しては、かれは直ぐ無罪になつた。併し神聖な結婚を玩具にするといふ牧師連の抗議については、今かれは甲論乙駁の眞中にある。

今年、六十五歲になるかれは、いつでも少年と青年の味方だ……。

第六　スノウデン

1　スツクと立つ

英國藏相スノスデンは突然、あの骸骨のやうな身體を起した。

會議に列した全權はハツとした。今日の會合には佛國の外相ブリアン、ドイツの外相ストレーゼマンの演說はプログラムにのつてゐるけれども、英國代表者の名はない。

『スノウデンは一體、なにを喋べり出さうとするのか』

會議はサツと不安の空氣に滿ちた。

世界大戰後、敗くれば賊軍の名を負はされて、ドイツは毎年巨額の賠償金を支出して來た。併しドイツが支拂ひうる能力には自づから際限がある。最後の行きづまりが來て、各國に對する割當額を改訂する最後的國際會議がヘーグで開かれたのだ。

ドイツにとつても、佛國にとつても必死の場合である。笑ひながら手を握る兩國の全權の心は

震へるばかりの緊張を禁じえなかつた。國際會議では、一度は屹度衝突がなくてはすまぬ佛獨が今度も、すさまじい芝居を見せるであらう。さう誰もかれも思つてゐた。

佛國外相ブリアンの演說は、併し思つたよりも短かゝつた。また實際、始めから暴風雨を豫想されゝば、公開的な開會式には儀式的な文句である必要があつた。『各國の忌憚ない要求は祕密會でやらう』かういふ諒解が全權の間にあつた。

ドイツの全權はその後に續いた。珍らしや外相ストレーゼマン。長い病氣で、かれはかうした會議には、たえてその姿を見せなかつた。今、起つたかれの顏と體は、いた〳〵しいまでに病みほうけてゐた。

『あんな無理をすれば、參るよ』

隅の方から、そんな囁やきも起つた。併しさうした無理をしてまで母國のために鬪ふかれの志しを思うて、會議は肅然として秋水に對するやうな感じに滿ちた。

『この會議は極めて重要な會議であります。こゝに最も必要であることは、この會議に連なる全權は指導者でなくてはならぬことである。國民の九割が贊成するまで待つて、それから態度を決するやうでは、指導者たるの資格はないのであります』

かれはさういつて、一寸ブリアンの方を見た。佛國の恐獨輿論を懼れて、公平な解決が出來ぬやうでは指導者の資格はないぞ、さう叱つてゐるやうでもあつた。

かれは歐洲が關稅壁にかこまれて居ることを痛嘆し、世界各國の自由貿易を主張した。この病外相の眼は、述べて來る間に爛々と燃えてゐた。

『これで閉會します……』

議長である和蘭外相プロクランドが獨外相の演說が終ると共に、閉會を宣すると、突然議長の左の上座からスツクと立ちあがつた者がある。みるとそれは英國藏相のスノウデンではないか。會議が何かの豫感を覺えて不安を感じたのはこの時である。

2 魂の活力

一體、かれは何を喋べり出すのであらう。いくら職工の子に生れて、數字ばかり弄つて大きくなつたかれではあつても、かうした儀式的會合に、豫定のプログラムを破つて自から起つことのどれだけ不謹愼であることを知らぬであらうか。

しかし、かうして緊張した全權達は、スノウデンがその演說で、たゞドイツ首相と、そして當

時臥床してゐた佛國のポアンカレーの病氣見舞を述べたゞけであるのには二度吃驚した。

けれども練達した外交官達は、スノウデンの戰術を見のがしはしなかつた。『大國の代表者であるぞ、おれは佛獨の筋書き通りには踊らないぞ、おれにも同じ發言の權利はあるのだぞ』かれは會議の初頭において、不意に短い挨拶をして、意味深長なその決意の爆彈を投じたのである。

かうした緊張裡に、同じ日の午後、各列强の國際會議の祕密會は開かれた。日本の代表として安達大使の顏も見えた。

席についた英國代表スノウデンの顏は、心がらか、いつもより蒼いやうであつた。かれは身體を支へて來た松葉杖を傍において冷やゝかに場內を見渡した。

スノウデンの青白い顏を見ると、全權達は人間の意志が、どれだけ肉の苦しみを征服しうるかを、今更考へさせられざるをえなかつた。かれは今から六十四年以前に織物職工の子と生れた。貧乏な家庭は、かれを充分に學校へ送ることもできなかつた。子供の時から、かれは家庭の生活を扶助しなければならぬ責任を負はされた。

かれはその後、最下級の事務員として生命保險會社に入つた。僅かの俸給は、漸く口を糊するにたるだけであつたけれども、併しかれはそれで滿足をしてはゐなかつた。かれは自からを敎育

するために、氣狂ひのやうになつて讀書した。

その頃丁度判任官の試驗があつて、それを受けると、かれは苦もなくこれに及第して、稅務署の下級官吏に任命された。眞面目なかれは、上官の受けがよくつて、どこの任地に行つても信用された。

二十七歳の時であつた。かれは當時自轉車で往復してゐたが、ある時に、

『アツ！』

といふ間もなく、自轉車が後ざまに倒れて、强く背を打つた。足の骨はポキリと折れて、背骨にも重傷を負うた。

それからといふものかれは十二ケ月の間、ベッドに横になつたまゝ全く動けなかつた。動けるやうになつても、元より働けはしなかつた。かれは二ケ年の後に役所に辭表を提出したが、かれの長官は『いつまで養生をしてもいゝから是非また戻つてくるやうに』といつて、何回も親切に勸めてくれた。

併しスノウデンとしては、その厚意は感謝しながらも、それどころでなかつた。二ケ年の間、かれは身動きもせずに考へぬいた揚句、心の中に革命が起つてゐた。かれは社會の不公平と病根

について考へ通した。そしてその頃、蛇のやうに嫌はれてゐた社會主義に傾倒することになつたのである。

かれは負傷の結果、一生杖に賴らなければ動けない身體になつた。その上一度傷ついた肉體はいつまでも——今に至るもかれを苦しめた。併し魂の活力は、それとは反對に枯竹が燃えるやうに增して行つた。

『見ろ、精神が肉體に勝つた例が、あそこに居る！』

いた〳〵しいかれの姿を見て、さういふ聲も聞えた。

3　相手の首に短刀

開會の挨拶が白耳義の總理大臣ジヤスバーによつて宣告されると、スノウデンは直ちに立つた。

『諸君、ドイツ賠償に關するヤング案は根本的には正しいと思ひます。併しながら、英國はこの案が規定する分配の方法に對し斷然反對しなければならないことを悲しみます。この案によると佛國は無條件賠償金の六分の五をその手にをさめ、イタリーもドーズ案で決定したよりも一千九百四十萬圓も多くとることになつてゐます。この二國がかう澤山とつてしまふのでありま

すから、他國の取り分は殆んどなくなるのである。これが果して正當であらうか』

かれの演說には飾りもお世辭もない、それは直ちに對手の首に短刀を擬するの戰法である。一つの言葉を使ふのにも婉曲を事とする外交會議に、この大膽さは何事であらう、殊に英國外交の圓熟は世界に定評がある。全權達は愕然として驚いて、辯士の顏を見た。

『諸君、どうぞ私の言が極めて大膽であるのを許して下さい。併し私は誤解の餘地のないために一度繰り返します。この協定は英國として絕對に受諾しがたいものなのであります。

事實を申しあげれば、この額は英國にとつて決して大なりとはいへません。それは大海に落つる一滴の水である。併しながら、英國政府の考ふるところによりますと、犧牲にはある程度の極限がなくてはなりません。これまで、そしてこれだけ（Thus far and no further）といふ限界があるべき筈である。新讓步が如何に少なりとはいへ、英國の忍耐は、もう極度に達してゐます。この會議は過去既に五回開かれてゐる。併しながら未だ曾て一回でも、根本的に考慮されたことがありましたか。今こそ、その變更されるべき時が來たのである……』

スノウデンがその演說を終へて坐ると、會場は混迷と驚きにザワついた。かれの意志は、何回も國際會議と外交的折衝を經て、漸く今に到つた賠償案を、根本的に打ち壞してしまふにあるのだ、そのデリケートな歷史を知るものにとつて、これが大問題でなくて何であらう。

『なに？スノウデンがそんなことをいつたつて？』

スノウデンの演說が傳はると、誰よりも驚いたのは英國人自身で、ありうべからざることが世の中に實現したやうに驚いた。社會主義者としてスノウデンは、今まで『賣國奴』とか『非國民』とかといはれて來た。世界大戰が始まつた時に、かれのみは政敵と離れて、極めて僅かの同志——その中には首相マクドナルドもあつた——と共に非戰論を叫びつゞけた。

『非國民を葬れ』

戰爭熱で盲目のやうになつた國民は、かれを八つ裂きにもしたいほど憎んだ。それがためにかれはその後の選擧に慘めに敗けて、かれの政治的生命は、もう永遠に葬り去られたであらうことを何人も疑はなかつた。

それだから勞働黨內閣ができて、かれが大藏大臣になつた時には、一般國民は、もう英國は地獄の底にでも行く外はないとまで思ひ込んだものである。先頃、私がロンドンに行つた時に、ある保守黨の黨員で、さうありのまゝに告白した人があつた。

その『非國民』であるかれが、今、英國の立場のために、會議を賭して頑張るのか、その前の

保守黨內閣の外相チエンバレーンや、カーズン卿達が造りあげた賠償協定を……。

4　危機に瀕したヘーグ會議

スノウデンの演說は果して爆彈の役をつとめた。

百戰の古强者であるブリアンは、對手が惡しと逃げて、佛國藏相のシエロンが、代つてかれに答へた。

『英國の代表者は、英國の犧牲が非常に大であるといはれました。けれども犧牲は英國だけが大であるのではない、佛國も同じく甚大な犧牲を拂つてゐます。殊にこのヤング案は種々な條項からなつてゐて、スノウデン氏がいはれた問題は、たゞの一部にすぎない。佛國政府はそのヤング案を全體として受諾したのであつて、一部の改訂は御免を蒙ることを申しあげて置く』

英國が喧嘩肌なら、佛國も喧嘩肌である。佛國全權はかういつてポンと蹴つた。その後で立つたイタリーの藏相マスコニも、佛國全權と口を合せて、

『この案は種々の問題が混同されてゐて、それ等の妥協の結果出來あがつたものであります。犧牲をいへば各債權國同一でありまして、英國だけが犧牲を拂ふやうにいふのは見當違ひも甚だし

いといはざるをえません』と正面から攻擊した。

かうして喧嘩が猛烈になると、世界の注意は期せずしてこの會議にむけられた。スノウデンの態度は、世界を敵として鬪ひぬいても屈せない頑强さであつた。『ヘーグ會議破裂す』さう傳へた新聞も少なくなかつた。

『こゝに六つの强國がある。その內五ケ國は意見が同じで、ただ一國だけが異論をいだいてゐるのである。もしそのために會が破裂したとすれば、その責任はその一國が負はねばならぬ』

老獪なるブリアンは、さう會の破裂を暗示してスノウデンを脅かしたりした。

『英國に責任がある？　そんな馬鹿なことがあるものか。ブリアン君の口調を借りてこれが五對一の事件だとしても、そのことは少しも一の方の間違つてゐるといふ證據にはなりはしない。過去の歷史からいつても、正義は却つて常に少數者の方にあつたではないか』スノウデンには廻りくどい外交はなかつた。かれにはたゞ公平なりと信ずる理論あるのみであつた。かれはそれを世界に訴へて恥ぢなかつた。

『一體、かうした會議を祕密にしておくといふことが誤解を齎らせる原因だ。この會議を公開せよ』かれはさう頑張つて新聞記者を會場に入れ、大切な交渉に祕密もなにもなくした。專門外

交家は、たゞその無茶にあきれた。

このスノウデンが投げた爆彈が、どれだけ世界を驚かしたかは當時の新聞を讀んだ人の記憶するところであらう。會議は一ケ月近くも續いて、幾度となく危機は傳へられた。

もう囘生の見込みがないといはれた最後の會合の日である。各國全權は會議室に這入つて、午後十一時になつても、十二時になつても出て來なかつた。中からは強くいひ爭ふ聲も聞えた。

午前二時――會議實に九時間の後、全權達は疲れた顏を戸の外に運んだ。いづれも疲れてはゐるが、安堵の面持が誰もかれもの面上に見られた。

勝利は全然スノウデンのものであつた。かれの要求は全部いれられた。美貌と才人を以て鳴る夫人が『スノウデンが驅引きで頑張るんですつて？　あなた方はヨークシャー人を知りませんよ』と會の始めに、新聞記者に語つたやうに、それはブラツフではなかつた。素人外交が結局玄人外交に勝つたのだ。

紐育テレグラム新聞はいつた――

『このビツコの小さい男――それは帝國の代表者だといふよりも、墓場から這ひあがつたといふ方が似合ふ男は、世界に勝つたのである……』

第七　犯罪王カポネ

1　覆面の自動車

シカゴの殺人が、どんなに組織的で、どんなに科學的で、どんなに大規模であるかについて、まづその代表的なものを紹介し、それからこの王國に君臨する犯罪王カポネの『出世物語』に入らう。

クラーク街の自動車々庫の後にあるモラン事務所の電話が、けたゝましく鳴つた。モランといふのはシカゴのギヤング團の一方の親分である。

取次ぎの者が聞くと、デトロイトからシカゴに持つて來る筈の酒をつんだトラツクが、途中で警官のために差し押へられた。例によつて相當な賄賂を提供しなければならないが、といふのである。

『いくらいるんだい』とモランは聞いた。

『一箱について五十七ドルづゝ』

『よろしい。それを家のガラージに運んでくれ』

『何日の何時に？』

『明日の朝の十時半にしてくれ。野郎共をみんな集めて運ばせるから。屹度だよ、荷不足で困つてゐたんだ』

かれの商賣には珍らしくない取引である。かれはそういつて電話を切つた。

あくればセント・ヴアレンタイン日で、休日の朝は人通りも少なかつた。モランの事務所には、今朝着く筈である酒樽滿載のトラツクを待ち受けて七人の同志が並んでゐた。親分のモランは少し遲れて、まだ姿を見せないが、七臺のトラツクが着いたら、その内のある部分はデトロイトに運び、ある部分は取引先に配附すると手筈は出來あがつてゐた。

そこへカーテンを深く下した自動車が事務所の前に止つた。

『オヤツ！』とその道の人が考へたのも理り、それは探偵局の常用自動車であつた。中からは三名の正服の巡査と、平服の壯漢二人が現はれて、モランの經營するガラージの中に這入つて行つた。ガラージが自動車の置場に使はれるのは道路から見える前の方だけで、後は酒の取引場に使

はれてゐた。

『手をあげろ』

巡査は入口から聲をかけた。中にゐた七人は、今這入つて來たものが酒樽でなくて、巡査服であることにギョツとしたが、併し官憲が定期的にやつて來るのは、クリスマスが歳末にまはつて來るほどかれ等には平凡な事實である。拘引されても直ぐ保釋で出て、僅かの罰金さへ出せば事はすむのだ。なまなか反抗すれば面倒になる。かれ等は兩手をあげ、命令のまゝ壁の方にむいて一列に並んだ。巡査は一人々々のポケツトからピストルを奪ひ去つた。

と、忽ち平服男が進み出て、隱し持つた機關銃を出すと見ると、續け樣に横一文字に發射した。七名の男は大木が仆れるやうに、バタ〳〵とコンクリートの床の上に仆れた。鮮血は沼のやうにドブついた。

侵入者は仆れたのを見屆けて、無言のまゝで外に出た。入口のところに來ると平服の二人は、手を上にあげ、三名の巡査はピストルをこれにむけながら、追ふやうにして自動車に入れこみ、どこかに走り去つた。

2 沈默の壁

ピストルの音を聞いて、隣家の者が來た時には、六人は即死して居り、一人だけが蟲の息であつた。十五分の後には警官の一團が驅けつけて來た。

『誰だ、擊つたのは、フランク』

生き殘つた一人を病院に移して、警官が聞いた。フランクといふのはその被害者の名で、ギヤングの一人として警官には馴染な顏である。

『誰も擊ちやしない……誰も』フランクは呻くようにいつた。

『どのギヤングだかいつてくれ』

フランクは口を開かなかつた。

『牧師を呼んでやらうか』と警官は押していつた。

『いらん』

かれは一時間ばかりして死んだ。どんな場合にでも對手の名前をいはないのが、かれ等の道德である。シカゴの警察ではこれを『イタリア人の沈默の壁』といつてゐるが、數千の殺人事件の

內、未だかつて一人もこの道德律を破つたものはない。この場合もフランクの死と共にその『沈默の壁』は下りた。

檢事局の調べによつて、この殺人事件がモランの敵によつて周到なる用意の下に敢行されたことが明らかになつた。巡査の姿をしたのは對手を油斷させるためで、平服姿の二人の內、一人は、〇・四五口砲の百連發機關銃を持參し、他は十二ゲーヂの銃砲を外套の中に忍ばせてゐた。いづれもこの邊の專門家であるが、機關銃が失敗した場合には、銃砲を使ふつもりだつた。が萬一にも失敗した場合には？……仕事が終つてから、制服の巡査がピストルを突きつけながら進んだのは、かうして附近の者をして、酒密賣者を檢擧して警察に連れて行くやうに見せかけるためであつた。現に附近の二階から、この光景を見た者はあつたけれども、いつもの檢擧沙汰だと思つて氣にもとめなかつたことが後から分つた。

更に調査の結果明らかにされたことは、その當時一方の大親分カポネは、フロリダ州マイアミの別莊に居つたが、シカゴの乾分と電話で打ち合せ、この兇行者に對し一萬ドルづゝを與ふる約束をしたことである。後でも說くやうにモランは當時、殆んど唯一のかれの敵であつた。かれは『王位』をうるために邪魔になる者は、悉く自分で殺すか、手下に殺さして來た。ところがモラ

ンだけは妙に命冥加があるばかりでなく、それから少し前には親分の仇だとばかりに、七臺の自動車に機關銃をのせて、カポネの繩張りの中に這入りこみ、盲目滅法にかれの本據に發砲したものである。モランを片づけてしまふのがかれの目的であつた。

この事件の嫌疑者は拘引されたけれども、例によつて一人も刑をきたものはなかつた。かれは今でも鐵砲の彈丸はこはいけれども、まだ裁判所や法律などが恐いと思つたことは一度もない。警察の記錄には『過去五ケ年にカポネが直接に手を下したか、少なくともかれが關係を有する殺人事件が二百二十六件ある』と明記されてあるに拘らず、かれはシカゴ附近で、未だかつて一回の刑をも受けたことのないのが、何よりの證據である。（最近法廷侮辱罪で始めて有罪になつた）

3 年收入六億圓

『アメリカの晝間は大統領フーヴアが統治し、夜間は犯罪王カポネが統治す……』

誰かゞそういつたのは餘りに誇張した言であらう。なぜなら大統領フーヴアは、近頃不景氣に押されて大分有難味が減つたにしたところが、とに角全米的であるに對し、カポネはシカゴを中心にし、そこから采配をふるつてゐるにすぎないからである。

併しカポネの統治はフーヴアに比べて、遙かに絶對的であり、徹底的である。かれにはフーヴアが持てあましてゐるやうな議會もなければ上院もない。かりにあつても一發のもとに邪魔を取り去ることは、今までとてもやつて來たことである。かれにはまたフーヴアのやうに不景氣の問題もない。フロリダ州マイアミの砂白き邊には、皮肉にもこの法律勵行を業とする者と、法律破壞を職業とするものとの別莊が並んでゐるが、カポネの方のものが餘程堂々としてゐる。

かれの收入が何程あるかは、恐らくは自分でも分るまいが、シカゴ・デイリー・ニュースの專門家の調査では、かれの監督下にある事業の一週間の收入が一千二百萬圓あるといふから、一ケ年には約六億二千五百萬圓あるわけで、日本の國庫豫算の半分に近い額が、かれ一人の手によつて切りもりされてゐるわけである。

アメリカ政府の調査員が調べたものによると、カポネの總收入は一年に二億一千萬圓あつて、その收入の內譯は

ビール、酒類	一億二千萬圓
賭博及鬪犬所	五千萬圓
醜窟、ダンスホール、その他	二千萬圓

脅喝、寄附金等……二千萬圓

である。併しこの收入はかれ自身が全部とつてしまふわけではない。政治家や警察や裁判所などにもやらなければならぬ。現にシカゴ市長のトンプソンの選擧の時には、少なく見積つても三十萬圓ぐらゐは寄附し、その後市長の選擧委員長は選擧費の公開を、裁判所から迫られて姿を隱してしまつたほどである。そこでかうしたものを除くと、かれのポケットに這入る金は一ケ年に六千萬圓ぐらゐだらうといはれる。（この數字は "Al Capone," by Pasley による）

しかしそれがかりに五千萬圓であつても、それは驚くべき收入で、紐育ウオールドが論じたように『アメリカにおける工業、電力、銀行その他の社長、重役を見渡して、かれの二割五分の俸給をえてゐる者は皆無である』昨年かれの會計フランク・ニツトーが所得稅違反で告訴されると、アメリカの全新聞は『カポネ酒內閣の大藏大臣訴へらる』と特筆したほどで、かれを一個の事業家と見るには、その規模が餘りに大であつて、それは正しく一個の王國である。

大統領の收入は一ケ年約二十萬圓（日本金）であるから、カポネの三百分の一もない。人間を金で計りたがるアメリカ人が、カポネはフーヴアより偉大なりといはないことこそ寧ろ心得ない。況んやこの罪惡國の帝王は年齡まだ滿三十二歲の青年ではないか。

4　人氣ある犯罪王

しかしかれが大統領フーヴアに比して人氣がないと思へば間違ふ。われ等の知るところでは、今アメリカで一番人氣のある者はかれである。どの新聞も、どの雜誌も、遠慮しながらも、常にかれの名前をのせてゐる。昨年の暮にはかれの傳記が出版されて、暫らくの間に數版を重ねた。

近頃、パリで警察方面の記者として有名であるジョージ・ロンドンが態々この世界的罪惡王に見參すべく出かけて來た。カーテンの下つた業々しい自動車で、かれの住家に案內されたが、主人は極めて愉快そうにこの遠來の記者を迎へた。

『あんたはゴリラを見に來たんですネ』かれは進んで握手をした。

『サアよく見て下さい』と笑ひながら顏を出したのを見ると、『かれの姿はロンドン製の洋服につゝまれて、洋服屋のモデルのやうに整つてゐた。それは成功した實業家の姿である』とこの記者はその印象を書いて居る。

『私のことを畫く時に、たゞゴリラとだけは呼ばないで下さいよ』といつて、かれはこの記者を送り出した。

かれがゴリラといふ文字を神經に病むのは理由があつた。その少し前にかれはロンドンの一婦人から手紙を受取つた。かれの新聞記者に語つたところでは『今日、おれは英國の婦人から手紙を貰つたが、ロンドンでもおれがゴリラだといつてゐるんだそうだ。その婦人は何でも隣りに仲の惡い人間が居るが、これを殺してくれゝば英國に往復する費用を出すから來てくれと交渉して來たんだ』と吐き出すやうにいつた。

これほどかれは世界的に『人氣』があつても、しかし平和な心持はない。かれの正面の敵は最早多く殺され、或は平和條約を結んでゐるけれども、まだかれの生命を狙ふものがどれだけあるか知れない。かれがよく出這入りするカフエーのクックを一萬弗で買收して、かれの呑むスープに青酸を交ぜて毒殺を企んだ者があるのは二三年以前のことである。かれの自動車は特別裝甲車で重量が七屯もあり、普通自動車が三噸であるのに比すれば正に二倍以上の重さがあり、硝子もボディーもブレット・プルーフ――砲彈に對する保證つきであつて、その一部には機關銃を据えて、いつでも對手に應戰できるやうにして居る。

かれは平生八人ぐらゐの用心棒に護られてゐるが、芝居に行く時などはシーツを八つ乃至十は買つて、自分の周圍を警戒させる。また晩には數名の番人が、かれを立番して居り、この人々が

大概一週百弗以上の給料を貰つてゐる。一九二七年――まだ對抗戰が盛んであつた頃は、かれを殺した者に對しては、何人たるを問はず五萬ドルの賞金を呈すといふ懸賞のポスターが張り出されたもので、それは確か現在でも有効な筈である。

いつかかれが裁判所に行つた時のことである。新聞社の寫眞班がかれを外まで追ひかけて、かれの自動車と自動車番號をフイルムにおさめ、翌日それが新聞にのつた。自動車番號の公開はかれの生命を敵の標的とすると同じである。かれは直ちに買つたばかりの自動車を賣り拂つて、新しいものと取りかへた。

5　殺人專門家

犯罪王カポネはニュー・ヨークのブルックリンに生れた。兩親はイタリー人の移民で、教育といへば小學校四ケ年をやつたゞけである。子供の時から街頭や玉突場を、唯一の教場にしたことが、現在の犯罪王を生むには絶好な雰圍氣であつた。かれの名を Alphonse Capone と書くから普通の英語讀みにすればケポーンとでもいふべきであるのに、カポネと發音してゐるのは、かれがイタリー人だからである。

かれは二十一歳の時まで一度も警察の厄介にならなかつたといふから、この近隣としては成績のいゝ方である。ある時、球突き場で、ナイフを持つて打つてかゝる對手を拳骨でなぐり飛ばした。殺してしまつたと思ひ込んで、從兄の世話でシカゴの親分株トリオをたづねて身を隱したのが、そも〳〵『出世』の始まりであつた。

その頃、シカゴでは既にイタリー人――特にシシリー島の出身者が勢力を張つてゐた。その親分がコロシモといつてカフエーを持つてゐる男であつたが、その片腕にトリオといふがゐた。トリオは中々の腕きゝで、コロシモに二萬五千弗をゆすりに來た男を連れ出して、一擊の下に殺してしまつたほど膽玉がすはつてゐた。併し中心がトリオだけでは、勢力關係上、少し心細かつた折に、大膽不敵なカボネが來たのであるから、かれはドシ〳〵重要視された。

一九二〇年の春、親分のコロシモはかれのカフエーの一間で殺されて居るのを朝になつて發見された。どうして用心棒がついてゐるかれが、誰も知らない間に殺されたかは、今もなほ不明だが、警察側ではトリオとカボネが親分にとつて代らんがために始末したものだと考へてゐる。

その頃までかうした社會の親分の重な收入は、醜窟と賭博であつた。ところがその頃から丁度アメリカに禁酒法がしかれた。親分の繩張を繼承した二人は、この商賣の有望さを見のがさなかつた。かれ等は廢業した釀造場を買入れると同時に、他方腕ききの射擊人を雇ひ入れて、自分のところから酒を買入れないものはグン〳〵殺して行つた。

この一つの例はクラーク街のジョウ・ハワードである。かれはトリオ・カボネの組から酒を買はなかつた。ある日、店のドアーが開いて丈の高い男が這入つて來た。

『や、アルか、久しぶりだネ』

と手を出すと、新來の男は對手の手を叩いておいて、ピストルを續け樣に六發放つた。ジョウはそのまゝ息がたえた。

そこには數人の人が居つたが、いよ〳〵證人に呼び出されることになると、みんな不思議に記憶を失なふ病氣にかゝつてゐた。鐵砲の音を聞かなかつたものもあるし、誰か這入つて來たやうだつたが覺えないといふ者もあつた。長い間檢事局の活動が續いたが『加害者不明』といふことで誰も罰せられなかつた。たゞこの事件で若い檢事のマクスウイギンが、多少頑張つたが、これが祟つてそれから一年十ヶ月の後に、機關銃で殺された。

しかし酒の密賣者はかれ等だけではなくて、他のギヤングもあつた。シカゴ南部のオコンナーもその一人で、かれは密賣バーを廻つて歩いては、自分のものを買ふことを强要した。これを拒

絶したゝめに擲られて重傷を負つたものもあつた。このオコンナーは暫らく後で手下の三人と共に殺され、加害嫌疑者としてカポネは警察に呼ばれたけれども『證據不充分』で赦された。

……およそこんなことを書いてゐれば、二百件以上の同じ事件を報告せねばならぬ。われ等はただかうして殺人專門家としてのカポネの名が知れわたるとかれの勢力がそれだけ擴がつていつたことを諒解するに止めておかう。

6　シカゴの「浮動要塞」

かれ等は勢力をうると本部をシカゴからシセロといふ町に移した。これは東京でいふと澁谷あたりにでも當るところで、シカゴの市内にゐるよりも、その町の政治を左右しうる點からしても、また敵が攻めて來るのに困難で、安全のためからもその方がいゝことを感じたからである。

こゝに落ちついたかれ等には二つの目的があつた。一つは北部に頑張つてゐるオバニオンスの地盤を奪ふことで、今一つはシシリー人組合（Unione Sicilione）を乘つとることであつた。その目的を達するためには、對手を殺してしまへばいゝのだ。

オバニオンスはその頃、シカゴ北部の繩張りを擁して廣大なる勢力を有してゐた。『かれの手が

觸れれば何でも金になる、金にならない場合には血になる』といはれて、二十八歳のかれは――ギヤングの親分は不思議に歳が若い――ドシ〳〵羽をのして行つた。カポネの表面の商賣は古道具屋で、今でもかれの名刺にはそう書いてあるが、オバニオンの商賣は花屋であつた。

一九二四年の夏のことである。かれが自分の店にゐると、そこに三人の人が這入つて來た。

『先刻、電話をかけて來たのは君等だネ、花が要るんかネ』

と一人の男と握手をしてゐると、突然ピストルの音がして六發がかれの身體に食ひこんだ。犯人はその場から逃げて、誰も證人になるものがない。犯人がかれの知人であつたらうと思はれるのは、かれが一方の手に鋏を持つてゐて、他方の手で握手をしたことで、餘程氣を許さなければそんなことをする男ではない。始めての人なら握手をしながら、一つの手はピストルの這入つてゐるポケツトに入つてゐる筈だ……といふのが警察の判斷だが、元より犯人が分る筈はなかつた。

このオバニオン親分が殺されたことが、その乾分達を極度に奮激させた。それから昨年夏、平和協定が出來るまで、眞劍な殺人戰が繼續されたのは、嚴重な意味からいへばこの時からである。カポネの自動車がステート街といふ目ぬきの場所を走つてゐると、通りすがりに覆面の――カーテンを深く下げた自動車が機關銃を發射して、運轉手を傷つけたのはその直き後のことである。

カボネは丁度乘つてゐないで助かつた。

カボネの兄弟分トリオが、同じ頃、妻君と共に買物に出かけて歸宅した。家の入口に入らうとすると、そこへ自動車が來て、中から三名の壯漢が躍り出した。一人は獵銃、他はピストルでトリオを一齊に射撃し、トリオはバタリと仆れた。兇漢が最後の仕留めをしようとすると――シコゴのギャングは日本の武士がそうしたように、息の根を止めることを忘れない――自動車のホーンが鋭くなつて、誰かゞ來たことを知らした。かれ等はその場から逃げた。

トリオは直ちに病院に運ばれたが、カボネの指揮で內側の病室に入れられ、四名の壯漢に番をさせた。內側の病室を選んだのは外部からの侵入と射撃を避けるためである。十六日目に病院を出る時には、かれは火事の非常階子を傳はつて下りた。

この襲撃事件が流石にトリオを驚かして、かれは三臺の自動車に機關銃をのせ、ニューヨークに出で、そこから出帆間際の汽船をとらへてイタリーに逃げた。今かれは生れ故郷のゼノア近くに、アメリカから持ちかへつた百萬弗以上の金で、靜かに餘生――といつてもまだ若いが――を送つてゐる。

このトリオを襲つた兇漢は、殺されたオベリオンの乾分でモランその他であることが分り、現

に證人もあつたのだが、判事はこれを僅かに五千ドルの保釋で許した。カボネが始めて二萬弗の裝甲自動車を買つたのはこの頃のことである。シカゴ人はそれを『浮動要塞』といつてゐる。序手に書いておくか殺人に關する科學的應用は必要から益々進んで行つてゐる。機關銃、裝甲自動車、砲彈止めの胸當て、それから最近は自動車が逃げる場合に煙幕を出して追跡をのがれるのが多い。

7　探偵局を襲撃

カボネ王國の本部はシセロのホーゾーン・ホテルにある。特にかれ自身の考案で內部に手を入れて長い廊下を傳はらねば二階に行けないやうにしてある。その廊下の兩側には椅子を通る方にむけて、薄氣味の惡い連中が朝晩控えてゐる。

九月二十日の晩に、カボネが用心棒と共にその下のカフエーで夕飯を食つてゐると、どこからかタイプライターの音のやうなものが聞えて來た。

『頭を下げなさい』

と用心棒にいはれて、テーブルの下に這入りこんで、床に身體を臥せてゐると、バラ〳〵と彈

丸が飛んで來た。建物のウインドーがガラ〳〵と崩れ落ちた。

後で出て見ると、それはオバニオンの乾分達が、トリオを取り逃がしたのが口惜しさに、敵討ちに來たのであることが分つた。自動車八臺に機關銃を滿載して、カポネの本部であるホテルと、そのカフェーを目がけて發砲したのである。警官の調査では少なくとも一千發以上は發射されたとのことであるが、不思議なことには負傷者は數人あつたが、死者は一人もなかつた。カポネはその損害は自分で悉く辨償した。眼を負傷した一婦人に對しては一萬ドル以上を醫者に支拂つた。

かうした敵の活動に對して、カポネも默つてゐなかつたことは無論である。對手のギヤングの親分は端から殺していつた。オバニオンを襲つたワイスは十二個の彈丸を射ち込まれて死んだし、その後のトラツヂは親分になつて三ケ月しか生きてゐなかつた。それに續いたモランは、二ケ年の間に手下が二十人以上殺されたが、かれだけは不思議に生きのびた。かれの命をとるために仕掛けた仕事が、本文の最初に書いた一昨年のセント・ヴアレンタイン日の虐殺事件である。

カポネの不敵さはこれに止まらない。かれの敵であるアイロが探偵局に留置されたと知つて、これを奪ひとるために、六臺の自動車に機關銃、砲銃を携へた二十名ばかりの手下を從へて、こ

れを襲ふたことがある。それは幸ひにして大事件にならなかつたが、官憲の本部をギヤングが襲撃したといふ一事が、その如何なるものであるかを知ることが出來るであらう。

かれはまた自分をシセロから追ひ出さうとした檢事マクスウインギンを殺した。元來始めの間こそかれ自身が直接に手を下したものであるが、その後大親分になるに連れ、下手人は多くニューヨーク邊から連れて來た。しかるにこの檢事をやつつけた場合だけは、自分が乾分共を指揮してやらせたことが、警察側では明らかになつてゐる。併しこの時も刑罰が、かれに及ばなかつたのは無論である。

かれはいつか妻子を連れてローサンゼルスに行つた。汽車から下りようとすると警察署長が停車場に來てゐて、

『君はこゝに留ることは許さない。十二時間だけは大目にみるから、その間に立ち退いて下さい』

といはれた。かれは、

『おれはまだ刑をきたことのない立派な市民なんだ、なんでおれが這入つていけねえんだい、うんと金を使ふために來たんだが、お金がいらねえ町には、こちらから御免を蒙むらア』と啖呵を切つてそのまゝ引きかへした。

警察の帳簿で人格が證明できるものなら、いかにもかれはまだシカゴ附近では一回も黒星をつけられたことはない。たゞ一つの例外はフイラデルフイアで兇器携帶罪で一ケ年刑務所に居つたことがあるが、それは敵の襲擊を逃れるためだつたといはれる。鐵砲の中に生れて、人殺しで育つてやうなかれが、天にも地にも一回の兇器携帶罪だ。そこにアメリカの不思議な警察制度がある。

8　殺人者の王國

シカゴは殺人者にとつては天國である。

ロンドンでは一九二八年に警視廳が手にかけた殺人數が十八件あり、この內十一人が殺人罪として處罰され、他の七人は自殺した。同じ年度にニューヨークでは二百件の殺人事件があつて、七人だけが有罪になつた。シカゴでは同じ期間に三百六十七件の殺人事件があつて、その內百二十九件は不明乃至は犯人が分らないものであつた。拘引された者のうち三十七人は放免され、三十九人は刑務所送りとなり、十六名は精神病院に送られ、十六名は自殺し、殘る十一人は死んだ。そして死刑に處せられたものは一人もない。別な言葉でいへばシカゴの殺人犯人は三〇〇對〇の

割合で、死刑に處せられる心配がないわけである。

なぜかう殺人犯人に寬大であるかは、カポネ王國に流れこむ莫大な金が、どこに行くかを考へれば分る筈である。合衆國地方檢事のオルセンは、

『カポネは、その酒密賣、醜窟、賭博等により七千萬弗の總收入を得た。そしてそれは官憲より保護を受くるために三千萬弗を費消したことを認めた』

と報告して居り、また二三年前にシセロ（カポネの居住地）の市長デヴアが上院の委員會で證言したところでは『巡査の六割までは酒の商賣に關係してゐる』といふのであるから、犯人はあがらないわけである。

ある時、カポネの手下が拘引され有罪の宣告を受けたことがある。かれは早速電話で判事を呼び出した。

『あの男を無罪にしてくれといつたぢやないか』

『いや實は當時僕が居らなかつたんだ。後の判事に云ひつぎをしようと思つたのを、すつかり忘れてすまなかつた』

『忘れた？　忘れたですむかい』

電話をバタンと切つた。判事は電話口で汗をふいた。

かうしたエピソードも内部の事情が分れば不思議ではない。昨年の秋、ズタといふモラン（カポネと、やゝ對立してゐる親分だ）の乾分が殺された時に、この男が取扱つてゐた帳簿が官憲の手に入つた。これによるとこの團の收入は、一週間に四十二萬九千弗であつたが、これから毎週官憲に金を送つてゐた。その中には判事もあれば、堂々たる政治家もあり、警察部長もあつた。

この聯絡がある上に、かれ等は自由に一流の辯護士を賴むことが出來る。またカポネは特に一百萬ドルの現金をつんでおいて、その部下があげられた際の保釋金に使ふことにしてある。かうなると犯罪も立派な大規模の企業で、それはアメリカのみに見うる現象といはねばならぬ。

カポネは、しかしながら單なる殺人團の親分として滿足しては居らぬ。かれが現在目がけてゐるのは、アメリカの勞働組合を統御して第二のムツソリニたらんとすることである。部下を使つて勞働組合幹部の席を占領せしめ、暴力を以て雇主を恐喝し、何程かの寄附をなさしめるのだ。洗濯業のある主人の如きは、無賴漢のため金をねだられたが、市の警察に相談しては少しも解決しない。そこでカポネに話して毎月何程かを出すことを約束すると、その恐喝は全然來なくなつた。『こんないい保護者は世界にありまん』と喜こんだ旨シカゴ・トリビユンは報導した。現在か

れの勢力範圍にあつて自由になるものは、ブラマース組合、街掃除人組合、新聞賣子組合、市役所事務員組合、大理石工組合等である。

第二にかれはシカゴの政治機關を完全に自己の手に納めようとしてゐる。現在でもかれの勢力は無視できないが、併しそれを自由にするのには距離があり、晝間のシカゴは依然としてなほ市長トンプソンが治めてゐる。これをかれの勢力下におくために、かれは既にその部下といつてい〻政治家を市の委員とし、州上院議員に當選せしめるに成功した。

今、かれは疑ひもなく世界一の犯罪王である。シカゴに來ればシカゴの官憲が全力をあげてその退去をせまり、フロリダ州のマイアミに行けば知事の命令で警察官總出でかれの來るのを拒まうとしてゐる。

それに拘はらず、かれは自由にどこにでも往來しつゝある。

かれの行動が一般の注意を惹くことは大統領のそれにおとらない。そして英雄崇拜的な氣分から、一部に不思議な人氣を持つてをることも事實である。

かれの王座は果して何年續くであらうか。

過去五十人餘りの親分株で、壽を全うしたものは殆んど一人もない、かれのみは生きのびるで

あらうか。たゞ明らかなことは、カポネがイタリーに生れて、そこに育つたらムツソリニになつたであらうし、ムツソリニがニュー・ヨークの下街に生れたら、カポネになつたであらうことである。

シーザーを出したイタリー人は、つひに英雄（！）の國民なのか。

第三篇

各國諸相のクローズ・アップ

第一　アメリカ女のスカート

1　牧師と太股

『そんな短いショート・スカーツをはくのは罪惡です。まるで太股が出てゐるではありませんか。』

牧師は若い娘を前にをいて、嚴肅な顏をしていつた。牧師の前に投げ出された二本の足は、肉色のスタツキングにつゝまれて、ソーセージのやうな圓味と柔味があつた。

『あなたはこの間、お父さんに十ドルいたゞいて、これで雨具を買へといはれたのを、みんな飾つきのスタツキングを買つてしまつたといふではありませんか。お父さんもあなたのモガ振りに困つて、牧師の私に意見をするやうにお賴みになつたのです。あなたは頭の方より足の方が大切なのですか。ローマ法王樣もいつていられるやうに、ショート・スカーツは罪惡です』

『なぜ罪惡ですの？』

スラリとした足を、X字型に組んで、かの女は牧師の方をみた。危ない危ない、スカーツは膝

こぞの上を餘程ずつて、肉色的空間が女の中心に迫つてゐる。

『それは女らしい慎しみを缺いてゐるからです』

『慎しみ？　慎しみなんて近頃の時節に隨分可笑しいわ。少しは慎しみを缺かないと男の人がみてくれないではないの。就職難の際に、『妻君業』つていふ仕事にありつくためには、相當に人目をひくことを必要とするのよ。罪惡ですつて、オールド・メイドで何時までも居る方が罪惡ではありませんか』

『併しそんな小さい虚榮心は罪惡です。それは、神の敎へに反します』

『どうしてそんなことが分りますの』

『聖書にさう書いてあるからです』

『では聖書つてものは神様が書いたものですの？　わたしはまた人間が書いたものだとばかり思つてゐました。』

牧師は聖書にある小羊が、他の群に這入つた時のやうに一寸戸惑ひをした。昔、シルレルは、さすがのナポレオンを手こずらした女傑スタエル夫人と交際し、そのおしやべりにあてられて病氣になつたが、別れたらすぐ回復したといふが、おしやべりと新しい女は、對手の男を病氣にす

るものなりと、牧師は考へた。

『聖書は人間が書いたものですが、神がかれ等に現はれて語り給ふたのです』

『それでは神が間違つてゐたら、なぜ神様は直接に私に話してくれないんでせう……』かの女は一寸考へて云ひたした。『あなたは神様の慎しみを缺くことはお嫌ひだとお云ひになりましたのネ』

『そうですとも』

牧師はかういふフラツパーでも、誠意を以て說くと傾聽するに至ることが心强いやうな氣がしてさういつた。

『それでは神様が、始めにアダムとイヴをお造りになつた時にどうして着物を着せなかつたんですの？　どの女だつてみんなショート・スカーツどころか、まるで裸體ではありませんか。それに……』かの女は言ひたした。『私の知つてゐる範圍では、神様だつて何にも着ずに、そこいらを歩いてゐるさうではありませんか』

牧師は返す言葉がなかつた。

2　乳房のない女

神様がこの世界を裸體で歩いてゐるやうに、今、アメリカの女は裸體に近い姿をして歩いてゐる。

ニューヨークに行つてあなたが、紳士を氣取つて眼を青眼に構へて・歩くやうなことがあると、あんたは明らかに大變な見落しをする。ニューヨークをよく見んがためには、うんと頭をあげるか、うんと頭を下げるべきである。頭をあげた時には、あなたは紐育でなければ見られない摩天樓を見ることができる。うんと頭を下げると、あなたはショート・スカーツの下から女の脚を覗くことができる。そしてこの二つを見れば、あなたはニューヨークを見たのだ。

スラリとアスパラガスのやうな足がある。肥へてゴムまりのやうな脚がある。筍が地の上から出てゐるやうなのもあれば、よしの莖を二つサイドウォークに並べたやうなのもある。しかしそれ等のいづれもが所謂 leg-conscious で、足に死ぬやうな思ひで注意を拂つてゐるのは事實である。

あなたは紐育の女の脚にどんなに、いろ〳〵な形と美があるかを觀察しながら、ブロードウ

エーを上街の方にあがつて御覽なさい。そこであなたは肥えた女の足を專門とする、美容院を見るであらう。ショート・スカーツが流行り始めてから、本場から買つて來た五仙の大根と間違へられることが嫌さに、アメリカ女がどれだけその足をスラリと見せることに苦勞してゐるかがたれでも分る。

女の化粧が頭と顏に始まつて、胸の邊にまで來たのは餘程前からだが、足に氣がついたのはアメリカ女が始めてだ。アメリカの天を摩す建築美術がアメリカ特有のものなら、スカーツを地の上から一尺近く引きあげて、そこに割つたショート・スカーツ美術もアメリカ特有の國產ではないか。

が、これを深く憂へてゐる人が牧師の外にもある。白い柔かい肌と脚が雨と風に曝されながら、平氣で街頭を濶歩するショート・スカーツのアメリカ女を見て。

『戀愛は今にこの地球から消え失せる、イモーションは死に瀕してゐる。裸體の時代が來た！』

と叫んだのは、ドイツの哲人カイザリンク伯である。

世界の女性が目醒めてフエミニスト運動が凱歌をあげつゝあるのはいゝ。だがそれが麥藁のやうな女を作り、石像のやうな冷たい女性を作つたのなら、フエミニスト運動は女性墮落の母だ。

それなら謂ふところの戀愛滅亡の危機はどこから來る。その原因は婦人運動であり、それと同時に起つたショート・スカーツと斷髪だと、カイザリンクはいふ。

『アメリカにも戀愛はあるといふのか。それは熱病的性慾の放出にすぎないんだ』

とかれはいふ、そして世界の女が、みんなアマゾン化しつゝあることを嘆くのである。アマゾンといふのは文字通り解すれば『乳房のない』といふ意味になる。感ずる力、服從する力がないといふことだ。

戀愛は滅びる――ニューヨークの街にたつてかういひながら、ショート・スカーツを嘆く哲人の姿が目に見えるやうだ。ショート・スカーツは必ずしも永續しなからう。一昨年の暮あたりからショート・スカーツか、ロング・スカーツか、換言すればパリの衣裝デザイナーが勝つか、アメリカ女が敗けるかの戰ひは、アメリカ女に利あらず、もうスカーツは大分長くなつたが、一度失はれたアメリカ女の乳房は、再び歸りはすまい。

戀を忘れた乳房のない女……逝かんとするショート・スカーツの置土産はこれだ。

第二　女の國をのがる

1　ナイヤガラを裏から

ナイヤガラ瀑布に行つた時のことだ。おれはスッカリ困つたことに出くはした。

少し飛びはなれたことだと、何でも飯の種になるこの國だ。電信柱の上に一ケ月以上も据りこんで『記錄』を作つたことが飯の種になり、何晝夜も踊りぬいて、それが新聞の種になると當分はドルが人氣を連れてお辭儀に來る。そういふ國柄で、無茶苦茶に大きいナイヤガラ・フォールが飯の種にならないわけはない。

瀧は洗濯だらひから水をこぼしたやうな細工のないものだが、奈良の大佛樣と同じで、少しぐらゐ縹緻がお惡くましましても、なにしろ大きいのが身代。それにアメリカでは、幾らあつても兎に角、そう大つ平にはのめぬお酒がこゝでは天下御免とあつて、土曜や日曜には、自動車が後から後からと、カナダ境ひに續くのなんの。

この人波に交つて、おれも無論、國境をこえた。カナダ政府が經營するといふ瀧見物の場處ですつかり雨裝束に着代へて、瀧を裏から覗こうといふ計畫。裏からのぞいて興味のあるものは、なにも女のスカーツばかりではない筈だ。

いよ〳〵雨裝束に着代へて、長い地下道を進むと幾つもの群とすれ違つた。目と口だけを出した黑衣の集團だ。おれが困つたことに出くはしたといつたのはこの時だ。

2　軍隊の星て苦勞

おれは、その昔、暫らく軍隊の飯を食つたことがある。今でも覺えて居るが、その時、おれは人間の肩ばかり見て暮したものである。肩の星が一つでも餘計ある人に出くはすと、電氣仕掛の人間みたいに、ピタリととまつて、右手を不等三角形の一邊をなくしたやうな形にあげねばならぬ。それを怠つたら最後、どんな災害が頭上に落下しやうかも知れぬ。

おれはその頃、星といふものに呻された。晝間、星で苦勞してゐるおれは、晩の星を見るのも辛かつた。幾つも星が竝んでゐると手をあげて敬禮をしなければならないか、など〵思つたりした。今度、アメリカに居る時に、日本の新聞で『星の紛擾』など〵あるから、世間には矢張りお

れのやうに星で苦勞するものがあるのかと思つたら、それは製藥會社のことであつた。

それから暫らくおれは自由人になつて、苦勞の種はなくなつたが、今度、アメリカに行つて同じやうな心配ができた。アメリカにおいて女に對する敬意がそれだ。

アメリカにおれは、もう何回も行つたが、その時々にスカーツの長さと五五三ぐらゐの比率を保つて、女の相場があがつて來てゐる。

無論、近頃は汽車や電車の中で女に席をゆづるなんといふことは流行らなくなつてゐる。ニューヨークで地下鐵にのつた時に、女がおれの前に立つてゐたから『紳士』の條件と心得て席をゆづつてやると、傍に居る男がカツ〳〵と笑ひ出して、

『古臭いことをするなよ。今頃、そんな馬鹿なことをする奴があるかい』

と、お葬式に行つて結婚の挨拶をした時ほどの冷かしかただ。

あるところで、おれがアメリカ女の相場が高いことをいふと、そのアメリカ女が、このシーツ不讓の事實を持ち出して、

『女の相場は下がつてゐますよ。現にわたし達は電車にのつて、いつでも立ち通しよ』

と、グツド・オールド・タイムを回顧して抗議したものだつた。

が、女の相場は席をゆづる、ゆづらないぐらゐでは標準にならぬ。

3　女とお茶の會

ある米國人の知人が、ある時、おれのために茶會を開いてくれた。

『今夜はどちら？　米國人の家のチー・パーチーですか。それなら夕飯を食つてお出でなさいよ。日本人のとこなら御馳走があるから、夕飯を食はない方がようございますが』

と、その晩、日本人の友人が敎へてくれたほど、米國人の家庭のパーチーには御馳走がない。みんなで女下駄の齒のやうな薄いサンドウイツチをほうばつて下らない話しを、最大級の言葉で感心しあつて『こんな面白い會は生れて始めてです』といひ合つて、お開きになるのが通例である。

その晩、人が集まると御茶が出、お菓子が出た。おれが主賓であるにかゝはらず、そのお茶がおれのところへは廻らない。女といふ女のところに——十二三歳の小娘から主婦のところまで、みんな配つた後で、ようやく『どうぞお茶をお呑み下さい』

と持つて來た。

『成ほど、男の主賓より、小娘の方が偉い國だつたのだ』

と氣がついて、改めて女に敬意を拂ひ直したのだつた。

いつか、アメリカの婦人に連れられて、ホテルに晩餐を食ひに行つたことがある。自動車から女の手をとつて下して、その外套を預けてやつて、それから女を先頭にたゝして後からノコ〳〵從いて行くぐらゐは、かう見えても心得があるから拔かりはなかつたが、食堂の眞中に行くと、件んの婦人が手鞄を默つておれに渡した。無論、後を振りかへるやうな不見識なことはせずに、主人が下男に渡すやうな横柄さだ。

女を見ると疱瘡神樣のやうに氣を使つてゐたおれも、手の中に丸めこめるほどの手持バッグを『それを持ちませうか』といふのを忘れたのである。おれは恐縮して、それを持つて後に從つた。

4　男は使はれる者

ニューヨークのインターナショナル・ハウスといふのは各國學生の集合所だが、そこで日本から行つた女學生がこんな話しをした——。

『わたし共は日本の習慣で、どうも自分で働きすぎて、男を侮辱することがありまして困りますの。たとへば食事の時にアイスウォーターが來て居らないことがあるとしませう……』

説明するまでもあるまいが、アメリカ人といふ奴は無暗に水を呑む人間である。部屋にスチームをカン〳〵入れて、饅頭屋の釜下かなにかのやうに暑くしてをいて、喉が渴くとガブ〳〵水を呑むのだ。だからアメリカの事務所やホテルで、便所はなくたつてアイスウォーターの備へつけてないところはない。

ところがアイス・ウォーターは傳染すると見えて、暫らくアメリカに居ると、手すさび——口すさびについこれを呑みたくなる。おれが若槻全權などの一行と、英國の汽船で大西洋を横斷する時に、食堂に出てみると、このアイスウォーターがない。

『アイスウォーターをくれ』

とボーイにいふと、グラツドストーンのやうな顏をしてゐるこのボーイが、

『ハイ〳〵。ユーナイテツド・ステーツ・ビアーですか』

と、英國人一流のユーモラスないひ方をして持つて來たものだつた。アイスウォーターがアメリカのビールは成るほどいゝ。

　(241)

その婦人の話しを續ける。

『コツプのアイスウォーターがなくなると、何の氣なしに自分で取りに行く氣になります。途中まで立つて行くと、一緒に御飯を食つてゐる男の人が、眞赤になつて追つかけて來て、私のグラスを奪ふやうにとつて自分でくんで持つて來てくれるのです。つまり男の癖にそれぐらゐの氣がつかなくて婦人を立たした自分のボンヤリが耻かしく、また人樣の前で耻をかゝされたやうにも思ふのです』

どんな立派な紳士でも、食卓で、男の來た時には据つてゐてもいゝが、それがまた當然のことだが、婦人が來ればチヤンと席を立つて對手が席につくまで立つて敬意を表してをらねばならぬ。男だけならどんな話しをしてもいゝが、女一人這入ると話しは身體の上半身——乳ぐらゐから上のところに限る。

近頃、アメリカでは箱庭式ゴルフといふものが馬鹿々々しく流行つて、どこの町の隅に行つても、エヂプト式の野外裝飾でこれをやつてゐるが、おれがいつかこゝに行つてゐた時のことだ。球が飛んで外に出た。丁度、そこには二人の若い女がゐた。一人がそれを拾はうとすると他が強くその袖をひいて、

『それは男のやることではないの？　婦人がそんなことをしては見つともないわ』

といつた。おれは二人の會話を聞きながら、球を拾ひに行つた。

5　頭のあがらぬ地頭と女

こんな國だから裁判問題などになると、女に勝てつこはない。地主と地頭に頭のあがらないのは日本のことで、アメリカでは女よ、汝の名はいつでも勝利者なりだ。

『あそこに、その立派な婦人が居るでせう』

ある晩餐會におれの連れはさゝやいた。

『あれが有名な離婚成金ですよ。一人と離婚して一ケ月五百ドルづゝ扶助料をとるんです。それから半歳ばかりして、外の金持と結婚しまして、同棲半年もするとまた離婚訴訟を提起します。理由ですか、朝出て行く時にキツスをしなかつたとか、自分の友人が訪ねて來たのに、餘りいゝ顏をしなかつたとか、故に虐待なりといへば、それで大概いゝんだ。さうして財產半分くらゐを要求すれば、これまた結局扶助料一ケ月三四百弗には落ちつきますよ。かうして五人ぐらゐの男を履きかへて御覽なさい。立派に一生贅澤をして食へる月給が貰へませうがな』

おれがアメリカに渡つた船にトロントの音樂學校に行く日本の女學生がゐた。この娘が知つてゐるアメリカ婦人から、途中の心得を敎はつて來た。

『アメリカでは男が話しかけても、婦人は決して答へる必要はありません。それが女の特權なんですから、併し貴女が必要な時にはドシ〳〵お話しなさい。男は親切に敎へてくれます』

これをその通りに實行してゐたその女學生がある日報告した。

『今日、わたしが甲板を散歩してゐると、米國人の男と女が矢張り散歩してゐたんですの。女の人が突然とまつて默つて、足をデツキのてすりの上にかけると、後から來た男の人がその靴の紐を結ぶんです。アメリカの女は偉いんですのネ』

こんな國だから、アメリカの女臭いこと〳〵いつたらない。米國の男が人前で——男同志の間は別だが——決して肌らしいものを見せないでエアー・シツプの鑵みたいに固くなつてゐるのは女から出た習慣だ。男をそうやつてエア・シツプの鑵に入れこんでをいて、女自身は近頃、もう半裸體で身體中、祕密の個所などはありはしない。

アメリカでは男で髯を貯へて居るものは少ないが、ロンドン會議の時に、おれは新聞記者席から、各國全權の顏を見つめてゐたが、アメリカ全權で、それがどじようであつても、兎に角髯と

名のつくものを所有してゐたのは首席全權のスチムソン君だけしかなかつた。

このアメリカの無髯主義も無理がない、女を中心に動くこの國だ。女は元來、あんなところに毛の存在することなどは、なめらかな感觸を味ふ上からだけでも好みはしないのだ。

6　女なるが故に……

おれはアメリカに行つてから、兵隊の時に星ばかり苦にしたやうに、女のことばかり心配してゐた。どうせ單獨旅行だから、女のことは眞劍に考へたらうなどゝ、交ぜつかへしてはいけない。女に對する無禮はこの國では決して許されることはないのだから。

昇降機にのつても、おれはまづ恭々しく女が居るかどうかを見屆けて、女と名のつくものなら猫が居つても、チヤンと帽子をとつた。これは米國としては、無論當然な禮儀で、ホテルの主人がそこの女中と一緒にエレベターにのると女中は女王のやうに納まりかへつてゐていゝのに、主人は帽子をとつて禮を盡さねばならぬのだ。

華族だから威張れるやうに、富豪だから皆な頭を下げるやうに、女だから——たゞ女なるが故に威張つていゝ國だ。

かう說いて來るとナイヤガラ瀑布の裏道でみんな雨裝束をして、性の區別が出來ないのに困つた理由が分るであらう。男と女の相違が分なければ、どうしておれは、特殊階級に敬意を表することが出來るのか。そしてもしアメリカの華族である『女』に禮を失することがあつたら、おれは果して許されるか。

米國の港から日本の船にのつておれはホツと安心した。おれも漸く女のスカーツの蔭から拔けでる日の自由を味ふことが出來たのだ。それは兵隊屋敷から出た時と同じ氣持だつた。

第三　ロンドン印象記

十二月二十七日……

朝、フランスのシヤーバーグが見える。一週間にすぎない太西洋の横斷だが、誰もかれも陸といふものがもつ特殊な魔力に引きいれられる。

『陸が見えた、陸が見えた』

そう誰かゞいひ出すと、みんな水落ちに集まる金魚のやうに甲板に並んだ。

この冬の眞中といふのに、麥か芝か、眞青に生へて、柔かい線の立木がコンモリと、ところ〴〵に立つてゐる。それが佛國畫の實物を見るやうな感じを與へた。船は一寸波止場に寄つたゞけで、直ぐ出帆した。

正午から英國が見え出した。始めに現はれたのがアイル・オブ・ワイトといふ島。クロンウエルに追はれたチヤーレー一世が、こゝに逃れて、暫らく昔を忍ぶ牢屋住ひをしてゐたが、ついに殺されたところである。

船は靜々とサザンプトンの入江に入つた。一面に木が多くて、葉が落ちてゐるけれども、森の繁りは深い。その下に青いローンが清新な感じを與へた。入江の入口に赤い建物があるが、それは海軍病院だといふ。

『英國に來たのだな』

私達は甲板に立つて、新らしい土地に來たことを感じた。曳船には『グラツドストーン』といふやうな名があつた。

サザンプトンの波止場には金色の、胸にかける勳章のやうなものをかけた市長や、日本大使館の役人達がシルクハットを被つて船の着くのを待つてゐた。シルクハットの行列だ。われ等に『英國だ』といふ感じを新たにした。

波止場から船の方をむけて、盛んにキヤメラをまはす。日本人が傍に居つて指揮してゐるのを見ると、それは日本の大新聞社の特派員であらう。一緒に來た同じ新聞記者と打ち合せをしては、若槻全權や財部全權を代り〳〵にキヤメラの前に立たした。

サザンプトン市長が日本全權一行の來着を歡迎し、それから若槻全權がこれに答へた後で、われ等は汽車にのつた。普通の列車の二客車ばかりを買切つたばかりで、元より特別列車ではない。

アメリカや日本のやうに、汽車に乘るところや、波止場の周圍に、頑丈な柵のやうなものがないところが英國式である。

汽車はコンパートメントになつて、みんな仕切つてあるが、いかにも舊式である。便所なども、昔アメリカの田舍に見たやうな御粗末なもので、アメリカと比較するのは無論無理だが、下手にすると日本よりも惡いかも知れない。

汽車から窓外を見ると、その大陸的なところが一寸意外の感を與へた。英國といふと、直ぐ島國――日本といふやうな聯想からコセ〳〵した島國景色を想像するのが普通だが、今見る英國は、立派な大陸的風光だ。山はなく、あつても大陸的な悠長さで、廣々とした野邊には牛や馬が飼ひ放しにされてゐる。これだけ農園をあけてをけば、英國が費消する食糧の三分の二が輸入に待たねばならぬのは無理がない。

たゞ建物が古く、すゝけて『古い』といふやうなものは何處にも見られない米國から來ると、國の古いのが目だつ。

ロンドンの停車場についたのは五時半頃、こゝはサザンプトンと異つてさすがに日本全權に對する出迎へ人があるが、併しそれも多くは恐らく偶然に來合せた人々であらう。出迎人の中には

松平大使夫妻もあつた。

わたしは時事新報の小野君と二人でタツキシーに乘つてグロブナー・ハウスに行く。全權一行のホテルで正面に日本國旗が交叉してある。一夜二五シル（十二圓五十錢）は高い。何ケ月宿つても割引がないといふのだから、英人は矢張り商賣人でない。なんでもこゝは以前は華族の邸宅だつたのを、その名前をとつてホテルにし、日本全權の宿泊所で賣り出そうとするのだとか。アメリカのホテルに比して言葉が丁寧だ。

荷物ををいて晩飯を食ひにピカデリー方面に行く。ピカデリーといふと世界の賑やかな街の代表のやうに思はれてゐるが、アメリカの町を見た目にはこの暗いことはどうか。八時九時といふのに、もうショー・ウインドーが大きな金の下り戸で閉ぢられてゐるところも多い。英國は何といつても日本に近い。

支那飯に這入つた。そこにはもう同じオリンピツク號で來た一行の人々の顏が大分見えてゐた。日本人は一週間も洋食ばかり食はせられると、米の飯が幻に見えるほど戀しいのが常だ。それにしても支那料理が、世界の隅々まで行き渡つてゐるのは今更のことではないが感心される。

十二月二十八日……

お晝に『時事』の小野君『電通』の神子島君等と共にレストランに行く。ホテルやレストランなどで制服姿が目立つ。レストランの女給はどこでも制服を着てゐる。アメリカなどでホテルに宿ると、そこの働き人は必ず『グツドモーニング』と挨拶して、中々愛想がいゝが、ロンドンの宿屋では通りすぎても默つてゐて何にもいはない。併し何か話し出すと中々親切で、殊に道などを聞くと、とてもよく教えてくれ、辻にでも立つて分らないやうな顏をしてゐやうものなら、

『道がお分りになりませんか』

と先方から教えてくれるといふほどの氣のつきぶりだ。

町の派出なところからいへば、とても米國にはかなはない。第一、廣告の羅列の方法なども下手で、たゞ並べてあるといふだけだ。この邊のことでは米國では科學的に研究されてゐて、いかにも人の目を奪ふやうに陳列されてゐる。

われ等の宿つてゐるホテルも、アメリカ人の客をひくためにか、アメリカ流にしてゐて、アイスウォーターまで洗面所に出るやうになつてゐるが、とても俗惡だ。アメリカ人の趣味はバルガーだと、われ等も思ひ、世間も思つてゐるが、今度十ケ年振りに米國に行つてみると、少なくと

も一流のホテルや店では、好みが極めて澁くて上品だ。このホテルがアメリカを眞似たと思ふならば、アメリカ人は承知しなからう。

晩に矢張り支那料理に行く。

そこから出て散歩すると、ピカデリーの大通りには魔物の女が澤山歩いてゐるのに打つかる。

『ハロー・デアー』

と通りすがりに、小さい聲で囁いて、從いて來るのがある。

われ等三人でショー・ウインドーを見てゐると、

『あなた方は軍縮會議にお出でになつたのですか』と近よつて來る女がある。

『そうだが』と答へると、

『わたしはそういふことに興味を持つてゐるものですが』とて、

『わたしの家にお遊びにお出でになりませんか』と來た。

いかにもピカデリーは『危險區域』の一つではある。それからハイド・パークの暗いところを通つて歸ると、そこでも女が聲をかけた。木の暗い下蔭では二つの影が、ベンチの上に腰かけてゐるのも見られた。

十二月二十九日……

日曜である。

朝、外に飯を食ひに行くと、どこも閉めてゐる。大分歩いて簡單な洋食屋をさがした。成程、英國は日曜には嚴格だ。教會に行くのであらう、シルクハットにモーニング姿の紳士が大分見える。

オクスフォード街をハイド・パークに出ると、その隅の廣場に人集りがしてゐる。それが有名なハイドパークの野外演說だ。椅子を高くしたやうなものゝ上から思ひ思ひに演說してゐるが、日曜の朝だから、多くはお說教だ。演說の最中に質問をすると、辯士が答へる。お互ひにユーモアーを飛ばすと、聽衆がみんな笑ふ。いかにも英國人流の餘裕がある。機械では米國人を眞似て、遠く米國人に及はないが、知識的には、さすが世界に冠たるものあるを想はせる。

午後、オンニバスにのつて友人四人で市內を見てまはる。ロンドンには電車といふものが極めて少なくて（地下線は完備してゐるが）地上の交通機關は大概この乘合自動車だ。廣告を張りまはした二階のあるもので、一見、廣告塔が走つてゐるやうだ。

ヴイクトリア・ステーションで乘りかへてウエストミンスター・アベーに行く。鎌倉大佛樣は色が黑くておはすが、これも建物が黑い。今半分洗濯し始めてゐて、黑白二相の大寺院が出來あがつてゐる。午後三時からサーヴイスが始まつたが、それが奇態に日本のお寺のやうだ。人の信仰と歷史は結局同じものをつくりあげるものだ。

不信心な東洋の旅行者は、サーヴイスを途中で出て直ぐお隣りの議事堂を見る。內部を見せるのは每金曜だけで、外の日は堅く門が閉まつてゐる。古いけれども堂々たる建物で、アメリカのビルヂングが能率主義で四角なものが多いのに、英國のものは尖つた屋根が幾つも林立して、それが建築美を現はしてゐる。

ウエストミンスターの橋の上から、このバラアメントを望むと、テームス河の洋々たる流れがその土臺を嚙んでいかにもロンドンに來たといふ感じを深くする。議事堂の一端には高い塔があつて、それに大時計（ビツグ・ベン）がある。この橋の上に立つて、あのビツグ・ベンを見ながら、燃えるやうな野心に振ひたつた青年が昔から何人あつたことであらうぞ。そして政治を何よりも尊しとする英國人が、男子生れて須らく、あの屋根の下で華々しい政治生活をしたいと庶幾ふ情が起るのに無理はあらうか。

われ等が橋の上に立つてゐると、勞働者が丁寧に說明してくれた。なんと親切なことかと感じたのも理はり、この人々は失業者で、自分のサーヴイスに對して幾らか金を貰ひたいからなのだ。併し金をサーヴイスと交換しようとするところが英國人で、理由なく貰はないところが氣に入つた。

そこから地下線（英國ではアンダー・グラウンドといひ、紐育ではサブといふ）でロンドン・ブリツヂに行き、そこからタワー・ブリツヂを眺めた。

『ロンドン、ブリツヂ、フオリング、ダウン、フォーリソグ、ダウン』

といつて、今、鶴見に居る義妹が、五つか六つの時に、繰り返し〳〵歌つたのを想ひ出した。現在は機械の進步によつて何でもないことであるが、その昔、これが出來た頃、船が通るごとに橋が上つたり下りたりすることが、どれだけ子供の好奇心をそゝつたことであらうか。

ウエストミンスター橋や、此ロンドン橋の上に立つと、ほんとにロンドンといふ町の歷史と美觀が感ぜられる。ロンドンはテームス河だ。ピカデリーとボンド・ストリートと、バンクストリートと――それ等をすべて捨てよ。ロンドンはテームス河だけで、なほ世界一だ。

そこから『常盤』といふ日本料理屋ですき燒を食つた。日本料理屋がロンドンで四軒ばかりあ

つて、アメリカと違つて左黨には日本內地製の酒に事かゝない。

十二月三十日……

午前、セルフリツヂといふデパートメート・アーに行く。僕は大きな町に行くと、必ずデパートをのぞくのを常としてゐる。そこの產業と、そこの流行と、趣向と、購買力が一番よく分るからだ。ロンドンには餘り大きなデパートはなく、この店も米國人——少なくとも米國で育つた人の經營だといふ。

ロンドンの物價は高い。ロンドンで買物をすると、その持ちのいゝのでこたへられないといふが、同じ種類のものが他に比して高いやうに思ふ。英國は『世界の工場』といはれた國、それは外國がまだ機械を有しなかつたからだ。今英國が必ずしも機械及び合理化において勝れて居らないのに、勞働賃銀は生活の向上に從つて高く、それに加へて戰爭の結果による重稅がある。工業品が高値になるのは無理のないことで、これで外國市場で競走するのは困難だ。

今まで樂觀されて來たロンドン海軍會議は、フランスの橫車的提案の故に、少し面倒になつて來た。日本の立場は、たゞ七割一點張りで、奇も妙もない。專門家的立場からだけでこの會議に

臨むなら、政治的見識は何の必要があるのだ。

聞くと僕が七割無用論を述べてゐるので、軍人連は僕を弱氣の大將だといつてゐるそうだ。國家のためと信じ、迷信的な輿論を押しきつて、反對な立場をとるのが何で弱氣であるのか。

晩に日本人經營の支那料理に行く。ロンドンで研究してゐる留學生や、印度人、黑人などが居つて、人種展覽會のやうだ。こゝでは『すき燒』もやつてゐるが、英人で食つてゐる者も少なくない。

十二月三十一日……

托されたものがあつて、日本海軍事務所に行つたが、誰も居らず成程、考へてみると大晦日であつた。

セント、ジエームス、パレースの前の大通りを通つてドーニング・ストリートに行く。この邊はロンドンの眞中だが、公園があつて、ところ〳〵に高い塔があり、道が廣くて氣持がいゝ。東京の貧弱さが、また思ひ出された。

ドーニングストリート十番で知られてゐる首相官邸は、世界に最も印象深いにしては甚だ

貧弱である。小路の間にはさまれた古びた一個の建物にすぎず、門構えもなければ、前には庭もない。藏相官邸と相接して、長屋といつた方がいゝ。『歴史』に執着を有する英國人でなければ、屹度、とつくに改造問題が起つてゐるに違ひない。

それから私はテイト、ガラリーといふ美術館に行つた。テイトといふ人が、中の大部分の繪と共にこの建物を寄附したのである。

ターナーの畫を見てゐると、話しかける英國人がある。武藤山治氏の店に居る山田中といふ人の名刺を出して、

『日本人に非常に尊敬を持つて居る』といふ。

『どうです、お茶でも呑みながら、お話しようではありませんか』

と、その地下室にあるレストランに行つて、雜談を始めた。

『これから英國を旅行されるなら、私の家に來られてはどうです。自分はランカシヤーの者だが歡迎しますよ』といつて名刺を出したのを見ると牧師である。

話しを聞くと、今ロンドンでイタリーの名畫が陳列されてゐて、昨日は招待日であつた。かれはそのために出て來たのだが、

『イタリーの繪と、英國の繪とどういふ相違があるか、改めてそれを見直しに來たのです』

といふ。外國のものを見て、それに對して自國の美術が、どの程度の價値と力量があるか。それを見直して安心するところに、英國人のいゝ意味の自尊心がある。

『どうですか、今夜私の客となつてくれませんか。私のホテルに來て下されば、御一緒に御飯をいたゞきたいが……』

と、私がいふと、

『大變結構です、それではあがりませう』

と、二人でそこを出て、同氏が宿つてゐるコンスチチユシツヨナル・クラブといふに行く。保守黨のクラブで、慶應義塾の交詢社にもあたらう。老人達が休憩室に澤山ゐた。壁には保守黨から出した大政治家の肖像などが、かゝつてゐた。

七時半に同氏は約束に從つてホテルをたづねて來た。今日始めて逢つた二人は、十年の知己のやうな心安さで、ホテルの食堂で越年の晩餐を共にした。かれは英國人の特色を語つた。

『あれは英國人で、あれはアイランド人で』

と、食堂に這入つて來る若い婦人を容貌で一々説明したりした。

英國人はアメリカ人に比すると、言葉が正確で、文字が多いのに氣がつく。六かしい英語が普通に使はれ、殊にそれが教育ある階級に甚だしい。商店の廣告などでも、米國では極めて容易な文字を使ふのに――それは外國人が多いからでもある――ロンドンでは中々嚴めしい英語を使つてゐる。エッチ・ジー・ウエルスが米國人のボカブラリーが少ないといつた言葉が想ひ出された。

同氏は保守黨員だが、併しマクドナルド氏を信用してゐた。またスノーデン藏相とは選擧區を同じくしてゐる關係があるが、その頭腦が驚くべく明快であることもいつた。

同氏は午後十時に約束があるといふので再會を約して分れ、私は一人で除夜の光景を見るためにピカデリーに出かけた。アメリカの賑やかさには比すべくもないけれども、人道は人の通れないぐらゐ混んで居り、道の隅には人群りがして、みんなで俗謠を調子を合せて謠つてゐる。

『ワーツ』

と押しあふから、行つてみると、婦人などを眞中にして陽氣に騷ぎたてるのだ。何の秩序もなく、誰も制裁するものもないが、それでゐて少しも亂れない。

私はバスに乘つてハイド・パークの角で下りると、既に午後十二時を過ぎ、ハイド・パークの門は閉まつて、群衆は外に押出されてゐたが、かれ等はそのまゝ矢張り屯して、そこで景氣よ

く謠つてゐる。自由でありながら少しも亂れない自治の國民が、羨ましく思ひながら、私は一時頃寢た。

一月一日……

異鄕で迎へる元日だ。强いて新しい氣持になつてみるのだが、どうも變つた氣も起らない。

午前九時すぎに日本大使館に行く。雨が降つてゐる。もう大分人が來てゐて、二階の廣間に兩陛下の御寫眞をおかざりして、列を作つて拜賀してゐる。松平大使夫妻が、みんな握手をした。

下の部屋で、日本酒とゴマメと、小さい餅の這入つたお雜煮を出した。若槻、財部兩全權は、みんなに取卷かれながら、立食した。

ロンドンのお正月は平日と、殆れど異なつたところはない。店を開いてゐるところも多い。夕方、電通の神子島君と共に『都』といふ日本料理屋に行つて鰻を食つた。これで少しくお正月氣分だ。

ロンドンの町は、冬の間、太陽といふものにお目にかゝらないが、今日もドンヨリしてロンドン會議の交渉のやうに、要領をえない天氣だ。

第四　ベルリンの旅日記

三月五日……

朝七時二十九分、汽車でアムステルダムを出發した。ベルリンに行かんがためだ。

ホテルを出る時に、見送りに出たポーターに、

『停車場まで行くのに自動車に幾らやつたらいゝのか』と聞くと、

『一ギルダー半おやり下さい』といふ。停車場で、それに從つて二ギルダー出して、五十錢のお剩りを豫期してゐると、默つてそれをしまひこんでしまうのだ。

『一ギルダー半だといつたよ』

と突つこむと、かれは澁々それを出した。

プラットフォームに出ると、汽車は、もう煙を吐いてゐた。汽車の中で讀むものをと、ニュス・ボーイからサタデー・イヴニング・ポストを買ふために一ギルダー出すと、矢張りお剩りをよこさない。

『失禮ですが、あなたは英語をお喋べりになりますか』

私は隣りの人にそう聞いた。イエスといふのも道理、かれは英國人である。『この中からお金をとつて貰ひたいのです』私はかれがヘツド・ウエイターにそう傳へてくれることを賴んだ。

『ヘツド・ウエイターは料理代はとつてしまつて、それはお剩りなんですよ』

なんだ、それなら始めからそういつてくれゝばいゝではないか。成程ドイツではチツプは一割を代價に加へてあるので、それ以上とらないことになつてゐる。ウエイターは始めは、私がチツプを、も少しとれといつてゐたと解したから、ニコ〳〵して充分であることの意志表示をしたのだが、後でお剩りが足らぬと私が抗議してゐると解して、何回も金を數へて私に突きつけたのであるらしい。

午後五時五分、汽車はベルリンのフレデリツヒ・ストラツセ驛について、そこから私はタツキシーでカイザホツフといふホテルに行つた。タツキシーの中から眺める頑丈そうな建物が、ドイツといふ感じを新たにした。

『部屋を下さい』

事務所の前に立つと『ヤ、ヤ』とばかり、いくらの部屋が必要ですか、ともいはない

『こゝにあるが餘り惡いし……』

と自分で決めてしまつて居る。大戰以後、ドイツのマルクが安かつた頃、日本人はこゝらに宿り込んで豪遊を決めこんだものだそうで、日本人の顏を見ると、上等の部屋を割あてることにきめてゐるものらしい。

部屋に行くと、案内をしたボーイが、金を貰ふまで、中々動かない。洋服をプレスに出すと、

『外に何か御用はありませんか』と、パレット君執拗に好意の押し賣りをする。

荷物をホテルにおいて、私は外に出た。

町はニューヨークなどに比べては暗いが、整のつて綺麗だ。それに計畫的に街がプランされてゐて、東京のやうに出鱈目ではない。その街の暗いところには白粉の女が澤山ゐるのが目立つた。

ウインター・ガーテンといふ劇場へ這いる。切符を買つてくれた番人が、こちらから何ともいはない前から、すばやく『有難う』といつてお剩りをせしめた。外套や帽子を預けるところで、同じく剩り錢を誤魔化そうとする。私は嫌な感じがした。

三月六日——

『八十錢と書いてあるではないか』

といふと、氣がついたやうに二十センツを出した。

アメリカや英國では剩り錢を途中で失敬してしまふやうなことは決してない。チツプとして貰ふのなら、一應所有者にそれを返して、その上で所有者の自由意志によつて受けるのを常とする。

『歌洲大陸は少し違ふぞ』

眠り不足の眼をこすりながら、私はそう思つて警戒する氣になつた。

汽車は內部を幾つも仕きつてある箱式だ。日本ではシーツが列車と同じやうに縱に長くて、誰でもお客の前を自由に通ることができるが——つまり日本の家屋がそうであるやうに頗る開放的であるが、西洋では廊下と、据つて居るところとは區劃をして、とに角、その生活の個人性を尊重する仕組になつて居る。プライヴアツシーなき日本と、プライヴアツシーある西洋と、それがこんなところにまで現はれてゐる。

汽車が走るところ、どこまで行つても平野である。日本に生れて、地上といふと、直ちに山を想像するわれ等にとつては、かういふ大陸が珍らしい。

オランダの國境を越えて、ドイツに入ると、日本流の松の林があるのが目立つ。その間に、白

樺であらう眞直な白い幹の木がスク〳〵と立つてゐる。

お蜜にボーイが呼びに來て、私は食堂車に行つた。食物の量が大分多いのと、食つてしまふと『もつとおあがりになりませんか』と追加を持つて來るのが珍らしい。それが定食だ。御飯を終つて、私は英國のポンド貨を出した。

『これからお金をとつて下さい。』私の前に並べられたマルク貨を指さして、私は英語でそういつたが先方に英語は分らない。

『これからとれ』と手眞似するのだが、かれは手を振つてとらぬ。私はそのドイツ貨幣を、いつまでも私の前において、困つた顏をしてゐた。

食堂車全部の勘定が終つて、ヘッド・ウエイターは私の前を通つた。

『これからとつてくれ給へ、』東洋の紳士が食ひ逃げをしたとあつては、祖國の顏に對してもすまい、私は、も一度催促した。

かれは嫌な顏をして、そのマルク銀貨を數へて何かいふのだ。分らない男ではないか、そこに金があるからこそそれから自分の分をとれといふのだ。私は金をとることの苦勞は慣れてゐるがやることがこんなに困難なものだとは思はなかつた。

昨夜聞いておいたので、朝、サイト・シイング自動車で伯林の町を見る。

案內人がドイツ語で喋つて、それから英語で說明して、後でロシヤ語までやる。大してうまくもなからうが、こゝらの人人は四五ケ國の言葉が話せるのだから豪勢である。

どこの國でも海外からの旅行者に便利を與へて、外客招致に力を入れてゐるが、こゝにも銀座にあたるウンター・デン・リンテンの角に小事務所を造つて、地圖や說明書を無代で配つてゐる。そしてその近くから二三の會社の大型自動車の觀光車が出るのだ。それが私の乘つたバスだ。

『これがカイゼルの宮殿であつた建物です、これが皇太子の御住居でした』

案內者はそう說明して行く。町の中央のいゝ場處を占めてはゐるが、塀や境は全然なくて、建物が街に向いて立つてゐる。今ではそれ等が殆んど總べて博物館や記念館になつて一マルクかそこ〳〵で見物人を入れて居る。

『世界大戰の始めには、あの二階のバルコニーから、カイゼルが演說をされたのです』

と案內人は大廣場を指した。そこに雲霞のやうに集まつた群衆と、戰爭熱に火のやうになつた國民を想像しながら私は動く世相を考へた。

ベルリンの街は非常に綺麗で、塵一つ落ちてゐない。町の眞中にある廣いチアー・ガーテンが

一つ東京にあつたらと思ふ。廣場の角には銅像や大理石像が立つて、それが町の氣品を添へてゐる。

一應町を見て、私は日本大使館の官邸に長岡大使を訪問した。廣い應接間に待つてゐると、鷹揚な大使が出て來た。

『伯林の印象はどうです』といふから、

『非常に疲れてゐるやうです。どこに行つてもボーイなどがチップを欲しがるが、それは疲れた國民の表象ではありませんか』

と答へると、

『そうですか、伯林はまだそうでもありませんよ。こゝから東の方――イタリーにでも行くとそれが目立ちます。こゝらでは皆チップをやりますよ』

といふのだ。

聞いてみるとホテルでもチップは一割といふことになつてゐるが、これはベッドを直すメイドなどに渡るので、ボーイには矢張りやるのだといふ。そういふ習慣があるのに、やらないのならこちらが惡からう。

『ドイツ人は將來恐るべき國民だと思ひます。その創造心とネバリ强さは、何といつても世界有數の人種でせう。産業的には恐るべきですが、併し金融の網は佛國人に握られてゐます。ドイツ人はこの點を心配してゐる』

長岡大使はそういつて、『併し共産黨などはこの國では、ものになりますまい、騒ぐほどのことはありません』と說明した。

私はそこを出て、一人で地下電車に乘つてカイザーダムの佐藤謙造氏を訪問した。同君はベルリン大學を敎へてゐるが、音樂の研究者である。

『桑港の兩角君から手紙が來てゐましたので、御電報があると計り思ひました。お出迎へもせずにすみません』

と親切に私を迎へてくれた。異鄕の地で日本人に親切にされるぐらゐ嬉しいことはない。

『どこかに夕飯でも食ひに行きませう』

そういつて佐藤氏は立つた。私達はフアーターラントといふ大きなカフエーに行つた。

入口は大きな芝居のやうな建物だ。一マルクの入場料を拂つて中に這入ると、內部は幾つもにしきられてゐて、トルコの間、アメリカの間、南部ドイツの間といふやうに、その國國の風俗を

そのまゝ出して、とても大きな仕掛けである。私達はライン河の間に陣どつた。正面にはライン河のパノラマを出して、全く實物のやう。三十分ぐらゐ間をおいては、その邊特有の大雨を降らせる。雨の間には汽船や小舟が河を上下してゐた。

暫らくすると一方の舞臺に電燈がともつて、そこからオーケストラが出て來た。俗謠のやうなものを謠つてゐると、そこへ半裸體のダンサーが二十數名、バラリと出て食卓の間を縫つて踊るのだ。白い手が見える、股の動きが見える。

『東京でこんなものが現はれたら』

私は佐藤君にそう囁やいて、ドイツでこの邊の取締りが寛大であることを驚嘆した。しかもこれは單に御飯を食ふところにすぎないのだ。

私達はそこを出て、ヴイクトリア・ルイゼといふカフエーに行つた。日本人間ではヴイクトリアをもぢつて單にトリヤで通つてゐるところ。日本人の本據だ。

日本人だけの部屋といふがある。英語の出來る音樂家がゐて、そこでは春雨や、越後獅子をひいで、そこに陣取つてゐるドイツの若い婦人達がそれにつれて踊るのだ。日本人がドイツでは中々勢力があり、それに日本人に對して蔑視するといふやうな感情が少しもないのに好感が持たれた。

三　月　七　日——

今日は朝からポツツダムを見る。

ポツツダムといふのは伯林の郊外の町で、フレデリツキ大帝がこの地を愛して、宮殿を造り好んで往つたところ。今は無論國有である。

內部は贅を盡して、繪畫や道具が目を驚かすばかりである。最後のカイゼルも時々來たそうで、その記念の部屋がある。ありし日のカイゼルの廣大な勢力が目に見えるやうである。

ドイツに來て見物するのは、たゞ昔しの帝王關係のものばかりといつた感じがある。名所といふと、かつてホーヘンツオルレン家の宮殿であつたところか、それに關聯するものばかりだ。

『外のドイツの寶物はどこに行つた?』

私はそれ等を見ながら、獨言をいつた。ドイツが生產して、後年、世界に公開するに足るものは必らずしも皇室で集めたものばかりではない筈だ。併しそれ等のものは殆んど悉く四散して——少なくとも個人の手に死藏されて、今、皇室關係のものばかりが、かうして東洋の旅行者までの眼を樂しますのだ。この國寶保存者といふ意味からでは、ドイツはホーヘンツオルレン家

に感謝する理由がある筈だ。

ドイツは合理化運動の本家だといふが、食ひ物だけを見ても合理化してゐる。フリードリツヒ・ストラセのやうな繁華の町には、自動食堂――紐育にもあつてオートマツトといつてゐるが――があつて、金を入れると、ビールでもサンドウイツチでも何でも出るやうになつてゐる。つまり十錢でゞも十五錢ででも一食が食ひうるので、一方高尚なものも無論澤山ある。自己の威嚴を落さず、に充分に食ひうるところが、ドイツのいゝところである

併し佐藤君の話しでは、近來迚も不景氣で、失業者も二百萬を越えてゐる。

『十ケ年ぐらゐの內に屹度何かありますよ』と、同君はいつた。

三月八日――

朝、大使館に帝國議會の入場券を貰ひに行く。待合室の名簿を見ると、知つた人の名前が澤山ある。伯林に來たことの記念にみんな書入れるのだ。私も自分の名を書いた。

入場券を持つて、私は迷仕ついた後漸く會場に入つた。入口で『外套を』といふから、それをあづけると一マルクとられる。その代りブログクムをくれる。

『寫眞を買つてくれませんか』

そこに居る看守が、議會の建物や請負寫眞名簿のやうなものを勸める。議會でそれを賣るのがドイツらしい。

議場に這入ると丁度ヤング案を討議してゐた。傍聽席は周圍の高いところにあつて、議場が見下せるやうになつてゐる。英國議會は入場するのに何回も署名したりして面倒臭いが、こゝでは傍聽席に行くのに殆んど何等の手續きがいらぬ。見下すと婦人の議員が數名ゐるのが見られた。

議場は上への天井が磨硝子で、そこから光線が來る。その天井の周圍には金色の彫刻が眼を奪ふやうな綺麗さである。正面の上には銅の立像がある。英國の議會は外こそ立派だが、內部はこの壯麗さと比すべくもない。

議長は正面の一段高いところにあり、その下には演壇がある。その邊を橫に二列になつてゐるのは、大臣席及び政府委員の席であらう。演壇の下の方から、目立たぬやうに地下室に連なつて裏に通ずる口がある。

議員の席は日本のやうに一人で一つの席を占めてゐるが、重要の討議にもかゝはらず席の空いてゐるのが目立つた。議員は壇上に行くと頭一つ下けずに、すぐ喋り出す。日本と違つて手を叩かず、時たまヒヤ〳〵といふぐらゐなものである。辯士が演說中に何か質問があると、それに答

へるところは英國式である。

正面の壁にその日の演說の順序が洋食屋の看板のやうに、黑い板に白く書いて差し込みになつて出る。大體の構造は、日本が眞似たといふやうに、日本の議會に似てゐるが、守衛などはあんなにゐない。

私はそこを出てウイルヘルム・バレースを見た。そこに居る寫眞屋が撮らしてくれといふから、『幾らだ』といふと『四マルクで、バレースを見てしまはれる頃に出來あがります』といふ。後で聞くと、普通は三マルクだが、旅行者だと見て四マルクとつたのだといふ。小さいことだが不快だつた。

併しかうした小さいことは別として、伯林は居心地がいゝ。われ等を見る目に少しも輕蔑の色がないし、女が英米と違つて、靜かなところがあつて日本流である。ドイツといふ國は、矢張り將來、恐ろしいところがあるのが短い旅行でも感ぜられる。佛國などが心から恐れてゐるのは無理はない。

第五　ポンペイの死都

イタリーに來て一番興味のあつたことはポンペイの死都を見たことであつた。ローマから急行で三時間でナポリ（ネープルス）に達する。そこから自動車で一時間ばかり行くと有名なポンペイの死都がある。

私はローマから日本人の案內人として有名であるアントニオに電報を打つたが、他に案內する約束があつたと見えて停車場に來て居らぬ。蠅のやうに集つて來た一ホテルの人の口車にのつたのが私の落度で、私は怪しげな小ホテルに連れて行かれた。

言葉の出來ない國で、信用のおけないホテルに連れて行かれたほど、腹立たしい、不安心なことはない。併し、さらばとて乘りかけた船を下りる眞似も出來ない。私はぼられると知りながら自動車を雇入れて、ポンペイに出かけた。金曜か土曜かにムツソリニ首相に逢へるだらうといふ外務省の言質があるから明日までには、どうしてもローマへ歸らねばならぬのだ。

イタリーに來てから、旅行人から——言葉が出來ないのをいゝことにして、金をしぼらうとい

ふ態度が、私を限りなく不快にしてゐる。ナポリは、もう桃や杏の花が滿開で、氣候がカラツとして、極めて氣持がいゝが、併しかうしたホテル人やその他が、私を氣持惡くさしてゐた。

ポンペイの町につくと、その入口に、また案内人が山のやうにゐて、頼みもしないのに蝟集して來る。六十リラ(二八圓)の案内料だといふので、いらんといふと、結局、日本語の少し出來る男が二十五リラでやると云ひ出した。驅引きはこの國人の特長である。

併し私は、いろ〳〵で無茶苦茶に金をとられたけれども、一日を割いてローマからポンペイに來たことをいゝことをしたと思つた。二千年以前の人間の生活をこれくらゐ正直に畫き出してゐるところが、他にあらうか。私は二千年の歴史といふものが、人間を案外進歩させないものであることに驚嘆した。

誰も知るやうにポンペイはナポリの近くの町であるが、紀元七十年の頃に、ベスヴィアス山の噴火による灰のために、突然埋れて十八世紀の末まで世界が少しも氣がつかなかつた町である。掘つて見ると、その時の人間と家が、そのまゝ埋つてゐる。逃げんとした人間や犬やがマミーとなつて掘り出されて陳列されて居る。

この町は、當時の歡樂鄕だつたそうで、大きな公共浴場が四つ五つある。いかにも整つたもの

で、その規模の大なる全く想像以外である。既に中央の設備になる煖房裝置（セントラル・ヒーチング）が發明されて居つて、浴場には立派にその跡がある。大理石の浴室や、トルコ・バスなど現在のいかなる浴場も及ばないであらう。

暗い小路ではその當時の人間も小用をしたと見えて『このところ小便すべからず』と書いた文字がそのまゝ殘つてゐる。また當時、この町で選擧が行はれたのは、壁に有力者の名が記されて居ることでも分る。町の中央のフォラムには無論演壇みたやうなものもある。もしそれ劇場に至つてはローマ流のものと、グリーキ流のものと二つあつて、あんな立派なものは東京にはない。

驚いたことは、當時醫學が中々に進歩してゐたと見えて、醫料機械が現在と違はないまでに出來あがつてゐる。古代の文明が戰爭や迷信のために一時沒落して途切れたことが、ポンペイの町によつて極めて雄辯に物語られるわけである。

この町が享樂の町であることは前にのべた。こで町について特に面白いことは、その醜窟である。醜窟の現在、そのまゝ見ることが出來る。これに關してはここで書くことは出來ぬがいかゞはしい壁畫や、町の模樣やが、當時の狀態を極めて明瞭に殘してある。

こゝの人口は二萬であつたそうで、その內生きながら埋められたのは二百人だけだつたとのこ

とである。町が地の下に埋つてゐると知らずに、その上に家を建てたのが殘つて居り、現在の町の下にも、尙古都があつて、その發掘は半分にも達して居らぬとのことである。

ポンペイの町への入場料は他の場所と同じで無料である。この點は伊國政府が外客をひくために取締つてゐる。但し所謂秘密の場所には鍵を持つた番人がついてゐて、少しのチップをやる用意は必要である。

第六　キッス祭り

『少し遲かつたネ。も少し早く來られゝば、キッスを嫌といふほどいたゞけたのにネ』

ジュネーヴに行つた時に、國際勞働局の鮎澤君がニヤ〳〵笑ひながらいふのである。美人からキッスされて果して、『嫌といふほど』な氣持を起すかどうかは、まだ實驗をしてみないから分らないが、一寸話しを聞いたゞけでも、遲かりし由良之助、地團太踏んで口惜しがつたゞけは事實である。

『この湖水の近くにルザーンといふ町があるが、その近くの町だ……』

鮎澤君は名前も明確りいつたが、つい事實に興味を持ちすぎて、町の名前などは忘れてしまつた。またかりに忘れないところで、希望者には郵券封入二割增しで問合せて貰つた方が商賣になる。

その町はこの昔、敵軍に攻め入られて、町の運命危ふく見えたりけるが、そこの若い男子や援兵の懸命なる奮鬪のために救はれて、敵を擊退してしまつた。

さアその町の人々の勇士に對する感謝は非常なるものである。殊に婦人連中は、感謝と憧憬を一緒くたにして、平生は買つて貰つたばかりの手持鞄のやうに大事にしてゐた唇をこの勇士達のために惜げもなく解放したのである。その後、産業が進歩して種々なものを大量生産するやうになつたが、キツスの大量生産だけはこの頃から始まつたものらしい。

ところが習慣とか記念祭とかいふものは一寸したことから起るもので、これがそこのお祭りになつてしまつた。毎年此の日が來て、電燈があの湖水にキラ〳〵映る頃になると、若い男や若い女――老人だつて試みて餘り氣持の惡いものではないから、顏の皺を白粉で塗りつぶして、道を通る誰でもチユチユやるのである。

『や、とても困つたことがありますよ』

と謹嚴な鮎澤君がいふのである。

『いつか鐵道省のある技師が來たので、その町に案内したことがあります。私もついウツカリしてゐましたが、丁度其の日がキツス祭の日だつたんです。その人が日本人旅行者が屹度持つて居るやうに寫眞機をブラ下げて歩いてゐると、先方から妙齢の婦人が來て、突然抱きついてキツスをするのです。これが文士でゝもあつたら、オツと有難うぐらゐで、こちらから攻勢に出たかも

知りませんが、ゲーヂが何フイートで、レールが何メートルといつたやうなことばかり數へてゐる先生だからたまりません。キヤツといつて逃げ出した。暫らくすると、また他の女が來てキツスするのです。先生、すつかり吃驚して匆々に汽車にのつて逃げ出したことがあります。後で謂れ因緣を話してやると、なんだ、そんなら覺悟があつたのにといつてゐました』

『それは世界が、とつてもつて範とすべき立派な習慣ですネ。參考のために是非見ておきたいがこの次ぎはいつです』

『ごの間終へたばかりです。參考書ならあるかも知りませんよ』

おれはどうも、さういふ事を參考書で研究することは嫌ひな性質だ。この次ぎにスウイツランドに行く時には、おれは暦をつけることにしてゐる。

第四篇

樂屋から見たロンドン會議

第一　アメリカの若槻全權

1　財部全權の脱線

ロンドン會議の成功、不成功は、政治家がどれだけ軍事專門家を制して、所謂政治的解決が出來るかにある。

ジュネーヴ軍縮會議が失敗して、この種の會議を軍事專門家に委すことの危險なことを知つた世界は、ロンドン會議には、その主要役者は政治家ならざるべからずとした。そしてその役割によつて舞臺に上つたのが若槻禮次郎氏である。

元の總理大臣であり、主席全權である若槻氏は、無論總べての對外交渉の矢表てに立つた。聲明書の發表も同氏がすれば、新聞記者の質問應答も一手にこれを引き受けた。財部海相は名は全權であるけれども、全然並び大名で、たゞあの愛嬌のある應揚な姿を、一緒に並べて居るといふにすぎなかつた。

併し財部海相が、單に一緒に歩くためだけに來たと思へば間違ふ。かれは若槻といふ政治家に對する軍部側のお目つけの任務を有するのである。若槻が行くところ、必らずかれが傍にある以上は、若槻の言説は常にかれを反映せざるを得ない。

この財部海相が、米國においてまづその示威運動を示した例がある。當時、列席の人々は悉くかれが「脫線」したといつたが、併し私は必らずしもそうではないと思ふ。

全權一行を乘せた西比利亞丸がシアトルに入港した十二月十一日の夜、一行のために岡本領事主催で歡迎會が開かれた。招かれた者は同地の日本人ばかりで、地方人の辭として、何人も長い演説をやつて、その後で若槻全權の答辭があつた。

『一國の國防は絶對に安全なることを必要とする。われ等は何人からも冒されることがあつてはならぬ。併しながら軍備縮少は世界の輿論である。われ等はこの世界の傾向に貢獻しなくてはならぬ。この矛盾をどうするか、そこにこの會議の重大性がある』

若槻氏の演説は如何にも政治家的で、どこからも隙がない。

その後で直ぐ財部海相が起つた。あの薩摩辯で、後になるに從つて自から昂奮して、腕を縱横にふるつた。

『もしこの軍縮會議が不成功に終り、海軍擴張競爭が起つた場合には、日本のやうな貧しい國は、到底米國と競爭が出來ないといふものがある。日本は未だかつて金持であつたことはない、併しそれに拘はらず海軍を現在の地位に持ち來たしたではないか。また八々艦隊をも造る筈であつたではないか。海軍費を豫算からとることが出來ない場合には、畏こくも御手許金から支出したことすらある。戰爭は金ばかりで勝つものではない、そこに日本人の特性がある。見ろ、米國には一隻の一萬噸巡洋艦もないのに、日本は來年になると八隻もある……』

財部海相の演説全部を書くことは差控へるが、日本國民は他國の無理な壓迫に對しては決して屈しない、と日露戰爭を引合に出したりして大氣焰を吐いた。

晩餐會が終ると、海軍の高官が新聞記者席へ飛んで來た。そして今の演説は日本に打電してくれるなと賴んだ。

『もしあれを打つやうなことがあると今後、信用できない者としてしまふぞ』

とまで附け加へた。七八十の出席者のある公會の席上で、全權が聲明したことを取次ぐことが、なぜ「不信用な男」であるかは今尙解することが困難だが、兎に角、かうして問題は「財部海相の脫線事件」ですんでしまつた。

2　最初に出した「最後」の切札

かう書く私とて、その當時であれば、矢張り內容はその儘傳へなかつたに違ひない。けれどもそれは既に過去のことであり、それが單に財部全權が、列席の對手を日本同胞としてフランクな私見を述べたにすぎないものといふことで閉幕したのだから、こゝにたゞ一つのバツシング・インシデントとして書くのである。

たゞ問題はこれが果して「脫線」であるかどうかである。米國の土地を踏んだその第一日において、かうしたことをいふ可不可は無論問題になるであらう、併し同行の海軍將校は——記者の口をふさいだその人すらも、これ以外の考へ方をして居るかどうかである。

これを一面から觀察すれば、米國における第一日は、卽ち若槻、財部兩　權が始めて全權としての公道を歩む第一日である。この時に當つて、海軍を背後に負ふ財部全權は、この決心を改めて僚友である若槻氏に確言しておくの必要を感ぜなかつたであらうか。言葉を代へていへば、當夜の大膽なる演說は財部全權がシヤトルの在留邦人に語つたものでなくて、その舌鋒は若槻首席全權の方にむいてゐたかつたと倒人が斷言するであらうか。

脫線であらうがあるまいが、この「決心」の表白に對しては、若槻全權はどうしても耳を傾けざるを得ない。

この財部海相の「脫線演說」の效果は直ちに若槻全權に響いたと私は思ふ。卽ち一行がシカゴに着するや、若槻全權は新聞記者に對して、日本は補助艦につき七割の比率を要求すると聲明して全國を驚かしたのである。

米國の聯合通信は十二月十五日の日付けで左のやうな若槻全權の談を傳へた——。

『補助艦に關する限り日本は最大なる海軍力を有する國に比して、七割の噸數を保持することを單に希望するのみならず、これを主張するのである。われ等は他國に比し劣勢を以て滿足する。併し深き研究の結果、この比率を主張せねばならぬことを確信せしめらるゝに至つた』

ワシントン府に入らうとする朝、この新聞記事を見た一行の者は——若槻氏に接近する幹部の人すらも、これは新聞の誤報であつて、若槻氏は今頃七割說を出す筈はないと主張した。そしてそう打電した記者もあつた。

一行とサイベリア丸で同行し、特に特別列車に同乘したコロンビア大學敎授ショットウエル博士は、日本の友人としてその新聞を見ながら一行の人に忠告した。『七割をいつてはいけません、

また日本の意志は必らずしもそこにないのだから』

併しかう主張した人々も、ワシントンに到着したその當日、日本大使館における米人新聞記者との會見において、若槻全權が日本の主張が七割にあることを明白に述へたことによつて、新聞の報道が誤報でないことを知つた。

今回の海軍々縮會議において、日本が七割を要求するといふことは謂はゞ日本の有する最後の切り札である。無論それは交渉の結果で、多少の變更をやむなくせしめられるにしても、まだ交渉にも入らない以前から、これを發表することは、いかにも大膽であつたといはねばならぬ。

故に米國聯合通信は『日本全權の聲明は、日本が今回の會議に比率增加を重要な問題とするものとして、從來の內最も强力なるものであると當地の官憲は考へて居る』といひ、またワシントン・ポストは一行入府當日の社說において

『普通の場合に於ては日本の要求（七割の要求と潛航艇における英米同率）は協定成立の望みを暗くするものである。そしてもしジュネーヴにおいて齋藤實全權が二ケ年以前にこれを主張したならば、三國軍縮會議はあの以前に終末を告げてをつたであらう』

と論じ、併し若槻全權の大膽に對して敬意を拂つてゐる。

3　若槻全權の戰術

若槻全權がワシントン府に入らない以前に、まづ日本の態度の內容を天下に發表したことに關する適不適の批評は尙將來に待たねばならぬが、少なくとも左のやうな重大結果を伴ふと思ふ。

第一には日本の態度を固着せしめ、その交渉において拔きさしならぬやうにしたことである。

公開外交は天下の傾向であるが、たゞこれに伴ふ弊害は交渉に當つて妥協の餘地を少なからしめることである。この意味は、もし一國が要求の內容を祕密にし、これを最後の切り札として持つて居れば、交渉が進むに從つて讓步するも、面目と態度を失ふことがないのである。然るに始めから細目的なる發表をしてしまつた以上は、これを讓ることは卽ち日本國民が世界に對して面目を失することである。

この最も近い例は一九二七年のジュネーヴ會議である。英國のブリツヂマン海相も、米國のギブソン全權も、始めから餘りにその態度を明らかにし、政府と國民と新聞の後援を得てしまつたが故に、その手前如何とも妥協の餘地がなくなつたのだ。『國防の最少限度』は、どう論議してもそう幾つもある筈はないであらうからである。

第二に若槻全權が、その細目的比率を發表したことは、軍縮會議に專門家的色彩を濃厚にせしめたのである。

若槻全權はシアトル上陸以來、今回の會議がケロッグ不戰條約を基礎にしたものであることを繰返し聲明した。それはワシントン會議の延長にあらず、從つてそこで決定された比率を受諾する義務を負はないことについて、改めて釘を打つたのであるのは明らかだが、併しもし今回のロンドン會議が不戰條約を基礎にしたものであれば、その出發點は大々的縮少であつて、比率の問題であつてはならぬ筈である。比率問題の固執は、戰爭を假定するところからのみ來る。

故に若槻全權より少し前に來た英首相マクドナルドの如きは、その最大の目的が英米の平等を決定するにあつたに拘はらず、これについては絕對に觸るゝを避けて、あくまで平和と軍備縮少を表看板として押し通した。細目的の諒解の洩れたのは二三ケ月後のことである。

一方不戰條約を基礎するといひながら、まづ始めから比率を持ち出したのは、明らかに矛盾である。そしてその會議の規模目的を自から狹少ならしめた罪は若槻全權自からこれを負はねばならぬ。

然し若槻全權が始めから、この問題を米國において主要なる論議とする意志があつたかどうか

は疑問である。シアトルに上陸した翌日、オリムピック・ホテルに於ける午餐會席上の第一の聲明には

『防衛的最少兵力、これが吾人の基準であります、吾人は何國に對しても脅威を與へんとするものではありません、同時に何國たりともわが國に對し脅威となることを欲せないのであります。故に來るべき會議における日本の標語は「縮少及び無脅威」であります』

といひ、また十二月十六日にワシントンで發表したステートメントにおいても

『日本は縮少を主張する、日本は各參加國海軍々備の縮減を主張する、そして日本自身相對的にその海軍勢力を縮小する準備がある』

と述べて居つて、一切基礎的項目に觸るゝを避けた。

その若槻全權が、なぜ、新聞記者の質問があつたにしても、日本の要求を明らかにして、ある意味で背水的陣をしいたか。

財部海相の「脫線演說」が、政治家であるかれ、妥協的のかれに、影響しなかつたと何人が斷言しうるであろう。

4　缺けたる宣傳機關

若槻全權の一行の任務が、米國において成功であつたかどうかは、かれの目的が何であつたかによつて分れる。もしその任務が、米國の對日輿論を開拓して、これを味方とする點にあつたとするならば、それは必ずしも成功だとはいへない。

日本はロンドン會議に、前總理大臣と現任海軍大臣といふ稀に見る强力なる代表者を送つたに拘はらず、これに對する米國の輿論は、まるでこれを顧みなかつた。米國の新聞は若槻全權一行がシアトルに到着した日においてすら、極めて小さく、その記事を取扱つたにすぎなかつたのである。そして一行を送迎する人々は日本人だけであつて、シアトルにおいてはワシントン州知事すらも公務多忙を名として歡迎會に出席しなかつた。

元來、米國に對する外交の要諦は所謂マン・イン・ザ・ストリートを對手にするにある。輿論國であるこの國では、大衆を――それが如何に迂愚の衆であらうとも――味方にする以外に道はない。親日とか排日とかいつても、それは要するに根據のない感情にすぎないものである。

今回の一行が米國に來るについて、この邊の準備は全然缺けてゐた。否、五十名を超へる（一

行英國に在る人々も含む）の内に、新聞記者係りすらない。この人を强いて求めれば、外務省情報部長の齋藤博氏であろうが、同氏は公式通譯官であり、事務總長であり、一行の中心である。この人に更に多忙なる事務を要求するのは、要求する方が無理である。

然らば大使館でその邊に備へるところがあつたか。大使館の幹部はいづれも優れた紳士であるが、この方面に目をつけるのには、餘りに純粹な役人育ちである。現にわれ等に配布された文書の中には『寫眞屋の需により撮影さるること』といふ文字がある。寫眞屋、新聞屋――それが不用意の間に、かれ等の輿論機關に對する感情を現はしてゐる。

われ等は强國の一つとしてプロパガンダを必要としない。プロパガンダといふ文字すらも快よからざる聯想を伴ふのを常とする。併しながらこれだけの大袈裟な全權一行に、一人の輿論機關との仲介になる專任者を備へる必要がないのであらうか。

たゞ偶然にこの缺陷を滿たしたのは、一行の内に萬綠叢中の紅一點として財部夫人がゐたことである。日本着姿のレディーとして、一行の記事中には夫人のことが必らず特筆大書された。政治、外交中心のワシントン府においては別であるが、シカゴ及び以西の新聞では、主題は一行でなくて財部夫人であつた。

こゝに序だから一行の顔觸れについて書いてをかう。一行を大別して四つに分つことが出來る。若槻、財部、外務、海軍これである。

若槻系は身のまはりには御曹子有格氏（日本銀行員）と、愛婿田原氏（特に外務書記官にまはして同伴）があり、この外お好みの川崎法制局長官、山川瑞夫の二氏があつて顧問となつてゐる。

財部系は當然お國の薩摩の色を濃くしてゐる。貴族院議員の樺山伯は、財部海相には關係ある人であつて、顧問としての適不適は別として、兎に角一枚加へる必要がある。それから山本權兵衛氏の令息が外務省囑託として加はつてゐるが、これは夫人の令弟である。それに牧野伸顯氏の令息がゐるのは、牧野内大臣と薩摩派に對する顧慮であらう。

海軍省は安保大將を以て代表され、左近司軍務局長が中心になつてゐる。外務は、全權の松平氏はロンドンに居るから、事務的なことは齋藤氏が中心である。

も一つ序に隨行新聞記者のことを書くと、今回の軍縮會議によつて、新聞の勢力が全く確定したといつていゝ。日本からの隨行記者は八人であつて（中央公論を代表する私は別として）それは左のやうである——

朝日新聞二人△毎日新聞（東京日々新聞）二人△聯合通信二人△電報通信一人△時事新報一人。

これをワシントン會議當時、日本新聞記者五十名も押しかけたに比して非常な相違のあることを知るであらう。

これは何を物語るか。强力なる新聞は益々强力になり、弱勢の新聞はその經濟が特派員を送るにたへなくなつたことを語るものでなくてはならぬ。殊に朝日、毎日の如きは、いづれもニューヨーク特派員をワシントンに廻して、人力と金力を惜まずして活躍せしめて居る。ロンドンでも無論同じ事實を示すであらう。

かういふ會毎に朝日、毎日等一流新聞は十萬圓内外を使ふのである。

5　理智の若槻、情の財部

私はさきに日本全權一行が、米國における輿論をとらへることについては、明らかに失敗したといつた。これに對して何等の積極的努力を拂はなかつたのが、その唯一の原因である。併しながらこれを他の方面から觀察すれば、卽ちこれを專門家的立場からすれば觀察はまた別になる。

日本全權が海軍補助艦艇勢力の七割と、潛水艦の平等勢力を要求したことの適不適については前段に述べたところであつて、政治家的、大局的ではないが、併しこの論題を提出したが故に

米國朝野の注意は俄然これにむけられ、日本の立場といふものが、比較的によく諒解されるに至つた。

殊に若槻全權は日本においても、質問應答の雄として知らるゝだけに、新聞記者の應對についても、比較的に好感を得たやうであつた。これについてワシントン・ポスト紙の記者は

『若槻全權はその大膽において、その態度において、またその容貌においてすらも、強く英國首相ラムゼー・マクドナルドに似て居る』

といつたのは、若槻氏に對する大なるコンプリメントといふことが出來よう。

若槻氏と財部氏とは二つの相對立した性格である。全權一行が通過するところ在留邦人は、到るところにおいて涙ぐましいほどの歡迎をした。特別列車がキヤスケート及びロッキー山脈を横ぎつた時に、折しもの大雪で、寒氣は零度を下つたに拘はらず、日本人の居るところ、かれ等は、必らず停車場に立ち盡して、一行の健闘を祈り、贈物を贈つた。

汽車が大陸横斷の途ウエナツチーといふ驛に到着するのは午後十一時すぎであつたが、そこの邦人が停車場に出迎へるといふ通知があつた。若槻全權に『お待ちになつて同胞とお逢ひしますかと』いふと

『私はこれから寢るんだ、晝間ならどんな人にでも逢ふが、晩に逢ふのは先方の無理で、そんなことをしては身體が續かない。私は名古屋邊を通過する時にも誰にも逢ひませんでした』

とそのまゝ寢てしまつた。

同じ話しを財部全權にすると『逢ふさ、いつまでも起きてゐる、この寒い雪の中にわれ等を待つてゐる愛國心を考へてくれ』と、他の人が寢てしまつた後を、夫人と展望車の中で待つてゐた。そして感激的に邦人と握手をした。

この小さいエピソードが示すやうに、若槻氏が理智的であれば、財部氏は情的である。薩摩人である財部氏には、見るからに純情が燃えてゐる。シアトルの「脫線演說」も、同地の邦人代表者が、日本の練習艦隊が半歲ぐらゐ前に來航し、日本海軍を賞讃嘆美するのに止まるところを知らなかつたのが、この純情人を刺戟した一つの原因であつた。

この二人の全權の取り合せは決して惡くない。兩全權とも英語は大して出來ないが、併しそうしたことは末節問題である。兩全權の米人に與へた印象は案外良好であつたやうである。

6　親日的な米國の輿論

これを米國側に觀ると、私は米國人の對外的態度が相當な急速度を以て轉換しつゝあることを感ぜざるを得ない。

大統領フーヴァが、上院の有力なる反對を排して、國際司法裁判所に參加すべく、米國の代表者をして署名せしめたのは、全權一行が着米の前日であつた。米國がドイツ問題解決に參加し、國際銀行の一員となることに、今は少しも不思議とするものはない。孤立外交を誇つた米國は、もうその頭を國際外交の深味に突き入れてゐる。

この國際心が出來た米國には、日本側が突然七割の比率を持ち出しても、大して驚かないまでになつて居る。米國の新聞紙は『かつてかゝる要求をすれば、會議は必らず破裂したにちがひない、併し今や時勢は變つてゐる』といつてゐたが、時勢はどう變つてゐるのか。われ等から見れば、米國が國際的に成人したといふ以外に何にもないのだ。

故に有力なるニューヨーク・タイムスのワシントン特派員ウーラハンは『日本には日本の要求がある。もし要求が最後的のもので一分一厘動かすことが出來ないものであるならば、國際會議を催ふして折衝する必要もないのだ』と高をくゝり、また同じクイムスは社說で『ある者は日本が合衆國及び英國の七割を要求したことについて驚きを感じたであらう。併し華府會議において日本の海軍專門家は同じ比率を望んだ、それが西部太平洋におけるグアム及び比島をふくむ英米の海軍根據地を放拋するといふ政治的讓歩をなすことにより六割（五・五・三）の比率に切り下げられた』

といつて、始めから國際會議には「最少要求」といつたやうなものはなくて、日本がある程度まで讓歩をするものと決めてかゝつてゐるのである。

米國が、かうして他國の提案に對して寛大になつたことは、幾つもの國際會議に參加して、所謂國際心ができたからでもあるけれども、もつと大きな原因は、アメリカが自國に對して自信が出來て來たからである。かつては外國の要求だとさへみれば、殊に日本の軍備に對しては、愚劣なるマグダレナ灣の軍港事件を上院の問題にしたのに始めて、極めて神經過敏であり、到底落付いて他の主張に聞くの雅量はなかつたのである。

そのアメリカの地位は近來著るしく變つて來た。世界の大國である英國がその首相マクドナルドを送つて、米國の好意を求めたのはつい先頃である。昔日の威風はなくても、英國はなほ歐洲

の心臓であり、中樞神經である。マクドナルドの渡米は歐洲が、ついにその自尊の足を屈して、米國の前に憐れみを乞ふたともいひうるのである。

先頃、西の使ひを迎へた米國は、今は東洋の强國の代表者を迎へて居る。英國が歐洲の心臓であれば、日本はもつと適切なる意味において、東洋の心臓である。かうして東西洋の盟主を迎へて、米國の國際的地位は益々確立して來た。米國は巨人の如く立つて居る自分を感じ得た。

こゝに誇恃も生れるが、こゝにまた寛量と自重が生れる。それが今回の若槻全權の渡米を機會に最も明らかに現はれたと思ふ。

7　何故親日的になつた

一ケ月後でなければ讀者の前に備へられないこの文の性質に鑑みて、若槻全權が米國大統領及び國務長官と如何なる諒解をえたかといふやうな內容的問題については一切書くことをしない、それは新聞の電報に任すべきものである。

たゞ併しこゝで特記しておきたいことは、米國の朝野が日本に對して驚くべき好意を有して居る事實である。米國新聞の社說は悉くこれを示してゐるが、有名なるマーク・サリバンは、若槻

全權がワシントンを辭する日の夕刊紙にかういつてゐる——。

『事情を知つて居る者は日本は平和促進の目的のために最も眞摯なる合衆國の提携者であると信じて居る。一九二一年の華府會議は日本の外交の轉換期である。始め日本はその固有の文明を近代化するのに西洋を模した、何が西洋各國を偉大にならしめたかを考へて英國とドイツに範をとつて、軍事的强力を主張した。併し一九二一年の會議以來、合衆國の方法と政策が最も價値あるものとしてこれをガイドとすることにした』

日本は信用するに足る、なぜなら日本は米國を眞似してゐるから、といふ論理は如何にも米國人らしいエキスプレッションだが、かれは最後に

『この會議が失敗すれば建艦競爭が始まるであろう。この悲しむべき結果を避けるために、會議における如何なる他國よりも信賴することが出來る。その理由は日本が米國に對する眞との友情からであり、平和に對する米國の政策に同感であるからであり、日本自身が採用した國策からであり、また他國に對する經濟的關係からである』

と書いてゐる。

このサリバンの論調はまた大體の米國言論界の論調であつた。

かくの如く日本に好感を持つて來たのは種々な理由がある。第一には無論日本の態度が、比率の問題は別として、心から單縮の成功を祈願して居ることが反映した結果である。

第二には今回の單縮會議の豫備交渉に當つて、英國と米國と話しあつた關係から、米國は日佛の感情を非常に顧慮した。華府における米國全權側との會見においても、この點を説明したと信ぜられるが、日本に對するこの邊の遠慮が大分あつた。

第三に對日感情のいゝ理由は、米國は移民問題、支那問題について餘りに日本を虐めすぎたといふ感じが胸にあるからだ。そのリアクションが今來たのだ。

8　外交技師の時代去る

最後にいつてをきたいことは、世界は外交を專門的なる外交官の手から奪ひ去る時が來たといふ事實である。

マクドナルドもフーヴアも外交官ではない。併しかれ等の交渉は、會議を開催するまでに漕ぎつけたばかりではなくジュネーヴ會議に參加を拒絶した佛伊も、今回はこれを應諾せざるを得ないだけの外交をなしえたのである。

若槻全權は外交畑とは緣の遠い人である。併しかれは長い間の政治家として、大衆のサイコロジーを心得て居る。これが外交畑に役人として育つた外交技師の眞似の出來ない點である。

華府からニューヨークについたその夜、若槻全權はプラザ・ホテルにおいて早速米人新聞記者を引見した。例によつて大膽に質問應答をしたが、終ると何か簡單なレフレッシュメントの準備が出來たことをいつて來た。『呑むものでもあつたら、どうです、新聞記者の諸君にあげては』若槻氏がいふと、當夜の主人役である澤田總領事その他は『あの連中はあれで澤山ですよ』とこれを一口に排し去つてしまつた。

この事は極めて小さいことにすぎないが――たゞ昨夜の事で頭に印象が明らかだから、こゝに書くにすぎないが、この態度が畢竟外交技術家と政治家の相違である。小役人の眼には上官と勳等と大實業家と外交文書しかない。政治家にして（若槻氏がどれだけ偉いかは別な問題である）始めて一つの形をとつて居らないマスの力がどう動くか、どういふ影響があるかを洞察することが出來るのだ。

近來の外交が、寧ろ外交官にあらざる人の手によつて成功するのは、これが故である。殊に近來は所謂マン・ツー・マン――外交文書を避けて、相互の懇談によつて解決することの傾向ある

において、若槻全權が米國を經由して會議地に赴いたことは當を得たことであつた。そしてその成績も、日本の如何なる專門外交家があげたよりも、これをあげえたことは確實である。

全權一行は十二月十九日午後九時にニューヨークについて、その翌日午後十時オリンピック號に乘り込むのだ。この矢のやうな旅行さきで筆をとつて居る私はいはんとするところ、よく意をつくさない。試みに私の意を要約すれば左のやうになる。

第一　若槻全權は日本の要求する比率問題を米國における論議の中心にしてしまつた。これは會議の目的を局部的、專門家的にならしめ、かつ日本の態度を固着せしめ、將來に禍ひすることなきやの懸念がある。

第二　併しこうして態度を明らかにしたことから來る利益もあつた。日本の主義が明らかになつた事、若槻全權の開放的な態度が賞讃を買つた事等がこれだ。

第三　今回の全權一行の重大な手落ちは、輿論機關に對する一人の擔任者が居らなかつたことだ。幸ひに前述したやうな種々な好條件から大體大過なくしてすぎたが、米國の輿論を開拓するやうな手段は全然とらなかつた。この點で專門家的には成功で、國民的には失敗であつたといへる。

第四　以上はいづれにしても第二義的なることである。問題は若槻といふ文官的、政治家的全權が、どれだけ軍部の決心を制することが出來るかである。若槻全權が新聞記者と會見するやうな場合にも、財部全權は無論だが、他の軍部の高官は大概そこに連なつて耳を立てゝ聞いてゐる。かくしてどれだけ若槻全權が「政治家的解決」に猛進し得、かつ軍事專門家が同意するかが、今後の問題である。

日本は七割の比率をさへとれば、この軍縮會議が成功したといふであらう。軍縮會議に澤山の比率を割あてられることがどうして成功なのか。不戰條約を有して、これを發足點とするといふものが、軍備といふ不生產的なものに、澤山の費用を支出して、觀兵式觀艦式だけをやらしてをくことがどうして成功なのか。

日本人はみんな軍事專門家になつてしまはなくてもいゝ筈である。

昭和四年十二月二十日、ニューヨーク・プラザ・ホルテにて

第二　ロンドン會議の前景氣

1　日米全權の交渉

若槻禮次郎氏を首席とする日本委員の一行が、巨船オリンピック號でサザンプトンに到着した頃、そこにはロンドン會議の多難を思はせる二つの問題が横はつてゐた。

一つは無論日本と米國との比率の問題である。日本の主張は最大海軍國の七割の比率を得んとするにある。若槻全權が米國に入つて、合衆國を代表する何人とも會見する以前に、すでにシカゴにおいてこの日本の切り札を訪問記者を通して發表したことは、前便に報道した通りである。

日本がその具體案を對手に示した以上は日本全權の次ぎにとるべき方針は、この城塞に立て籠つて、どれだけこのデツド・ラインを死守しうるかにある。若槻全權はワシントンで國務長官スチムソンその他と會見してこの防禦に全力を盡した。

若槻全權は日本が何故に七割を要求するかについて說明した。七割といふ比率は米國に對して

　(309)

攻勢に出ることはできないが、またホーム・ウオーターにおいて他國の脅威を受けない海軍力であることも述べた。日本の輿論があげてこれを後援してゐるともいつた。

日本は過去において米國のために、その方針を指導されてゐる感すらもあつた。支那問題についても、滿洲問題についても、山東問題についても、更にワシントン會議においても、日本は殆んど全部米國の政策を容れた。その上に移民問題についても、米國はその政策を日本に强制した。日本國民は今回のロンドン會議においても、また米國にヂクテイトされるのではないかといふ點に懸念をいだいてゐる。他國に對し脅威を與へずして、自國の安全のために海軍力を持つ、これは一國に當然許さるべきことではないか――そういふことを蜿曲に話したと信ずべき理由がある。

これに對してスチムソン氏も同じく米國の輿論を持ち出した、『日本の輿論は諒解するが米國の輿論にも同情していたゞきたい』といつた。最後の會議（ワシントンを出發する日）の終りに、ステートメントとして『兩國全權は軍縮に關する哲學を話した』と發表したのは、かうした政治的根本論をして、詳細な技術的問題は、ロンドンに持ちこしたと諒解していゝと思ふ。

2　七割固守の意志なし

この日米の會談から、われ等は二つの暗示を受ける。一つは日本は實際、七割を死守する覺悟があるかどうかである。

かういへば全權一行は無論として、日本國内の人々まで怒るであらう。なる程、日本が補助艦七割比率を固守してゐる事實は心から眞面目のやうである。軍人の中にはこの比率を得なければ旗をまいて歸るほどの意氣を示してゐるものが少なくない。

併しながらわれ等が考へなければならないことは、日本は今、各國との交渉の門出にあることである。交渉は必然に相互の妥協を意味する。英國の言葉に社會に三つの必要なるCがある。Conflict, Conference, Compromise がこれであつて、相爭つて、會議をして、妥協をするといふのであるが、利益と立場の衝突する時、この會議を解決する唯一の道は妥協の外はない。

日本が實際七割の比率を得んがためには、その提唱は七割二分五厘なり七割五分なりでなくてはならぬ。これは必ずしも古着屋式の外交ではない。他がその主張を緩和する時に、日本も同じ程度の讓歩を必要とすることは、極めて見易い常識的事實である。いかに驅けひきのない會議で

も始めに云ひ出したことを突張つてゐたのでは、始めから會議の決裂を企圖すると同じである。

故に日本が始めから七割を天下に聲明したといふことは――英國新聞はマクドナルド内閣が今に至るまで何等その具體案を發表しないことについて強く抗議を續けてゐる――正直でありすぎて外交技術を知らなかつたか、乃至は實際七割を死守する意志がないことを結論する。

海軍關係では日本の國防に七割が絶對必要であることを主張して、上下兩院、實業家等を招いて、これに詳しく說明したそうである。もしこの主張が眞實であつて――私はこの人々の眞摯なことを信ずる――一歩も退くことの出來ないものであれば、會議は始めから悲觀せざるをえない狀態にある。もし然らずして七割の主張が多少の驅け引きを含むものとすれば、そしてこれを會議において讓つたものとすれば、國民は國防上重大な不安に陷いるのである。

そればかりではない。會議といふものは元來相互の話し合ひにより解決の道を發見するものであるが、七割の比率を得ない結果は、それが偏へに英米兩國の壓迫の結果によるものとして、强くこの兩國を恨み、禍根を將來に殘すことになるであらう。

七割を劈頭にいひ出したことの適不適は、前便にも書いたやうに今後の結果についてみねば分らないが、以上の重大な責任を負はねばならぬことだけは特記するを要する。

今一つの問題はこの七割を與へることについて、豫備交渉においては、米國に大分難色があつたといふことであるある。米國の官邊の一部では『米國がワシントン會議において、比律賓、グアム等の防備を放棄したのは、日本が六割を以て滿足したからである。もし七割を要求するならば、われ等はそれ等について再考慮せねばならぬ』との意見を洩した。

比率の問題は日米の直接交渉に委られるであらうが、これがどう纏るにしても、日米の意見は尙一致せず、會議の一の難關を造ることだけは明らかである。

3　淋しい英人の出迎へ

米國との交渉の新たな記憶をいだいて、日本全權の一行は英國のサザンプトンに到着した。同市の市長は一行を歡迎するために船に來たけれども、その外には英國側の歡迎人は殆んどゐなかつた。たゞロンドンから出迎へた日本大使館の一行が、シルク・ハットを連ねて波止場に立つてゐるのが目立つのみであつた。

一行がロンドンに到着した翌日の新聞も、日本全權の記事は殆んど見當らなかつた。そのステートメントを掲載したのはロンドン・タイムスだけであつて、それも一段の半分以下を全記事に

費やしたにすぎなかつた。デイリー・テレグラツフの如きは、一行到着の記事を、軍縮會議の記事の中に二行挿入したのみであつた。

これと反對に日本における大新聞の活躍はすばらしいものであつた。船がドックにつくと日本內地に送るべき活動寫眞の機械は、せはしく回轉した。全權一行にまつはる如何なる事件も、電線を傳はつて日本に送られた。米國における一行が準國賓を以て待遇されたと傳へられたやうに英國においても朝野の大歡迎を受けたと傳へられるに相違なかつた(!)。

私はこれを書きながら、近頃、日本から來た新聞が、ダグラス・フエアバンクスの記事で一杯なのを想ひ起してゐる。ダグは一體何者なのだ。日本全國があげて狂迎するフエアバンクスなる者は何者なのだ。世界のどこの新聞が、一個の映畫俳優にあの歡迎と、あのスペースを與へるだらう。私は英國と日本の新聞に兩極端を見る。

日本全權がロンドンに到着した頃は、英國は丁度クリスマスの休暇であつた。その頃、首相マクドナルド氏はスコツトランドの出生地ロシマウスに行つた。また外相ヘンダソン氏はブライトンの別莊に行つた。日本全權は久し振りで閑暇を樂しんだ。

その時に一つの新聞記事が、全權の安眠を遮げた。それはデイリー・テレグラツフの外交記者

の書いたもので、日本の全權が英國に到着した最初の記事の中に

『日本全權の重な人々はロンドンにあるが今週中のある日にマクドナルド氏と會談するであらうこの個人的會談の地は首相がいつ官邸に歸るかによつて決定されるであらう。もしかれの歸市が次週に延期されゝば、若槻氏及び重なる僚友はマクドナルド氏からフォレスに訪問すべく招かれるであらう』

と書き始めてある（十二月卅日同紙）。

この記事を見たマクドナルド氏は直ちに左のやうなステートメントをその別莊地において發表した。

『予は一般公衆に警告する、日本代表者が予をロシマウスに訪問するといふ新聞の記事は、その報道の背後に如何　る吹き込みがあるかは知らないが、それはわれ等の協定を助くるものであるよりも、寧ろ前途に障害を置くものである』

この言葉が何を意味するものであるかは、今に到るも私には分らない。それは同紙記者が直ぐ附け加へたやうに『その言葉において、その動機において驚くべき曖昧的である』。かりにマツク氏を田舍に訪問するといふ新聞の記事に謬りがあるにしても、これを『特にパブリツクに驚告する』必要がどこにあるか。

これより先き、英國の首相及び當局者が何故日本全權に早速逢はないかゞ問題になつたことはある。多くは休暇のためであると信じてゐたが、中には『日本全權が餘りに米國において內容を打ちあけすぎたので、英國側ではこれを喜ばず、直ちに逢ふことを避けてゐるのだ』などゝいふものがあつて、そうした新聞電報を日本に打つた者もあつた筈だ。

4　若槻とマクドナルド

いづれにしても日英兩全權の會見が遲れたことは事實である。テレグラツフの記者はそのステートメントに直ちに反擊を加へず、『日本全權がロンドンに到着したのは金曜日である。故にマクドナルド氏が一月十日までロンドンに歸らなければ、この重要な意見の交換が十五日遲れるわけである。ヘンダソン氏も亦居らず、外務省に來るのは來週始めであるから、それでも十日間を失ふのだ』と書いて居る。

私はその後此の記事を書いた記者に逢つた、社說も書く有力な人であるが、その動機について『マクドナルド君は非常に怠惰だ、だから少し刺戟してやつたにすぎないんだ』と笑つてゐた。

日本の會議に對する政策を書いた記事の中のことから、かうした應酬があつたのに神經を病んだのであらう。若槻氏は日本人記者に對して『自分達が早くロンドンに來たのは始め會議が一月十二日頃開かれるかに傳へられたからだ、その前にはいゝ船がなかつたからだ。英國人は休暇について正確だから、休暇を邪魔する氣は少しもない』と辯明した。

英人方面に對する辯解は、もつと念がいつてゐる。ロイテル通信によると

『本通信社に通知されたところでは日本全權は首相と會見しないことについて何等か失望したと傳へられるに驚いた。マクドナルド氏をスコットランド或は他の地に訪問するといふ報道は決して日本人側からインスパイヤーされたものではないことを繰り返した。勿論、日本全權は出來るだけ早く接觸を得たいとは心得てゐる。併し無論かれ等はクリスマス休暇の眞中に來て、大臣達が心地よい休みを得てゐることを知つてゐる。これを亂さないことは又日本の禮儀でもあるのだ』

とある。その廻りくどい云ひ方は日本語に飜譯の出來ないほど丁寧を極めてゐる。

その後、マクドナルド氏と日本全權は、何回も會見して、この小さい事實はバッシング・インシデントとなつてしまつたが、こゝでこれを比較的に詳しく紹介した理由は、このエピソードに

マクドナルド氏と若槻氏の性格と行き方が現はれてゐると思ふからだ。

マクドナルド氏が、かうした新聞記事を捉えて、拳骨でガンと一擊を食はせるやうなやり方は確かにかれが一介の勞働者から、あの位置に這ひ上つた敗けじ魂を示してゐる。舊い歷史家をしていはしめるならば、ビスマルクが常に最初において對手の鼻柱を折つたことに比較するかも知れぬ。

これに對して若槻氏は飽くまで、よく氣のつく良吏である。かれは直ちにそれが日本側から吹込んだものでないことを辯明し、併しながら早く逢ひたいに相違ないことを繰り返してゐる。もしかれが剛膽なる政治家であるならば、それが單に新聞記事であるのと、英國人の一部にすら重要なる日本の代表者を前に置きながら、休暇をとつて田舍にあることの不可をいふものがあるのだから、これを默殺するか、或は却つて逆に利用したかも知れないのであらう。

5　能吏にすぎぬ若槻

若槻全權は聰明であつて、その頭腦も明晰である。日本の政界を見渡して、これ以上の全權を發見しうるかは元より疑問である。

併しながらこの若槻氏の特長はまた同氏の缺點ともいへるであらう。たとへば同氏は總べての交渉すべての會合において、悉く自から先頭に立つてゐる。私は今までのところ、未だ曾て財部全權その他が、一回も公式な場處において口を開いた事實を知らない。かれは全く並び大名の席にある。

この事はマクドナルド氏自身、フーヴァ氏自身（フーヴァ氏は余り內容に立入らない）が軍縮問題の先頭に立つて居ることから見て當然といへるが、若槻氏からいへば自身が能吏なるが故に、他人に委してをくことは危なかしくて見て居れないからだと思ふ。その事自身は何等咎むべきことでなく、寧ろその健闘を謝すべきであるが、たゞ將來これが政治的解決の上に多少の支障を生じなければ幸ひである。

この會議は各國專門家の固執の結果、結局政治的解決を必要とする機會が來るであらうことは明かである。その場合に乘り出すのは專門家ではなくて政治家の任務である。始めから事務的交渉の先頭に立つた若槻氏が、かゝる場合に身動きの出來ぬやうな立場に陷いることはないであらうか。

これは單なる危惧だとするも、今一つ同氏の能吏であることが却つてその缺點でありとする私

　(319)

の理由は、同氏に世界政局の前線に立つて人類を指導するほどの抱負とヴィションありや否やの點である。同氏がアメリカからロンドンに來ての言說交渉は、たゞ七割問題に終始してゐる。明けても暮ても、その目標は七割である。日本の閣議が決定し、この任命を帶びて渡來したのであるから、七割比率が重要な任務であることは疑へないが、もし若槻氏の聲明する如く今回の軍縮會議がケロッグ平和條約を前提とし、人類の福利を目的とするものであるならば七割以外に、もつと日本の理想を世界に明らかにするものがあつてもいゝ筈である。

ロンドンにおいて英國新聞記者は『日本は七割の比率が保てれば一萬噸の巡洋艦が五隻でもいゝか』と聞いた。若槻氏は『そういふ極端な事を考へて居らぬ』といつて、現有勢力維持の意志を言外に現はした。それは危な氣のない答へではある。併しそこに世界平和に對する大きな抱負が見られるか。

一月十日、英國政府はその巡洋艦に對する態度を、始めて海軍大臣アレキサンダー氏によつて發表した。それによると英國は一九二〇年以來ジュネーヴ會議まで、七十二隻の巡洋艦の必要を主張して來たが、世界政局の變化――特にケロッグ平和條約の施行により、五十隻を以て滿足するといふのがその骨子である。日本もケロッグ條約の條文精神を信奉し、それを會議の發足點と

する點については何回も聲明した。然らばこの平和條約を信ずることにより、具體的に變更した政策は何なのか。

若槻氏は大命を受けて千里を使ひして來たについて、相當な決心をいだいてゐると聞いてゐる。以上述べた私の見解は單に序幕前の日本全權の態度を批判したにすぎない。全的結論は無論將來に保留するであらう。

6　佛國の立場

私はこの文の始めにおいて、ロンドン會議開會前において、地平線上に二つの難關が見えるといつた。そしてその一つとして日米の諒解が、今尙目鼻がついて居らないことをあげた。他の一つはフランスの態度である。

フランスが自國の立場について、大膽なる聲明書を發したのは、日本全權がサザンプトンに到着する前日であつた。フランスは自國の安全なくして軍備撤廢無しといふ立場をとり『然り、たゞ外部から與へらるべき信賴するに足る援助の比例においてのみ、國家はその軍備を縮少することが出來る』とて、進んで

『ケロッグ協定は現在の狀態において、國家の安全を保障するに充分なりとするわけにはゆかぬ。それは平和の保存に大なる進歩ではあるけれども、その適用は尙組織化されて居ない。これに比すれば國際聯盟は不完全ながらも、安全について根柢的組織を有し、平和的解決の道もある。不法に攻擊されたる國家に對する救助の道もある』（要領）

との意を述べてゐる。

佛國は單に、輿論の力に賴ることのみを骨子とするケロッグ平和協定の微力をいふのみにあらず、直ちに米國の矛盾を指摘して『米國もかく思へばこそ、最近の海軍プログラムの速かなる遂行を放棄しないのである』といつてゐる。

私はこの佛國のステートメントを讀んで微笑した。私はニューヨークから本誌に書いた通信に軍備縮少會議がケロッグ協定とは、その根柢において相合ない矛盾の對立だといつた。極めて大きな意味で、いづれも平和の確立を目的とするものだといふ程度のものなら知らず、比率を爭ふことは結局、敵國を假想してのことだから、これを呼稱する各國は矛盾から出發してゐると論じた。この論法を佛國のメモランダムの中に發見したのである。

佛國は完膚のないまでに米國に當り散らしてゐる。米國が生みの親であるケロッグ協定を排す

るばかりでなく、國際聯盟の方が軍縮事業の根柢としていゝといふのである。そして今回の軍縮會議は單に豫備的に大綱を決定するものとし、これが最後的施行方法は國際聯盟に移すべしとの意味を提議してゐる。國際聯盟はウイルソン以來、米國にとつては何よりの禁物で、これを持ち出されることすらも、米國上院に尙勢力を有する孤立派の反對を買ふ恐れが充分ある。

佛國は米國に食つてかゝつてゐる計りでなく、英國にも當つてゐる。軍縮協定は海洋の自由——交戰國の權利、中立國の權利及び攻擊國の艦隊に對する他の艦隊の協調に關する問題等を決定せずして完成するものではないと佛國は主張してゐるが、海洋自由問題は英國の觸るゝを欲せざるもの、さきにフーヴア、マクドナルドの會見において、今回の會議の議題としないことに決定したものなのである。

佛國の主張はこれに止まらない。こゝで全部を書くことは許されないから、重なる項目だけを並べてみると

一、英米兩國はその軍備縮少を五大國のみに限り、數學的比率の上に根據してゐるが、これはロンドン會議參加國以外にも適應されねばならぬ。

一、軍縮は艦別にせずして總括的噸數となすべきである、但しこの點は佛國は妥協の準備がある。

一、陸上軍備、空軍、海軍は不可分のものである。

佛國はかう澤山の條項を並べて、最後に地中海の安全協定の必要を述べ、場合によればスペインを參加國としてこの問題を議すべしこと提議してゐるのである。

7　包まれたる爆彈

この佛國の態度は、誰にでも分るやうに、ロンドン會議に對する包まれたる爆彈である、それがどれだけ爆發するかは、會議の經過を見るの外はないが、それは會議そのものゝ前提を否定しその方法をも合せ排斥するものである。かくの如くんば佛國は始めから會議に對する參加を拒絕すべきではなかつた。

私の見るところでは佛國の目がける重點が一つある。それは覺書の最後にある地中海における平和協定の締結がこれである。佛國はロカルノ協約その他によつて、東方の安全は保障されて居るが、地中海方面の安全を保障する何等の成文がない。英國が軍縮會議の提唱國として、まづ最も自から犧牲を拂ふの立場にあるを利用して、英國をしてその保障者たらしめんとするのが

目的であらう。

これに對して英國が如何なる態度に出でるかゞ問題である。マクドナルド氏は議會の答辯において『軍縮會議は海軍勢力を議するのであつて、海軍政策を議するのではない』ことを明言してゐる。併し會議國の一員たる佛國の主張が政治的解決を必要する以上、どうして政策の論議を避けることが出來ようか。政策を論議することになれば、それは佛國外交の第一歩の勝利である。

今のところ英國の輿論は、英國の武力を以て他國の安全保障をつとめる義務を負ふことに反對してゐる。併しながら地中海協定は必ずしも武力的制裁の條項を加へるを要しない。たとへはワシントン會議の結果生れた四ケ國條約は『太平洋における各國の島嶼の權利を尊重し、何等か問題が起れば會議を開き、解決のためにこれに問題を附議する』を決定し、また『ある他の攻勢的な行動によつてこれ等の權利が脅かされる場合には、いかなる方法をとるかについて諒解に到達するため、充分かつ大膽に協議する』ことを規定してある。この程度の協定なれば英國としても異存のあるわけはない筈である。

佛國は地中海の平和協定を望むのは事實であるが、然しながら佛國が會議の初めに當つて思ひ

切つて、かくの如き態度を示した根本的理由は他にある。佛國は必ずしもこの會議の成效を希願して居らないのである。

ニュー・ヨーク・ウオールド紙も論じたやうに、この會議の效力は英米兩國の提携である。この二國の間には幾多の衝突する問題があつて、英米二國が完全に手に握つて、アングロサクソンの優越を世界に强制するといふ觀方に對しては、私は異存を有するが、併し結果から觀て、そして特に佛國から觀る時に、この會議の成效はやがて英米兩國の協調を裏書することになる事實は卽ち否定できない。

故に極端にいへば佛國はこの會議の失敗を以て、佛國外國の成效だと心得てゐるだらうともいひうる。殊に佛國はその割あてらるべき海軍勢力を以て、決して自國に正當なものだとは考へてゐない。軍縮會議の開會される少し前に、佛國政府は左のやうな數字を發表した。

	佛國	伊太利
面積	一一、四九二、〇〇〇	二、七三一、〇〇〇（キロメートル平方）
人口	一〇一、三一二、〇〇〇	四二、七九〇、〇〇〇
沿岸距離	二二、三五〇	七、五〇八（キロ）

保護すべき航通路		三四、〇〇〇	五、〇〇〇
商　船	三、三七九、〇〇〇		三、二八五、〇〇〇(噸)
港灣の船舶移動	一、〇六三、〇〇〇、〇〇〇		五八、〇〇〇、〇〇〇
貿易による商業	一六四、八〇〇、〇〇〇		四四、〇〇〇、〇〇〇(英磅)

右は伊太利が要求しつゝあるところの佛伊兩國の均等の非を反駁したものであるが、更に米國と比較して、その面積において二百萬平方キロ多く、また保護すべき交通路の長さは米國の二倍あることをあげてゐる。

かうした統計の後に、佛國は左のやうな五國の指數を出してゐる。

英　國	一〇
合衆國	四・二
佛　國	三
日　本	一・六
イタリー	一

即ち英國が十割の勢力を必要とする時にイタリーは一、日本は一・六を振りあてらるべきものだ

との意味である。かゝる統計は華府會議の時にも問題となつたと記憶するが、復興途上にある佛國が、現勢を以て比率を決定されることを苦痛とし、ロンドン會議の失敗を希望すらする情の一部にあるは推察するに難くないのである。

8　樂觀されぬ會議の前途

佛國のメモランダムが出て、會議に對する樂觀的の觀方はガラリと變つた。ニューヨーク・ウオールドの如きは、その難關がジュネーブ會議と同樣であるから、この際寧ろ中止するの可をすら說いて居つたほどである。

この態度に加へて、英國の內部における保守的分子の勢力は決して侮どるわけには行かぬ。かれ等は第一に均勢を名として米國に屈するの非をならし、更に傳へられる一萬噸巡洋艦の總數割宛は、均勢にあらはして遙かに米國より劣勢なることを極說し、盛んに輿論に訴へて居る。

マクドナルド氏は勞働黨內において堅固なる地盤を有し、同氏の決定は最後的なる決定として內閣に强ひうる威望あるのは幸ひであるが、併し勞働黨それ自身が議會における比較的多數として、自由にその意思を行ひえない弱味がある。現在の政黨分野は

△勞働黨　二九〇　△保守黨　二六〇　△自由黨　五九　△獨立　六

である。日本全權一行が大西洋上にある頃、勞働黨は自己の鑛山法（コール・マインス・ビル）を議會に提出したが、保守黨と自由黨の挾擊に遭ひ、結局修正承諾をほのめかし、僅かに八票の多數で通過したのである。

このことは勞働黨の立場が弱いといふのではない。軍縮に對する英國朝野の熱望は政黨政府を問はない。特に今回の會議の下交渉はボールドウイン內閣の時に始つたのであるから、軍縮そのものは一致した國策といへる。併し勞働黨は他の政黨――少なくとも自由黨を無視してその自由意思を行ふことが出來ないことだけは明らかである。これは特に佛國が協定を欲せず、會議の外に立つ場合に然りである。佛國がその潛航艇と、巡洋艦と、驅逐艦の制限を拒絕する時に當つて英國は日米兩國と三國海軍協定をなし、かりに條件づきであつても、自から束縛することを欲するであらうか。

この現狀に對してイタリーが如何に出るかによつて會議は益々困難を加へる。イタリーはそのロンドン會議參加を承諾する文書において如何なる大陸國（佛國を意味する）よりも劣勢の勢力を以て甘んずるものにあらざることを斷言してゐる。卽ち伊太利の目標とするところは佛國と同

等の勢力をえんとするにある。もし佛國が軍縮協定に加はることをしない以上は、伊太利も亦その地勢上、對抗上、この會議に加はつて協定をなすことは困難である。

問題がかくの如くなる場合に、英國が如何に焦慮するもどうして豫期の結果を收めることが出來よう。況んや英帝國は政治的には自治領の完全なる獨立を認めらるゝに拘はらず、國防の上には一單位としか認められず、英國本島、オーストラリヤ、ニュージーランド、カナダ、南阿、インドその他を守備するに、米國の如き經濟的一單位――パナマ運河を除き一つの重要な海外領土なき國と均勢を以て滿足することにつき、保守黨側より猛烈な批難があるにおいてをや。

軍縮會議は決して順風に帆をあげて內海を航する如きものではないのである。

9　一部は必らず讓らん

日本の全權がロンドンに到着した頃、比較的冷靜であつた英國の輿論は、今や漸く熾烈になつて、いづれの新聞もこれに多大のスペースをとつて居る。

日英兩國當局――詳しくいへばマクドナルド、若槻兩氏の會見は旣に三回繰り返されて、七割比率問題について、マクドナルド氏の卒直な質問があつた。米國全權の一行もジョージ・ワシ

ントン號で今明中に到着する筈である。始め米國全權は日本全權一行の乘つたオリンピツク號で渡來する筈であつたが、米國船で渡英を强ひ、もし同一行が英國船に乘る如きことあらば、これが乘船費用を支出しないと議決したので、急にその船を變更したのである。この小さいエピソードは、米國上院が如何に外交問題について指導的立場にあり、この意志を無視して、ロンドンの協定も到底その批准を得られないことを物語るものでなくてはならぬ。

ロンドン會議は成効するであらうか。この文の現はれる頃は會議の眞最中であり、今においてこれを豫言するのは危險であるが、たゞ安心していへるであらうことは、ジュネーヴ會議の如く無効果に終ることなく、全部の解決は得なくてもそのうちのあるものは必ず纏まるであらうことである。華府會議において主力艦及び航空母艦問題だけが解決したように。

問題はこの會議において如何なる政治的識見が現はれるかである。元來、この會議の主要役者に政治家を連ねたのは、專門家の見解が一部に偏するが故であることは、マクドナルド氏が再々言明した通りである。然るにその政治的解決を要する會議において、『單に海軍縮少が目的でその他にはない』と同じマク氏がいふに至つては、そこに矛盾あるを免がれない。廣汎なる政治と外交は、好むと好まざるとに拘はらず、この會議に當面する。

かうなれば日本全權の活躍する範圍　擴大されるであらう。日本が今のところ有する問題は對米比率の問題だけである。日本は東洋において顧みるべき一の海軍國もない。故に會議がデツドロツクに陷いる場合に、最も自由な立場から調停しうるのは日本のみである。日本は座しながら世界の槍舞臺に出て、その平和に貢献することが出來る。そしてこのことは狀勢の轉換と、若槻氏の識見が如何なるものであるかによつて決定するのである。

日本からの電報は日本は七割比率について擧國一致の後援をして來てゐることを傳へてゐる。對外交問題について、日本が嘗て擧國一致で後援しなかつた例があるであらうか。外國に對する限り日本の政府はかつて間違つて居らぬ。そして日本全權の要求が强ければ强いほど、擧國一致は熱を帶ひて來る。今回の擧國一致もこの歷史的現象だと信ずる。

日本の惱みは今、どこにあるのだ。それは對外的から來て居るのか、對內的から來て居るのか。失業難と經濟難と階級鬪爭的意識は七割比率で解決出來るか。日本は現在の國情を以てして世界の一等國と交戰する意志があるか、また水平線上に國を賭して戰はねばならぬやうな何等かの問題があるか。更に近來の國際的傾向は將來――少なくとも一等國にとり戰ふに難く戰はざるに易き方向に行つて居るのではないのか。達見ある政治家は十年二十年の將來を豫見して政策を定め

ねばならぬ。

いづれは國策の根本問題に觸れる。私は今、限られたるスペースにおいてこれに結論を下して誤解を招くの愚を敢てせぬであらう。國民があげて七割を欲し他を顧みぬ以上は、日本全權の關す、限り、七割の防禦線に立てこもり、國民に『安心』を與へることは、また實際政治家の任務であらうか。あゝ。（一月十三日ロンドンにおいて）

第三　ロンドン會議の開會式

1　霧深きその朝

『陛下がお出でになりました』

どこからか、さういふ聲が起ると、滿場の出席者は一齊に起立した。一月廿一日ロンドン軍縮會議が開會された日である。

この日、ロンドンは深い霧で一尺前は、白い幕を張つたやうに何にも見えなかつた。

『オイ、自動車を呼んでくれ』

朝、十時十五分までに集會するやう、それ以後に來たものはお斷りするから。さういふ通知があつたので、私は午前九時半にはホテルを出て自動車を呼んだのだつた。

『先程も三十分ばかり待つて漸く自動車がありました。この霧ではどこに何が通つて居るか分りませんから、一時間も待たなければならぬかも知れません』

『一時間？　冗談ぢやない』

ホテルの番人にさういはれて、私は乘合自動車に飛びのつたが、その速力は按摩の夜歩きよりも遲い。なにしろ霧を吹きわけながら進む有樣なのだから。

氣が氣でないといふが、このくらゐ氣が氣でないことはない。もう十時は餘程過ぎてゐるが、まだ半分も行かない。

軍縮會議の開かれる英國議事堂についたのは午前十時半であつた。

『どうぞお通り下さい』

巡査が垣のやうに並んでゐる間を通されて私は會場に這入つた。當日の會場は貴族院の中にある、『皇帝の間』で、そこは新らしく敷物がしかれ、金色の椅子や裝飾で眩ゆいばかりであつた。

會場には、もう財部全權が來て、種々世話をやかれてゐた。正面には金色の玉座がある、今日のために特にバツキンガム宮殿から運び入れられたものである。

その玉座を眞中にして、テーブルが馬蹄型に並べられ、そこには擴聲器が幾つも置かれてゐた。今日の陛下の御演說は無論として、全權の演說が地球上、殆んど殘るくまなく放送されるの

だ科學の力が、いかに自然の難關を打破しつゝあるかを見よ。

2　英帝の開會のお言葉

英國皇帝陛下が御出でになつたのは午前十一時を六分すぎてゐた。この深い霧が、陛下の御通行をも遮ぎつたのである。

陛下は首相マクドナルド氏の御先導で『皇帝御衣更への間』の入口から御出でになつた。モーニング・コートをお着けになつて、いかにも悠然と少しも御停滯の樣がない。

『帝王學といふものはかういふものだな』

さう誰かゞ後でいつたほど、その御動作が自然で、威風に滿ちてゐながら、しかもわざとらしいところがなかつた。

陛下は左右の全權達に輕く會釋を賜ひ、玉座の前にツカ〳〵と進まれて、直ちに侍從長がお渡し申しあげた原稿によつて、御演說を進めた、全員起立の間に……

『こゝに代表されて居る各國は、いづれもその海軍と、海軍の過去における功績と、そしてその感激すべき傳統について誇りを持つて居る。もし各國が、その政策から海軍建造の競爭をなし

それが相互の不安、ひいては戰爭の危險すらも感じ出したとしても、それはこの傳統や海軍のためではない』

陛下の御聲は量と幅を有して流れるやうである。このお聲を聞いた時に、五六百人に餘る會衆からはホツと安堵の息が出た。こゝに健全なる御姿を現はされてゐる陛下こそは、先頃まで生死のほどさへ氣遣はれた御重態ではなかつたか。

陛下は、たまに原稿にお目を移されるだけで、殆んど普通の御演說と同じである。發音に抑揚があつて、莊重である。

『世界大戰以來、すべての國民は、人類の政策が、再びあの暗澹たる、そして甚大なる悲劇を繰り返さないためには、いかなる努力をも惜まざらんことを決心してゐる……予はこの會議の結果が、世界人類の上に、重い負擔を負はしてゐる軍備の重荷を直ちに輕減するに到らんことを切に信賴する』

陛下は朕（We）といはれる代りに、予（I）といひ給うた。それは　陛下の呼びかける人は英國人であるよりは、世界の人類に對するものであるからである。

五分で陛下の御演說が終ると、陛下は玉座にお腰をお下しになり、全員もこれに續いた。御演

說の佛語譯が續く。

3　歷史的な會場の光景

われ等は腰を下すと、改めて場內を見渡した。この歷史的な會合の開會式には何といふ似合つた會場だ。

玉座の直ぐ後には五六間の長さの油繪がある。それはトラフアルガーの海戰の英雄ネルソンがその部下にかこまれて、最後の息を引きとるところである。大砲の煙りと、海戰の激烈さが、名筆によつて畫かれて、凄慘なまでに戰爭の慘虐を現はしてゐる。

ネルソンが倒れて、半ば頭を擡げたところが、丁度　陛下の眞直ぐの後である。

陛下の眞直ぐ前は……？

そこには同じ大きさの油畫が壁をなして居つて、それはウオターローの大戰に、英國の名將ウエリントンがブリカーと面に相對して居る畫面である。今、經て來た激戰に、屍體が戰場にころがつて、その屍體を超えて、兩將軍は口を開かうとしてゐる。

入口には、この室を守るやうに、中世紀の武裝をした大理石の像が立つて居る。

この廣間で、ジョージ五世陛下は――御自身海軍々人たる御經驗のある陛下は、世界が戰爭の慘禍と、軍備の重荷に目ざめて、海軍縮少をお說きになつて居るのだ。

玉座及び全權席は一段高くなつて居るが、その下には右の方に各國大使や閣員と、それから英米佛等の顧問隨員の席があり左の方には日本、イタリー等の同じ資格の人々の席がある。日本側の席には安保大將、左近司中將や、川崎法制局長官、山川、樺山貴族院議員等が、いづれもモーニング・コートを着て控へて居るのが見られる。

全權席の前は全部新聞記者席である。世界から集まつて來た新聞記者は四百名に近からうが、それを全部入場させることは困難であるから、一つの通信、一つの新聞で二人以上を入れることを許さないことにした。大阪朝日と東京朝日で二人、大阪毎日と東京日日で二人、それが入場を許される最大限であつた。

これ等を收容した椅子が、全部金色のものである。壁や天井の金色と相待つて、この會議を由緒あろ歷史の中に溶け入らしむる感がした。

4　髯の日本と無髯の米國

陛下の御演說が佛語に譯し終ると、陛下は右側の後に控へてゐたマクドナルド氏に、お合圖あつてお立ちになつた。

全員は同じく起立した。寫眞をとるために暫らく時間をお貸しになつて、マクドナルド氏の先導で、周圍に會釋をされながら、靜々と御退場になつた。

今まで水を打つたやうに靜肅であつた會場は、遽かに咳の音が爆發した。

その內に玉座はとり去られ、その跡にテーブルをおいて、それがマクドナルド氏の議長席になつた。

『諸君、かうした會議の席では、その議長には主催國の全權から選ぶことになつてゐます。もし諸君に御反對がないならばラムゼー・マクドナルド氏を議長に推薦したい』

かういつて提議したのは米國の首席全權スチムソン氏である。たけの高い、聲のいゝ紳士である。

これに續いてセコンドしたのは佛國の全權タルデュ(首相)である。四角い顏に鼻目鏡をかけた、會議では最も若く見える好男子だ。

『たゞ今スチムソン氏から御提議がありました議長について、佛國代表は心からこれに贊成する

ものであります』

元來ならこゝでパタ〳〵手がなつて、拍手大喝采といふところだが、今日はヒヤ〳〵の聲すらない。

日本の全權はどうしてゐるかと日本全權席を見ると議長の左側に永井、松平、財部、若槻の順序で並んでゐる。それが丁度米國との相向ひで、これから開かれる日米交渉の太刀打ちを豫期するやうだ。

『なぜ、私が一番端に据つたかつて？』

若槻全權はその後で私に語つた。

『それは米國なども左の方からの順で据るといつたから、こちもさうしたのだ。併し議長席が眞中にあるのだから、あれは少し可笑しいネ』

その次ぎの會から若槻全權は一番、議長席に近い方に据ることになつた。

日本側の全權は永井大使が髯がないだけで、後はみんな八字髯を貯へて居る。これ反して米國側は首席のスチムソン氏、（國務長官）が髯があるだけで、他は全部無髯だ。米國人は餘り髯を好まない。

あの有名な飛行家リンドバーク氏の岳父に當るモーロー氏が米國全權の最右端に見える。その後の方には全權達の夫人が許されて、夫の晴れの舞臺を息もつかずに見守つてゐた。

突然、全員の注意が全權席の中央に集まつた。英國全權マクドナルドが一場の挨拶をするために立たつたのだ。

5　英首相の演說

ラムゼー・マクドナルド……

これが世界の注目を一人で背負つて居るほどの大立物なのか。頭の毛は、もう黑いものが殆んど見えないほど白くなつてゐる。あの漫畫でよくみる鼻下の髯は、先端を刈られて以前の垂れ下つた特長はない。ゴルフと屋外の運動の故か、それとも生れつきか、英人にしては色が薄黑いのが目立つ。

『私は押されて本會議の議長になりましたことを名譽とし、かつ感謝するものであります。私がたゞ申上げることは、私は公平を以て事に當り、諸君の仕事を遂行するために私の最善を盡すといふことである』

マクドナルド氏の聲は錆のかゝつた特長のある聲である。スコツトランド人流の發音が、齒切れよく耳にひゞく。

かれの演說は終りに從つて熱を帶びて行つた。始めに講演の口調で出發したかれは、その理想を述ぶる邊りになると、もう堂々たる大演說と化した。

『英國の道は海にある、それは小さい島であるからであります。その國民の先祖は海を突破して來て居る、その國防とその公道は常に海にあつた、そしてその國旗は卽ち海の國旗なのである。われ等にとつて海軍は單なる裝飾品ではない。それはわれ等自身であります。故にもしこの國が平和に貢獻することが出來るならば——言葉の上だけでなくて、事實を以て平和のために貢獻することが出來るならば、それは海軍國としてゞなくてはなりません』

なんといふ愛國的な言葉だ。

私は英首相の演說を聞きながら、この人が嘗て『國賊』『非國民』を以て呼ばれて、身をおくところのないまでに迫害されたことを想出した。

英國がドイツを對手として火のやうな敵愾心と愛國心に燃えてゐた時である。かれは絕對に戰爭に反對した。大きな流れを兩手をあげて食ひ止めるやうに、かれは一身を以てこの惡流に抗した。

『諸君は間違つてゐると思ふ、歷史も亦、諸君が間違つて居つたと書くと思ふ』

かれはさういつて議會で一人で聲をあげた。それは今から約十六ケ年以前、今、この軍縮會議の開會式をあげてゐる議堂の同じ屋根の下の下院である。

『國賊を倒せ』

かれは四方から猛火を浴せられるやうな迫害にあつた。世間も、新聞も、かれの僚友も、全然かれを對手にしなかつた。かれは主義のために、墓守のやうな日を送つた。議員としては二回も落選して、もうかれに朝日はささないであらうことを、何人も豫想した。

十五年の歲月は遽たゞしく回轉した。

今、その國賊であつたかれは、大英帝國の名において、軍縮會議を催ほして、熱辯を振つてゐる。

かれの面前で、かれを國賊と罵しりうるものが、今、どこかにあるのか。

否、かれが有する愛國の熱意について、些少の疑問でも挿はさみうるものが、世のどこかにあるのか。

そして變つたのはかれではない。かれは今、昔のごとく同じ主義の上に立つてゐる。變つたのは社會自身である。四千萬の國民が悉く謬つて、一人のかれが正しかつたのだ。あゝ、眞理は常に大衆と共にあるのか……？

6　米國の首席全權

つぎに立つたのが米國を代表するスチムソン氏である。

『たゞ今、聞きましたる二つの御演說の中に現はされたる崇高なる理想は、この會合に參列したる者の同情を惜まないところであることを信じ、かつわれ等の努力が成功を齎らすであらうことを信ずる所以であります』

かう述べたスチムソン氏の英語は、明らかに『米語』――アメリカ語であつた。英人と米人との英語を聞くと、大阪人と東京人との差より、も少し甚だしい相違がある。

かれの演說も所謂演說流の大雄辯といふのではないが、極めて明確に、幅の太い聲で筋を運んで行つた。それには底力があつた。かれは議員にこそならないが、大統領タフト時代の陸軍長官として、大統領クーリッヂによつて送られた比律賓總督として、更に舊友ルートその他の推挽に

よつて選ばれは國務長官として、新鋭の强國米國を負ふには充分なる資格を具有してゐる政治家である。

『私達は問題が解決するまでこゝに止まる用意がある。機會がつかめるまで、再びわれ等が會見して、事態を全然新らしい立場から見うるやうな協定を世界に與へうるまで、われ等はこゝに留まる準備がある』

かういつてかれは聲をあげた。

『わが國民はわれ等に成功することを命じてゐる。かれ等はこの會の失敗が、どれだけかれ等の最高の希望に大打擊を與へるかを知つて居る。そしてかれ等はわれ等が飽くまで成功すべきことを決心してゐるのである』

その言葉にも、その態度にも、『われ等は國民の公僕なり』といふ責任感が常に現はれてゐた。そしてそれが米國政治家の特長である。『わが國民はわれ等に成功することを命じてゐる』。何といふ力强い表現だ。

米國全權席からは首席全權の演說に同感するやうに輕く肯づいてゐるのが見られた。米國の共和、民主兩黨の代表者と見てもいゝリード、ロビンソン、海軍長官アダムス、軍縮會議は從

來一人でやつて來たギブソン大使、それから銀行家出身で人間と人間との交渉なら誰よりも手にいつて居るモーロー。いづれも一騎當千の面構へである。

7　猫背のブリアン

演說がＡＢＣ順だから、この米國の後にオーストラリアの代表者がやり、それからカナダの代表者がやつた。カナダ代表者の英語が、米語に近いところがアメリカとカナダとの關係を語つてゐるやうな氣がした。

この次ぎが佛國である。今まで英語ばかりでやつて、それが佛語に反譯されるのに馴れてゐた會場は、佛國首相タルヂュ氏の佛語演說で、少し戸惑ひした。

會衆の目は期せずしてこの佛國代表者に集中された。まだ若いタルヂュ氏は佛國といふ大國を雙肩に負ふて、その困難な立場を泳ぎ切らうとするのだ。新聞記者として敏腕であつたかれは、政治家としても、もう押しも押されもせぬ大立物である。

わたし達はこの軍縮會議が……その後若槻全權も外國記者協會招待の席上で述べたやうに……不思議に新聞記者と緣のあることを考へてゐる。ワシントン會議は新聞記者であるハーディング

氏によつて開催され、これに『欣然』參加した原敬氏も新聞に關係があつた。ロンドンの會議は宰相の職を退けば今尙筆で生活してゐるマクドナルド氏によつて司會されるものである。そしてこのタルヂュ氏も……。

併しそれよりも會衆の注意を惹いたのはタルヂュ氏の傍に居つて、少しうつむき勝ちな猫背の所有者ブリアン氏である。總理大臣業の世界的記錄の保持者であるかれは、かれの眼から見ればまだ子供であらうところのタルヂュ氏の下に居つて、外相として國家のために盡して居る。

『ブリアン氏が來た』

さういふと、どんな會合でも、狂氣のやうな拍手の聲が起る。今年六十九歲になるこの老政治家の活動に對しては、國境の別なく深い敬意を拂つてゐるのだ。

イタリーの代表者グランヂ氏が、また軍縮會議の偉觀である。今年三十四歲だといふかれはイタリーの外相として先頭にたつて居る。一ケ年以前から英語を習ひ始めたといふかれは、イタリー語らしい發音はあるが、それでも全部英語でやつてぬけてゐる。

イタリー代表者の演說が終ると、會場――殊に新聞記者席は齒のぬけたやうに少數になつた。それは丁度夕刊の締切り間際であつて、終りまで待てなかつたにもよるが、併し重に歐洲の新聞

記者であるかれ等は、イタリーまでの態度に興味を感じてゐたのだ。

『イタリーは會場で爆彈を投げるかも知れぬぞ』

爆彈といふのは、何か驚くべき聲明をするかも分らぬといふ意味であるが、さういふ說が前の日まで傳はつてゐた。それがイタリー代表の演說に甚大な好奇心を持つてゐた一つの理由でもあつた。併しイタリーの聲明にはさうしたものはなかつた。

8　晴れの舞臺の日本語

その後で立つたのが若槻全權である。

若槻氏は無論日本語でやつた。議會でやりつけてゐるので、その聲量も極めて豐富で、悠然としてせまらなかつた。

『日本語はどうも演說にはむかんネ』

歸りに私と一緒になつたある有名人がさういつたが、そして英字新聞が『單調的な調子で』と批評しはしたが、それは日本語そのものゝ缺陷で若槻氏の罪ではない。われ等は何回も聞いた若槻氏の演說の內で、晴れの舞臺であるだけ、矢張り最も出來榮えのいゝものとして聞いた。

それにしても、この英國における由緒ある場所で、日本語の演說をしたといふことが、どれだけ日本の地位を語つてゐることであらうか。それは將來絕後ではないであらうが、併し確かに空前ではある。

豐臣秀吉は『われ何ぞ外國語を習ふ必要あらんや、かれ等をして日本語を學ばしめんのみ』といつたとのことだが、實力のあるところ、日本語は英國の、ロンドンの、そして貴族院の『皇帝の間』で語られて、ラヂオを傳はつて世界に放送されたのだ。或る意味において日本語の世界征服でなくて何であらうぞ。

その若槻氏の日本語演說は、巧妙な外務省情報部長齋藤博氏の英譯によつて繰り返され、それがまた佛譯された。

かうして世界の歷史に長く殘るであらうロンドン海軍會議は開會されたのだ。その會議の將來は當日のロンドンの霧が象徵したやうに、一尺先きも見えぬけども、大國が何れも誠意を以てこの難問題を解決しようとして一堂に會合したところに時代の動きが見える。

第二回の本會議からは、會場はセント・ジエームス宮殿で開かれた。そこは『皇帝の間』（ローヤル・ギヤラリー）に比して劣るところのない歷史的の場所である。世界は今、またゝきもせず

にその行方を眺めてゐる。

人類の誠意よ、歴史の教訓よ。われ等をしてこの大會議の成功を祈らしめよ。

（一月二十五日ロンドンにて）

第四　軍縮時代劇の展開

1　慌てた米國全權

ロンドンの海軍會議は、正確な意味において、二月六日アメリカが聲明書を發表した時から始まつたといつていゝ。

會議は一月廿一日、英國皇帝陛下臨御の下に、華々しく開會されたが、その後約二週間といふもの、艦別主義（英國案）か、總噸數主義（詳しくいへば佛國の妥協案）かといふやうな理論遊戯に耽つて、結果からいつて大した相違なき制限の方法について甲論乙駁、いつ果つべしとも見えなかつた。

この間、米國では絶對にその意見を留保して石のやうな沈默を守つてゐた。第一委員會に議長のマクドナルド氏が缺席し、ＡＢＣ順により米國のギブソン全權が議長席を占めねばならぬ時ですらも、米國側はこれを辭退して、英國海相アレキサンダー氏にこれを讓つたほどである。

その沈默を守つて來た米國は、二月六日夜に至つて急にその態度を明らかにし、主に英國に對する具體案を發表して、會議に小爆彈を投じたのである。その案の內容は、『ワシントン會議によつて一九四二年までに均等になるべき兩國の主力艦を卅一年までに均等とすべし』といふ一ケ條を除けば、多くは昨秋、フーヴアとマクドナルドとの間に成立した協定を、改めて公表したといふだけで、必らずしも新規な提案はなかつたけれども、人心が既に單なる手續き上の純理論に倦んでゐた時であり、米國は直ちに舞臺唯一の役者になり了せた。

この役者の登場振りは、併しながら決して花道から堂々と四股を踏んで出て來たものではなかつた。その夕方になつて、新聞記者に對し今夜七時に發表すべき事項あることを告げ、倉皇としてその內容を發表したのである。日本側に對しても（英國側についても同じだ）、が發表以前二時間ぐらの前にステートメントを持つて來て、諒解を求めたといふ有樣であつた。

なぜ米國はかう慌てたか。

第一は本國において、祕密外交と、會議の進行に對する批難あり、更に上院及び大海軍論者の一部からは、英國の指導に甘んずることに對し、漸く攻擊の聲をあげて來たからである。

第二は軍縮に不滿を持つシカゴ●トリブューンの記者が、米國全權の一人より米國案の內容を知

りえたことが分つたので、公平を期するため急遽發表することに決意した。

第三は直裁を好ぶ大統領フーヴア氏が、理論的遊戯に飽いて、ワシントンから命令したと信ぜらるべき理由がある。他の場合にも書いた通り今回の會議は、謂はゞ巨人會議であつて、英國はマクドナルド、米國はフーヴア、佛國はタルジュ、イタリーはムツソリニがこの問題について、殆んど獨裁的なまでに廣範な裁斷の權限を有してゐる。米國の全權がフーヴアの鶴の一聲なくして、この態度に出たであらうとは元より信ぜられない。

米國が聲明書を發表すると、その翌日、英國は直ちにこれに續いた。それは谺が聲に應ずるほどの早さであつた。二人の役者が相擁して舞臺一杯に踊つて居るのがこの時の光景である。殘された他國——殊に佛國がこれに不快を感じたのは無論であつて、佛首相タルヂュがマクドナルドにねぢ込んだのはこの頃のことである。

2　日本と米國の交渉

これ等の經緯を畫く前に、われ等はまづわれ等に最も關係の深い日米の交渉を一瞥してをく必要があると思ふ。

誰も知るやうに、そして私が前便でも繰り返し述べたやうに、日本は始めから對米七割の比率を固執して來た。ワシントンにおける米國當局者との會談においても、ロンドンにおけるマクドナルドとの會見においても、日本全權の主張說明は、この七割說以外に一歩も出でなかつた。

そればかりではない。ロンドン會議の開會式、首席全權の米國に對するラヂオ放送、その他、日本が世界に對する理想、人類に對する大抱負を述ぶべき機會を與へられたる公開の席上においても、その說くところは常に七割說の根據のみであつて、われ等はかつてそれ以外の言葉が、わが全權の口から出でた例を知らない。卽ち日本は全身の重みを七割主張にかけて、他は一切これを顧みなかつたのである。

故に日本は、いよ〳〵米國が切り出す場合には、相當に好意ある考慮をなすべきことを期待してゐた。殊に首席全權スチムソン氏は、暫らく比律賓總督として東洋にあり、日本の事情にも通じて居ると同時に、稀に見る誠實の士であることを、出淵大使も若槻全權も洩して居る。かれは折角、近接して來た日米の親交が、今回の會議によつて却つて隔離する如きことのなかるべきを心から懸念してゐる旨の情報も日本側にあつた。

然るに二月四日、若槻全權が米國全權の宿舍であるリツツ・ホテルでスチムソンと會見し、米

國側から渡された案の內容を見ると、その立場は少しも緩和されて居らないことを發見した。いづれは今後の交涉に待つべきも、日本側の失望は知るべきである。

この『極祕』の判を押した米國案の內容は、越えて七日の東京の一新聞の夕刊によつて發表された。それがその特電の初頭に記されたといふやうに『米國側から知りえた』報道であるか、それともニユズのソアースは他にあるか、それはこゝで詮索する限りではない。少なくともこの記事が日本新聞で發表され、ロンドンは東京からの轉電によつて知りえたことだけを書いてをく必要があらう。

この報道を得た日本の輿論は憤激した。それは日本の「强い」輿論の傾向を知るものには當然の結論である。もしかりに何人かゞ、あの際、日本內地の輿論を沸騰せしめることが交涉に便利であると信ずるものがあつたとすれば、それはその人の豫期に添ふものであつたであらう。

米國側と雖も、七割を要求する日本に、六割と切り出したことが、どれだけ日本を失望させるであらうかを知つてゐる。故に日本に同情を有する某幹部は、米國側內部の事情が、身振りとしてだけでも、その外に道がなかつたことを、日本側の某氏に說明した事實もある。

日本が支那に廿一ケ條を突きつけた時に、各國に對して第五條を提示しなかつたことを最も強く批難したのは米國である。その同じ米國は今、軍縮會議のステートメントにおいて、最も不人氣なるべき新造艦案を記入することを避けてゐるのは、不思議なる廻りあはせではないか。

併しながらこれは米國が世間體を誤魔化さんといふよりも、寧ろ部内の大海軍論者の聲を默殺することが出來なかつたといふ方が正當ではあるまいか。そこに最後の戰陣をしいたといふよりも、海軍專門家の說を持ち出して、兎に角一應交涉してみたといふ方が當つて居ると思ふ。

日本に對する提案について、どれだけ海軍側の『專門的意見』が根本をなして居るかは、まだ一週間を經ない現在、これをいふことを憚かるが例へば主力艦廢棄に米國側が反對して居るのはヒリツピン防備問題が最も大きな理由であるに鑑みても(フランク・サイモンド氏がタイムスに寄書して公然そういつてゐる)、第一回の米國の對日提案なるものが、政治案でなくて、軍人案であることは想像がつくと思ふ。

4　七割比率を排す

私はこゝで簡單に私の立場を明らかにしてをきたいと思ふ。私の考へによれば、日本は今回の

　(359)

會議で明敏を缺いてゐる點が二つあつたと思ふ、一つは根本的なもので、他は技術的なものである。

第一は日本が米國を想定敵國とし、國案を樹立することの可否である。この事は前便にも少しく觸れたけれども、この點について明確な概念を把握しておかなければ、明らかなる結論は生じない。

もし日本が米國を想定敵國とし、國策をこゝから編み出すのであれば——現在然るやうに——海軍側が主張する理論は全部正しいといへる。この想定敵國に對しては、故國のホーム・ウオーターを守備するために七割の海軍力は是非共必要であらうし、これなくして日本の國防は甚だしい危險に暴露されることも事實であらう。米國を想定敵國にするといふ前提のもとに生れる唯一の結論は、七割比率である。そしてこれが日本國民殆んど全部がいだいてゐる理論なのである。

併しながらわれ等の疑問はこの前提そのものにある。問題は日本は米國を想定敵國にしなければならないかどうかである。即ち日本は常に米國と戰爭するつもりで備へて居らなければならないかどうかである。この前提に異論をいだくものあらば、その結論である七割海軍力說は直ちに壞れ落つべきは明らかである。

3　米國全權の輩引

米國の全權は、國務長官スチムソン氏を首席として七人といふ多數である。國務長官、海軍長官、駐英大使、軍縮大使ともいふべきギブソン氏は當然として、この外に上院において共和、民主兩黨を代表する（必ずしも實際的には代表しないが）リード、ロビンソン二氏があり、更に實業家出身で人間と人間との交渉に得意のモロー氏が居る。

この人選の献立を見たゞけで、その混雜した事情を知ることができるが、更に注意すべきはその顧問の中に二人の有力な將官がゐることである。ブラットとジョーンズがこれであつて、ブラットは謂はゞ政治家的、妥協的であり、ジョーンズは飽くまで頑固な專門家的軍人である。ある人がワシントン會議が成功したのはブラットが專門委員の主要席を占めたからであり、ゼネバ會議が失敗したのは、ジョーンズが全權の一人として居つたからだといつたのは、必らずしも誇言ではない。

大統領フーヴァは第一に今回は軍人の聲を押えるために、全權の中に一人の軍人をも加へないことにした。海軍長官は所管大臣として無論海軍の聲を代表するであらうけれども、かれも結局

文官である。第二にフーヴァは頑固流のジョーンズに代ふるに、常識派のブラットを以てこれにあてんとした。併しこれに對して上院に割據する大海軍派が猛烈に反對して、かれ等の意見を代表するジョーンズの加入を主張し、結局兩者を併用することにしたのである。

これ等の事情からわれ等は二つの事實を知ることが出來る、第一は米國の全權は絶えず上院を顧みねばならぬことである。米國が締結する總べての條約は上院の批准を要し、しかもその上院は姑の嫁いぢりのやうな態度を有するが故に、常にこれを顧眄せねばならぬ。米國が今回の會議の結果出來あがる條約は、幾つもにせず、一條約に纏めんとする意志があるのは、その一つが上院に引つかゝる場合には、全體の結果を無效に歸する懼れがあるからである。

第二には米國全權はその海軍部内の異論を纏めねばならぬ。米國全權が二月六日に發表したステートメントは、その内容において内外の賞讃を買つたものであるが、しかも不思議なことには、その中に最も重要な一項を記入することを避けた。即ち

『一九三一年までに英米が同勢力に達するべく、英國は五隻を、米國は三隻を廢棄すべし』

とだけはあるが、米國は實際においては四隻を廢棄して、一つの新造艦（英國のロッドネー型）を造る權利を與へらるべきことを提議したことを書かなかつた。

日本が支那に廿一ケ條を突きつけた時に、各國に對して第五條を提示しなかつたことを最も強く批難したのは米國である。その同じ米國は今、軍縮會議のステートメントにおいて、最も不人氣なるべき新造艦案を記入することを避けてゐるのは、不思議なる廻りあはせではないか。

併しながらこれは米國が世間體を誤魔化さんといふよりも、寧ろ部内の大海軍論者の聲を默殺することが出來なかつたといふ方が正當ではあるまいか。そこに最後の戰陣をしいたといふよりも、海軍專門家の說を持ち出して、兎に角一應交涉してみたといふ方が當つて居ると思ふ。

日本に對する提案について、どれだけ海軍側の『專門的意見』が根本をなして居るかは、まだ一週間を經ない現在、これをいふことを憚かるが例へば主力艦廢棄に米國側が反對して居るのはヒリツピン防備問題が最も大きな理由であるに鑑みても(フランク・サイモンド氏がタイムスに寄書して公然そういつてゐる)、第一回の米國の對日提案なるものが、政治案でなくて、軍人案であることは想像がつくと思ふ。

4　七割比率を排す

私はこゝで簡單に私の立場を明らかにしてをきたいと思ふ。私の考へによれば、日本は今回の

會議で明敏を缺いてゐる點が二つあつたと思ふ、一つは根本的なもので、他は技術的なものである。

第一は日本が米國を想定敵國とし、國案を樹立することの可否である。この事は前便にも少しく觸れたけれども、この點について明確な概念を把握しておかなければ、明らかなる結論は生じない。

もし日本が米國を想定敵國とし、國策をこゝから編み出すのであれば——現在然るやうに——海軍側が主張する理論は全部正しいといへる。この想定敵國に對しては、故國のホーム・ウオーターを守備するために七割の海軍力は是非共必要であらうし、これなくして日本の國防は甚だしい危險に暴露されることも事實であらう。米國を想定敵國にするといふ前提のもとに生れる唯一の結論は、七割比率である。そしてこれが日本國民殆んど全部がいだいてゐる理論なのである。

併しながらわれ等の疑問はこの前提そのものにある。問題は日本は米國を想定敵國にしなければならないかどうかである。即ち日本は常に米國と戰爭するつもりで備へて居らなければならないかどうかである。この前提に異論をいだくものあらば、その結論である七割海軍力說は直ちに壞れ落つべきは明らかである。

ロンドン會議の經過を報告すべき任務を負つてゐる私は、今この問題について事理を追ふて詳說する自由をもたない、たゞ私は日本現在の事情は、米國を想定敵國として七割海軍勢力を保持し、莫大なる軍事費を負擔して行くことは、結局國力の發展を妨ぐるものであると主張する者であることだけを書いてをかう。

然らば私は何故、日本の國策の一轉換を主張するか。試みに個條書きだけを並べる自由を許して貰ひたい。

一、日本の現在の狀態は非常に苦痛なくして一等國と戰爭する事にたへない。米國との場合には現在日本の經濟を背負つてゐる生絲（總輸出の三割七分以上）の輸出は止まり、輸入棉花の半分は止る。それがどれたけ經濟的影響の大きいかゞ分る。

二、米國との戰爭は必然に永びく。此苦痛に當面し、現在の日本の社會狀態に照して、社會の變革を企圖する如き不逞の徒の絶無を保證しうるであらうか。

三、かりに是等もないとする。然らば日米が國力を賭して戰はねばならぬやうな問題が何か兩國の間にあるか。それがあるならば、與かり聞かう。

四、國際間の傾向は、一等國間の戰爭は開始する方が困難で避ける方が容易になつて來てゐる。

發達した輿論は最早一國の侵略を許さない。われ等が國策を立てるのに將來を見るべきである。

五、或は米國が支那に對して暴威を振ふことをいふ者もあらう。併しながら日本の對支政策は既に、好むと好まざるとに拘はらず、門戸開放機會均等に落ちつき、幾つもの條約によつて、それ以外に身動きの出來ないやうに縛されてゐる。日本が武力のゼスチュアにより對支政策を行はんとするのは、田中內閣の失敗に懲りざるものである。

六、もし海軍勢力の擴張乃至は維持が、負擔の伴はないものであればそれは『一等國』の廣告のためだけにでもいゝ。併し日本の國情は種々の社會施設、產業發展に全力を傾注せねばならぬ時になつてゐる。日本國民の富力は總豫算の三分の一近くを軍費に割きながら、國內事業に巨費を支出するにたえない。

七、日本の國難は「外敵」から來て居ない。其は少くとも十ケ年以前迄の世界狀勢である。現在は專ら「內敵」に力を注ぐべき時代である。

八、米國は東洋に領土を擴張する如き意志はないといひうる。比律賓の獨立も近い時期に迫つてゐる。米國の野心が經濟侵略であれば、それは海軍力では對抗出來ない。否海軍費を減少して、その方面に備えねばならぬ。

九、日米間の紛爭は無論將來も起るであらう、併しながら是に對しては國際的仲裁に附すべき機關ができてゐる。

以上は簡單にあげうるところの米國を想定敵國とすることの否なる理由である。

5　日本の立場の矛盾

米國を想定敵國となすことの必要がなくなれば、われ等は新たなる發足點に立つて、海軍政策を講ずることが出來るわけである。

新たなる發足點とは何か。日本が東洋の平和を維持するに足る海軍力これである。日本は自から生くるために、また地勢上、東洋における平和を維持する必要がある。殊に支那が今尙舊の如くして、甚だしく安定を缺く以上は、これに對して適當なる海軍力を維持することは元より必要である。

故に政治家は海軍專門家に對し、この東洋の平和維持のために、幾何の海軍力を保持すべきかについて立案を命ずることが出來る。支那沿岸に何程の軍艦を必要とするか、南洋方面との航通路を安全ならしめるために何程の巡洋艦が要るか。更に楊子江方面、日本海方面の海軍力は幾何

を適當とするか。これ等は米國との海軍對抗を眼目とせずに數字に出で來たるべき筈である。

この立場は偶然に英國がその新海軍政策を採用するに當つてとつたものである。英國は過去長い間、二ケ國海軍力標準をその政策としてをつたが、その後、時代の變化と共に一國標準主義となり、それは新興の米國を目標とするものになつた。ワシントン會議からジエネバ會議まで、これがため英國が如何に苦闘したかは何人も知るところである。

然るにマクドナルド內閣に至つて、米國を想定敵國とすることの愚を悟つた。そしてその海軍政策を立案するに當つて、米國を全然考慮から除外することを命じ、この結果、從來の巡洋艦七十二隻案を減少して、五十隻を以て滿足することを發表したのである。これは歐洲の事情及びその屬領——世界に擴がるところの——全部の保護のために必要なるところの海軍專門家の答案である。

この數字はロンドン會議の最中に、海相アレキサンダー氏より發表されたが、如何に大海軍論者の批難の標的になつたかは、この會議に連なつたものゝ何人も知るところである。併しこの批難に拘はらず、それは今や英國の國策として決定したのである。

英國がなしえたことを何故日本がなしえないか。英米兩國が偶々國語を同じくするが故に、同

一行動に出でうるのだと思ふものは、全く世界の事情に迂愚なるものであつて、この兩工業國の間に横はる利害の衝突は決して日米兩國の間の問題の比ではない。

日本がその國策を前述のやうな基礎にをくことによつて、日本の對米立場は甚だしく強きを加へることが出來る。現在日本は比率を出來るだけ澤山とつて、しかもその軍備は減少しようといふ甚だしい矛盾の上にたつてゐる。或は『日本の主張は比率であつてトン數でないから、比率を澤山とりながら、軍縮を實現することが出來る』と主張するものがあるかも知らないが、これは事實に目を蔽ふ强辯であつて、英米の默約が成立して居る今日――英國が約五十九萬九千噸、米國が五十八萬七千噸（主力艦、水上艦を除く、正確な數字は無論今後の交渉に待つ）――日本が七割を望みながら、艦費縮少をいふのは滑稽なる素人論しである。

この矛盾をいだゐて日本の、世界に訴へる聲が小さいのは當然であつた。日本はいかなる晴れの場處に出ても、たゞ『他國を脅威せず、自國を守るに充分』といふ消極的標語に隱れて、それ以外に一歩も出ることをしなかつた。

6　太平洋協定の提唱

ロンドン會議に來た海軍部の人々によると、かれ等は最も理想的な首席全權を若槻氏に發見したやうである。若槻氏がジエネバ會議當時の齋藤實子よりも却つて、適役であるとはその殆んど公然いふ所である。

なぜであるか。若槻全權は海軍の畫いた筋書通りに踊るからである。

畫かれたる日本の白墨の線の間を行くやうに、かれは謹しんでこれから出でざらんことに全力をあげてゐる。この點ではかれは無論、日本が發見しうる適り役である。

併しながらこれ以外にわれ等はかれに何を期待することが出來るか。對米七割の固執がかれに與へられたる任務であつて、かれとしてはそれ以外に出る道がなかつたとする。それとしてかれの道は、あれ以外の方法がなかつたであらうか。

私は始めにこの會議に二つの明敏を缺いたことがあるといつた。一つの根本的な國策については既に述べた。殘るは技術的な問題である。即ち、七割を初頭にかゝげて、そこに最後の陣地を敷いたことの問題である。

これについて全權一行が米國に在る時から、この出方が日本を身動きのならぬ立場にをくであらうことを私は指摘してをいた。既に七割が國防上『絶對最少限度』の海軍力であることを繰り

返し述べた以上は、これから少しでも比率が下がることは、國民を由々敷き不安にをくことである。しかし若規全權は七割と切り出して、交渉の場合に七割全部をとる確信があつたであらうか。われ等は日本全權がその立場を「西太平洋平和の維持」において比率は會議の場合に示すこと、他の英米佛伊がそうであつたやうにすべきであつたと思ふのである。

それもなほ可なりとする。問題は日米の交渉が纏らなかつた時どうするかである。結果からいつてこの軍縮會議が纏らなくても、現狀と大して變化がありはしない。日本は現在勢力を目標として交渉してゐるのであり、會議が纏らなくてもこれ以上の大勢力を新造することは實際上困難であらうし、纏つて七割の比率を得れば却つて一萬噸型巡洋艦（八インチ搭載艦）一萬七千六百噸を新造する結果になる（現在の英米假協定數字でいふので動かないものではない）。一方米國と雖も、その國内の平和論に顧みて、將來對日十對七の割合で建造するであらうとは到底想像することが困難である。

實質的に兩國の海軍力に變化がなければ、この會議の成否はどうでもいゝやうであるが、併し協定不成立の結果、兩國の大海軍論者と無智なる國家論主義者が、たへずこの問題を種に相互に煽動し、國交を甚だしく惡化せしむべきことは明らかである。對手國の一隻の軍艦建造も直ちに

戰爭を想像せしむべきほどの批難を交換するであらうことは明瞭である。マクドナルドとフーヴァアとの協定も、實際的の算盤勘定にあらずして――物質的には米國は更に負擔になる――この兩國の國交を憂えての結果なのである。

米國が日本に七割を與ふることを拒絶するの愚はまた別に論ずべき問題である。對米比率を主張することを否とする私はロンドンに居る間、却つてこれについて日本海軍側の代辯に近いことを英米の新聞に發表して、自から苦笑したほどである。併し日米の比率の故にこの會議を不成立に終らしむべきではない。

故に私は比率について相互に讓歩する代りに、國民の安心を買ふために『太平洋協定』（パシフィック・パクト）とでもいふべきものを締結すべきことを述べて多少識者の贊同を買つた。その内容は

一、仲裁條約よりも強力なものであるが、併しロカルノ協定の如き積極的なものではない（攻守同盟的なものは米國上院の批准をうる見込みは絶對にない）、米國は國際裁判所に參加したからこの條約の作成は案外に容易である。

二、相互に不侵略を聲明し、その隣接海洋及び島嶼の獨立を尊重する。（島嶼といふも問題の

中心は比律賓である、比律賓の戰時中立が出來あがれば最も可であるが、ヒリツピン島が米國領であるに鑑みてこの邊の第一歩は米國側から出づべきものである）

三、この條約は二ケ國だけで締結することが最も望ましい。署名國が多ければその條約が國民的に訴ふる力が微弱である。

日本が米國を恐れてゐるやうに、米國は日本を懼れてゐる。この條約は四ケ國條約とやゝ同巧異曲であるが、歐洲方面にも同じ種類の條約が幾つも存在する。

今のところ日米兩國の交渉が失敗に終ると思ふのは早計で、恐らくはこの文が現はれる頃は纏つてゐるかも知れない。私は寧ろ樂觀論者であるが、併し日米兩國――特に日本が米國を懼れてゐることの大なるに鑑みて、まづ道德的軍縮の必要なるを思ひ、武裝解除以外にかゝる條約が同時に考慮せらるべきを希望したのである。

7　日佛の共同動作

今回の會議において英米の提携が目立つて來れば來るほど、日佛の共動動作は明らかになつて行きつゝある。

始め孤立を覺悟した佛國は、ロンドンに來る早々、首相タルヂュ氏が日本側を訪ひ、兩國專門委員の會見を申し込んだ。この申し込みに對しては拒絶すべき理由はないから應諾したものゝ、日本側はやゝ迷惑の感があつたのは事實である。

然るにその後、米國の對日六割提案となり、日本海軍側の激しい不滿を買ひ、その上に英國が米國に和して踊るを見るや、偶然か否か日本側の態度は變更して來た。たとへば二月七日（金曜）の制限に關する方法の委員會において、佛國は輕巡洋艦と驅逐艦の無制限な噸數融通を主張したに對し、英米はこれに反對した。日本からは、財部、永井二全權が出席してゐたが、佛國の主張に加擔したのである。英國海相アレキサンダー氏は『日本はジェネバにおいては、英米案と同じものに贊成したではないか』と突き込むと、永井全權は『三ケ國會議と五ケ國會議とは自然主張が異ならざるをえない』と答へて、別に理由を明示しなかつたとのことである。

その後、潛水艦問題になるや、日佛の主張は全然一致した。この問題が英米に對する對抗の戰略でないことは無論である。日本は潛水艦に對しては現有勢力（七萬八千噸）を保持することを最初からの目標としてゐる。併しそれにしても時が時とて日佛の提携は如何にも目立つた。

この日本の態度に對して佛國は彻かに感謝の意を表してゐる。ワシント會議當時にあつて潛水

艦の制限に反對したのは、佛國だけであつた。現在全權であるところのブリアンは孤軍奮鬪して、世界の不人氣を一身に集めた感があつた。然るに今や佛國は日本に有力な盟友を發見したのである。佛國は今後においても日本に對してこの偶然の好意を忘れぬであらう。

佛國の態度はいつもながら、傍若無人なばかりに痛快である。この佛國の態度を日本が倣はぬことを不甲斐なく思つてゐる者もあるやうである。併しながらたゞ忘れてならないことは、佛國は歐洲大陸の强國として、その背後に幾つもの國をひきいてゐることである。佛國が一度扇を以て招けば、ポーランド、チエツコスロバキアその他は、直ちにその膝下に馳せ參ずるのである。これに對して日本が立つて、これに一身を共にするものがあるか。日本が獨り頑張つて、これを後押しするものがどこかにあるか。

われ等は自己を主張するのに、どんなに大膽であつてもいゝ。併し自己の立場を知ることは國際政治にあつては極めて大切なことである。

この英米と日佛の、やゝ大きな意味の提携の眞中にイタリーがある。イタリーは今回の會議においては、たゞ佛國と均等勢力を主張するといふだけで、他は殆んど自己の態度を明らかにしない。そして最後までそれで押し通して、落ちてゐる機會を拾はんとするにあるやうである。英米

が各聲明書を發表し、提携密なるを見た佛國は、示威のためにも佛伊の共同動作を示さんとして伊太利に一方の天秤をかつぐことを持ちかけたが、拒絶された例がある。伊國としてはどうせ澤山ない海軍である。割あてはたゞ一等國の體面上、とつて置かうといふにとどまる。一番氣樂な立場がイタリーである。

8　時代を現はす會議

今度のロンドン會議ほど『時代』を現はしてゐるものはないと思ふ。それは見ようによつてはまだ世界第一を失ひきらないロンドンといふ町に開かれた一大時代劇だといつてもいゝ。

この時代劇の背景は、見渡す限り恐れと迷信に滿ちてゐる。かれ等が今なほどれだけ『外國』といふものを懼れてゐるか。自分の國及び自國人は、常に正義に則つて、決して亂暴な不信を敢てすることはない。が、『外國は絶えずわれ等を狙つてゐるのだぞ』、それは何れの國もが有してゐる恐怖である。

私はさきに今回の會議において英米が仲よく舞臺で踊つてゐるといつた。併しそれは極めて大きな意味からであつて、仔細にこれを見れば戰鬪艦の均等勢力の問題について、巡洋艦の割あて